

さうでないことは誰しも知つてゐる。日本の今日の時局に對する責任は、日本國民全體が感じなければならぬものであること勿論であります。

近衛公が今日の事態を招致した責任と、これを解決する責任とを、事變當初の首相として又現首相として、特に重大に感ずることの當然なるを認めると共に、また近衛公の責任感が道徳的責任といふことの性質上、近衛公として公以外の誰人にも、これを移し得ないといふことが、おのづから公をしてかくいはしめたものであらうと思ひます。今日の時局は決して近衛公だけの作つたものでも、公だけに責任を負はせる性質のものでもありませんが、しかし近衛公が公人として首相としての責任の遂行は、あくまでも自分のものであつて他人には譲り得ない自己の責任感によつて、果す外はないのであります。

それは決して獨り近衛公のみならず、今日の難局に處するところの國民としては、その國家全體に對する責任を、我々個々が我々自身の責任として、我々の心の中に強く感ずる、さうして我々のゐるところの各々の場所を通じて、その責任感に基づいたところの行爲を實行してゆく。これが我々日本國民としてなすべきところの行動の基調であり、行動の中心となるべきところのものであると思ひます。この心こそ、今日に於いて最も要求されるころの

ものであります。他人の責任を問ひ、他人を批判し、攻撃することも、或る場合に必要ではあります。それはやはり今いつた自分の責任感に基づき、これから泉み出たものでなければなりません。

今の日本では、他人を叱咤し、鞭撻し、指揮し、命令し、他人の責任を問ふ人が、必しも自分の責任を感ずる人でないといふことが、深き國の憂ひだと思ひます。

日本國民の總てが、自分の國家に對する責任を感ずる、つまり國民が國家全體に對する責任を自己の衷から深く感じ、さうしてその感じに基づいて行動するといふことが、今まで繰返した如くに何よりも重要なことであり、かくして國民各自が自分の責任を深く感ずると同時に、他人に信賴するといふ氣持になり得たならば、よし國歩は艱險であつても、張り切つた氣持と安らかなる氣持とによつて、日本の現在と將來とを背負つてゆくことが出来るのではないかと思ひます。

青年に臨む態度

今の青年學徒は、國家未曾有の難局に際して様々の要請を課せられる。これは已むを得ぬことであり、また已むを得ぬことである以上、深き覺悟を胸に湛へて、進んで國家の急に赴くべきであることは勿論である。

ただ併しここに考へねばならぬことは、我々青年學徒を鞭撻したり叱咤したりしてゐる年輩の連中が、果してこれまでに十分に國民としての責任を盡し、その言ふべきを言ひ、爲すべきを爲し、排すべきを排し、よく勇敢に、よく誠實に、よく勤勉であり得たかといふことである。我々は果して青年學徒に對して、我々はこれだけの覺悟と實行とを持ち來つた、君達はこれに倣へばよい、といふだけの自信を持ち得るか。

私をして忌憚なく言はしむるならば、今後三十年、國家の重き難局を負擔すべき現時の青

年學徒は、我々の持つた覺悟や我々の遂げた實行だけでは到底足りない。更に勇敢に、更に健康に、更に慎重に、更に聰明に、更に正直に、更に勉強に、更に忍耐であつてもらはねばならない。それについては我々先輩が彼等の手本にはならず、彼等をして我々の爲さざるところを爲さしめ、我々の爲したところを爲さざらしめ、我々より遙かに以上の勉強をしてもらひたいと希望せねばならぬことに對して、我々は一つも恥かしい思ひをせずにするものだらうか。

勿論、國民は單に個人的責任を負ふのみならず、國家的社會的責任を負はねばならない。先人が豊富と樂易とを與へてくれた時には、平氣でこれを受け、先人が窮乏と困難とを與へてくれた時には、ぶつぶついつてこれを避けることは出来ない。先人の不足はこれを補ひ、先人の成績は更に増進せねばならない。それはつらくても癢に障つてもやつてもらはねばならない。併しこのことは決して、さういふものを次代に譲り渡した連中の責任を帳消しにすることでも、何でもない。彼等はただ威張りくさつて青年達に命令さへすれば、彼等がいふことを聞くと思ふのは非常な誤想である。彼等にして彼等の誠實の不足と思慮の足りなさことを自覺しつつ、彼等自らを鞭撻すると共に、國家の情勢のいや増す困難に處すべき青年の覺

悟を切々と説いたとしたら、感激性に富む青年達がどうして奮起しないことがあらうか。

我々は青年を脅かさうとせず、我々の誠を信頼せしめねばならない。若しこの心懸さへも缺くならば、百の説法屁一つに止まらず、却てその害の甚大なるものがあらう。これ断じて忠君を説き愛國を言ふものの取るべき態度ではない。

少年の旅行に就いて

旅行が少年の情操に及ぼす影響は、心の和かな好奇心に富んだ時代として、善悪共に著大なものがある。併し固より弊害は何にもある。やはり旅行は許される条件の下に出来るだけやつた方がいい。ただ今日のやうな交通混雑や食料缺乏が、特に旅行中に於いて、少年に人心の險惡な利己心、排擠的行爲の露骨な發露を見せつける危惧が多いことを思ふと、當分は中々困難かと思ひます。

少年にとつては汽車辨を食ふことも宿屋の飯を食ふことも、大變樂しいことである。況んや今まで見なかつたものを見、美しい景色に接し、今まで乗つたことのない乗物に乗るといふやうなことが、彼等の人生に對する視野を擴げ、彼等の將來の展望を明るくする効果は大なるものがある。

もう一つ、旅行をおつくり思はず、相當の年になれば一人で遠方へ行く元氣のあること、外地や海外へまでも出かける機会を興へることが、日本人の將來の活動が今までとは比較にならぬほど廣大になつた今日に於いて、特に切要なるを覺える。

かつて高等學校入學試験の頃水戸へ行つたことがあるが、東京の少年と覺しい入學志願の子弟には、大分母姉が付きそつてゐた。いたづらに東京人の小さい誇を抱きながら、足一步東京以外の地へは一人で行けないやうな家庭教育は、排斥さるべきだと思ふ。

日々の生活

誰人も皆日々の生活を持つてゐる。さうして日々の生活は多くはその人々の職業によつて規定されて居る。つまり職業が日々の生活の具體的内容を形造る。田畑に鋤を持つ人、役所に務める人、軍務に勞する人、工場で汗を流す人、會社で算盤を取る人、といふ風に、各々の職場が彼等の生活の色をも中實をも決めるのである。睡眠や休養、衣食や住居、家族や交友は、人間に共通した欲求や必要ではあるが、かうしたもの内容や分量も亦、その人々の取る職業によつて色々に規定せられるのである。人によつては、家族との團欒を楽しむことが出來ずに、終日終夜工場に働く者もあらう。又交友のしんみりした味を味ふことを知らずに、御得意筋をお相手に毎晩酒を飲むといふ商賣もあらう。だが併し、人はかうした日々の生活を積むことなしに、一生の生活を形造ることは出來ない。日々の生活を輕蔑することは、

やがてその一生を臺なしにすることである。日々の生活を、又その大部分主要部分を形造る職場の生活を充實させることが、即ちその人の生活を充實させる所以に外ならない。

併しかうした日々の生活は、アメリカのエマスのいつたやうに、得て繰返しになりがちであつて、我々の生活を意義あらしめる發展でなくなつてしまふ。日々の起きて働いて寝る生活が、何の感激も情味もない機械的なものになつて、日々の生活に日々に新たな局面が開かれない。その人の生活には希望も歡喜もなくなり、ただ食はんが爲の手段としての職業となつてしまふ。世の中にはかうした生活をして居る人も随分多いらしい。かうした生活に不平と不満を抱いて、何か局面を展開しようと思ふ人もあらう。あせつた結果取り返しのつかぬ失敗を犯す人もあらう。又不平と不満を抱くだけの元氣もなく、空しくこの裏に老い朽ちる人もあらう。報いられる所の薄い生活、自分の自由に用ひる時間の少ない生活、自分の創意が行はれずして人によつて動かされることの多い生活に於いては、殊にかうした硬化が生じ易い。けれども又他面に於いて食ふが爲に取つた日々の職業生活が、その人の興味を引いてその人の生活と離しがたいものになる例もある。人間は總じて何の外的強制——例へば自分が食ふ爲とか、家族を養ふ爲とか——なしには仕事をしにくい、又内的にその仕

事と結びつけられることなしには、即ちその仕事とその内生活とに何等かの生きた繋りが出來なくては、又仕事をやつてゆくことは出來ない。宗教改革者であつたドイツのルターといふ人は、初め大學で法律をやつたが、それに安心が出來ずして神學の方に移つたといふ話である。宗教改革といふ歴史的使命を帯びて此世に送られたかと思ふルターのやうな人にも、かういふ不安はあつたのである。その人に合はぬ仕事や職業にいくら興味を持たうと思つても、遂にむだに終るといふこともたしかにある。併しそれより世間に多い例は、罪を職業と仕事とに歸して、自分の打ちこみかた工夫のしかたの足りぬことを一つも反省せず、いつまでもその職場に落ちつけぬ人々である。かういふ人は世を終るまで日々の生活をほんたうに持つことが出來ず、又自分を満足させることも人を幸福にすることも出來ずして、竟に一生を空過する人である。さればといつて日々の職務に對して何の興味も感激もなく、つまり自分の魂との交渉なしにその日その日をつぶしてゆく人の生活に、意味があるともいへない。

我々は日々の仕事を持つことによつて日々の生活を持たねばならない。併しその日々の仕事を通じて、我々の生活を擴げ、深め、高めて行かねばならない。これは日々の仕事をどう

にか片付けてゆくことに比べては、遙かに困難な、口ではいへても實現は中々困難なことである。我々が日々の仕事を忠實に果して居る中に、無意識の間にかうした發展が與へられることもある。それは確かに日々の仕事を抛棄して徒らに空なる理想を追ふには勝れるものがある。けれども我々が日々の仕事を單に繰返しに終らしめることなく、これを積んで我々の生活を成長せしめ發展せしめる爲には、我々が仕事に没頭すると共に、我々自身が仕事に役せられないで仕事を役する、仕事を支配することが肝要である。「所在に主となる」といふことは、禪家の説く所と聞いてゐるが、我々は我々の心懸によつてこの困難事をやりとげることが必要である。さうはいつてもこのことは固より難中の難である。下積みの報いられることなき苦しい仕事の中で、この仕事に打ちこむと共に、この仕事によつて自分を磨き、この仕事をして自分の生活全體の意義を生ましめるといふことは、人に向つて説き得ても、自分にそれを實行することはむづかしい。これをよく遂げ得る人があつたならば、その人の社會的位置は低くても、その人は尊敬すべき人物である。その人の前には我々は頭を下げねばならない。さういふ人々こそ實は國家社會の砥柱である。かの大臣病者の如きは、新聞紙に寫眞の度々出ることや、どこへ行つてもペコペコ頭を下げられることを、此世に生きる生き

がひと思はない人に取つては、およそ無意味な生活である。

併し我國では、各々の職域に於いてかうした生きがひを立派に實現して居る人に對する尊敬が足りない。又國家のかうした人に報いる道が十分でない。だから職業や位置によつて無造作にその人に對する價值がきめられ、その職域に於いてその人が打ちこんだ價值ある仕事をして居るかどうかが、多く顧慮されない傾きがある。これは各人の心懸によつて改められると共に、又他方に於いて國家の教育や政治的考慮によれる改善が考へられねばならない。併しかうした社會的不備にも拘らず、報いられることを考へず、良心を以てその職に盡して居る人々を見聞する時、我々は實に衷心より敬仰と感謝との念を禁ずることが出来ない。

支那にも「性相近し習ひ相遠し」といふ詞がある。これは我々の生活に於ける習慣の重要性を力説したものである。又これは西洋の諺だと思ふが、「習慣は第二の天性」といはれて居る。我々の生活には何一つ努力と工夫を待たずして出来るものはないが、併しその努力と工夫とは、結局それが自然に自在に出来るといふ境地を目的とするのである。即ち我々は自然のままの状態に安んぜず、それに抵抗しそれを克服することによつて、我々の生活を進歩させ向上させるのであるが、同時にさうして高められた境地を、自分にとつて自得された、

自然なものと思ふべきではない。だから我々の生活には常に自然の征服と、かくして得たるものの自然化といふ二面を缺くわけに行かない。さうして結局かくして我々の天賦の本性が實現され、我々の自然が完成されるのである。廣い意味でいつても、我々の文化や道徳は、我々の自然に對する抗爭や征服のやうに考へられるが、實は自然の完成なのである。我々の先きに生まれた多くの先覺が、この爲に如何に苦勞したかを考ふべきである。我々が今安々と實行したり享受したりして居る多くの事柄も、少しく考へればかうした先人の努力の汗や血によつて興へられたことを思へば、我々の感謝すべき事物の意外に多いことを、つくづくと思はざるを得ないのである。

我々の日常生活を考へて見る時、我々は實に自然に恵まれて居ることの多きを感じるのである。例へば我々は我々の呼吸を無意識的に自然にやつて居る。若しこの絶えず營まなければ忽ち生命の斷絶する——いのちといふ詞は「息の道」もしくは「息の内」といふ意味だといふ説がある——呼吸を、我々が意識的に努力してやらねばならぬとしたならば、我々はその努力に疲れて、外の總ての重要な生活行爲をすることは出来ないであらう。病氣はかうした我々の無意識的に自然に行つて居る活動を妨げる、さうして同時にその他の我々の生活行

動を妨げるものである。人はかういふ病氣に會つて初めて、平生何の氣もなく無意識に自然に恵まれてやつて居る行動の有難さを感じるのである。かうした事例は考へればいくらでもある。さうして第二の天性といはれる習慣の我々の生活に於いて占める意義も亦、これに類するものがある。我々の日々やつて居る些事、例へば洋服を着るとか電車に乗るとかいふ事にしても、生れて初めてそれをやる時のことを考へれば、我々は、それに對して妙に緊張したり不安を感じたりすることが、意外に多いのを氣づくであらう。今私の所に琉球の女學校を出たといふ女中が來て居る。彼女も多くの東京を志す女中の如く、洋裁をやりたいとか生花を習ひたいとかいふ理想を抱いて居るのであるが、併し日常の掃除とか食事の仕度とかが一つも出来ない。それを習得するまでは洋裁だとか生花だとかは思ひもよらぬ事である。だが彼女がさうした日常の平凡事を習得し、それを簡單化して時間の餘裕を生むことによつて、彼女の理想實現の途につき得るか、或は途中にして自分の女としての仕事の出來ぬがひなさを自覺せず、洋裁や生花の出來ぬ女中生活を無意味なりと斷定するかは、今の所ちよつと未知數である。彼女を當惑させる一つに電話がある。電話が外からかかつて來た時、彼女はそれを主人に通ずるまでに間違へてそれを切つてしまふのである。さうして間違へた後それ

を訂正するつもりか、態々それを下の方にひつかけるから、相手はいくらかけても通じないことになる。併し電話を受けたこともかけたこともない人にとつて、かうしたまごつきは已むを得ぬことである。恐らく今の彼女にとつて電話のかかるといふことは頭痛の種であらう。けれども彼女はそれを度々繰返すことによつて、それに慣れて苦にせぬ位の修業は出来るに違ひない。我々の生活に於いては、かうして得られた習慣が、自然によつて興へられた活動と共に、我々の生活の基礎となつてくれるが爲に、初めて我々の新しい試みや向上の道が實現されるのである。習慣の我々の生活に於ける重大意義、この習慣が我々をよい方に向けるかわるい方に向けるかが、我々の生活そのものの方向を決定することは、上に説く所によつて十分理解の出来ることである。

習慣の意義の重大は、かくて縷説を要しない程である。併し我々の生活を單なる反復とし、我々の生活の發展を妨げてこれを硬化するものも亦習慣である。バスの女車掌が初めてその職務に従事する時の緊張と苦勞とは大したものであらう。併しそれが慣れて來ると共に、機械的になつて冷かな事務的な、出来るだけ勞力を惜む行動となつて來ることもあらう。我々が良い車掌と思ふものは、かうした習得によつてよく勞力を節約し得る、即ちむだな緊張を

省くと共に、その職務上に於ける生き生きした感情を失はぬ人々である。私は電車やバスに乗つた時、かうした車掌に對して衷心から敬意を表することがある。

習慣は養はれねばならぬが、同時に又打破されねばならない。新しい習慣を始めるのに勇敢でなければならぬが、又舊い習慣を打破するのにも勇敢でなければならぬ。我々の日常生活は極めて平凡無事のやうであるが、常に前門に虎を防いで後門に狼を迎へる危険を有することを、我々は心しなければならぬ。(昭和十七年五月二十五日)

多忙

私は昔から多忙を誇とはして居ない。東京へ歸つて以來人に會ふと、よく「おせはしいでせう」といはれる。私は少しきまりのわるいやうな心持で、「いや、それ程でもありません」と答へるのが常である。實際をいへば私の近頃の生活は幾分多忙でないこともない。併し私はこの多忙を決して全面的に肯定しては居ない。お前の生活はこれでいいのかといふ氣が始終して居るのである。尤も私の多忙などは、世間に時めいて居る大臣だとか次官だとか局長だとか、總裁だとか重役だとか、或は此等の人々に仕へて居る祕書だとかに比れば、恐らく多忙の名にさへ價せぬ程のものであることも亦確かである。今や大東亞戦争といふ重大時局の下に、仕事は益々多くなり、細くなり、事務は多端になり、繁雜になつた上、それが又のつびきならぬ焦眉の急を以て迫るのだから、多くの人々は動もすればそれに追つかけら

れて、神経衰弱にならうとして居る。而も總てのかうした人々が、本當にその多忙をうべない得る程の生きがひを感じて居るかどうか、或は徒らに忙しく徒らに疲れて居るといふ傾はないであらうか。これは我々が考へて見てよいことである。

學生の勤勞奉仕といふことに就いても、昨日かういふ話が出た。突然勤勞奉仕を課せられることは學校教育を攪亂する。ところがこの奉仕に就いて、文部省、厚生省、商工省、さうして多分は商工省の管下にある（？）職業指導所等、色々な機關を通過しなければならぬ爲に、例へば工場なり工廠なりの要求が、學校當事者に達するまでに日數がかかつて、それが結果としては突如たる命令となつて現はれるといふことである。厚生省が出来たのは國民の厚生に關する事務を統制する爲であらう。職業指導所も亦職業の需給者相互の間に立つて、勞務を圓滑に運び、又或る一方に偏することなく雙方の要求を充たさせる爲であらう。學生の勤勞奉仕も勞働者の仕事と交渉があるから、かうして一應指導所の手に觸れるといふことになるのも、尤もであらう。併し文部省が學生の總取締として、學生の教育といふ立場から學生のあらゆる行動を統轄する役所であつて見れば、これは又是非文部省によつて監督されなければならない。色々な役所が出来て、そこへ或る仕事なり事務なりを統制するのは、決

して本來は、かういふ風に仕事を多端にして能率を減退せしめることを目的としたのではない。否、統制といふことは、中樞に明快なる頭脳があり、身體のあらゆる末端に強健なる神經が行きわたつて、中心から末端への命令と、末端から中心への傳達とが、簡単に明瞭に相通じて凝滞がなく、中樞の賢い取捨選擇によつて、徒らに神經や手足を勞せしめることを避け、又妄に眼をのみ勞して耳をむやみに遊ばせたり、足を耗り減らして手をだらけさせたり、又眼に對して耳の仕事をやらせたり、頭に足の代理を強ひたりしないやうにし、全體的に考慮をくばつて經濟的に勢力を善用し、さうして出来るだけむだを省いて、事務を簡捷にすることを目的としたものであらう。併し世の中のことは皆互に相關聯して居る。一つの事を統制することは、それをその外は一切から引き離すことにはならない。或る被統制體系と他のそれとは各々統制原理を異にして、例へば一つは厚生上、一つは教育上、又他の一つは經濟上の立場から統制をしても、當の對象は抽象された原理の觀念の如くお手輕には分けられず、具體的にはやはり一つである。従つて統制が却て事柄を單純化しないで複雑化したり反復的にしたりすることもある。かういふ場合に諸々の統制原理の關聯を理論的に整理する必要があると共に、又現實に即してのその關聯の重視や輕視や選取や省略やをやらないと、統制の

實際的目的は到達せられない。統制なるものは時局の重大や事務の繁多や物資の缺乏などといふ理由から、今までの如くでたらめな思ひつきで出来なくなつた仕事を、徹底的に計畫的にやる意圖の下に行はれたものに相違ないが、唯今の所は却て事務を繁多にし、人間を疲らせて居る傾もなはない。これはやがて次第に是正されることであらう。

私が今の日本人の一つの考へ違ひと思ふことは、人間が多忙であるのがよくて、餘裕のあるのがわるいと思つて居るらしいことである。殊に非常時局に於いて、總ての人が皆せかせかと息を切らして走らないと、愛國的でないといふやうな氣配が、何となく世間に見えるやうである。少し長く息をして居ると、よつてたかつてせき立てるといふやうな傾がある。殊に青年に對してそれを強ひる弊がないとしない。中にもその命令者に信念がなくて、單に時代に便乗して、結局は自分の名利を目ざして居る場合——これは彼等の排撃する所謂自由主義、個人主義である——そこに一貫した生命も魂もなく、徒らに青年をいらいらさせたり疲勞させたりするに過ぎないことも多い。

總ての改革は、何よりも改革を企圖する人自身の痛切な要求から出て来るものでなければならぬ。所がこの頃の改革若しくは改變を見る時、この肝腎な魂を缺く爲に、改革案がま

るで作文のやうに美辭麗句を並べたり、景氣の好い文句を連ねたりして居るに拘らず、一向
相手を動かす氣魄がない。一方には大臣の訓辭のやうに徒らに堂々たる所があると同時に、
他方にはジャーナリスティックに俗世間への色氣が非常に濃厚である。かういふ改革案を作
製する爲に、多忙な人が多忙を重ねたかと思ふと、この改革案そのものがその實行に就いて
苦心されたり工夫されたりする暇もない内に、又後から後からと續出する作文的改革案の爲
に忘れられ、甚しい場合にはその立案者さへそれを忘れて、矢次早に次の改革案で人目を引
くことに苦心するといふ有様にさへなる。かくして多忙なる現代の生活は更に多忙を加へ、
後に疲勞を残すのみならず、この疲勞を休める暇もなく、更に焦躁を促さねば止まぬのであ
る。現代の世相には確にかうした一面がある。これを救つて餘裕と弾力性とを養ふ必要は、
長期戦といふ立場から考へても、痛切に存するのではあるまいか。

多忙に混亂して居る世の中にあつて、個人も亦多忙を免れることはむづかしい。併しかう
した社會的弊害は、社會制度的に又社會道德的若しくは風習的に改められると共に、又個人
の工夫に待たねばならない。社會の風習といへば、交通機關の大混雜が一例の順序を守らせ
る風習を作つた如き、又物資の缺乏が晝間に酒を飲むことを禁ずるに至つた如き、人は兎角

時局の悪影響をのみ口にする傾があるが、此等はたしかに時局の生んだ好影響である。個人
が社會の多忙に負けてその生活力を散漫にし稀薄にするやうになつたならば、社會國家の生
命力も亦消耗することを免れない。「多忙で困る」といひながらそれを得意にする人は別と
して、殊に精神的な仕事に従事する人は、この際勇氣と工夫とを以てこの多忙を處理する必
要があらう。(昭和十七年七月一日)

4

小宮豊隆の『夏目漱石』を読む

その一

小宮が漱石傳を書くといふ志を語つたのは、漱石の死の直後であつた。私はその頃から、漱石傳を書くものの小宮の外にはないことを知つて居たけれども、小宮の凝性が殊に漱石に對する敬愛によつて高ずる餘り、この漱石傳は中々出來まい、或は單なる夢想に止まりはしないかを恐れた。漱石死後『漱石全集』は頻に版を重ねたが、この編輯の中心者は、否眞の意味での編輯者は、殆ど小宮一人であつたといつてよい。漱石生前からも、小宮は所謂漱石門下の中で、漱石に對する感情と共に漱石に對する知識を最も多く持つて居た。この知識といふのは單に理解とか洞察とかいふ意味ばかりでなく、精細なる文獻的知識をも意味した。

仲間で漱石が問題になる時、小宮は常に掌中に物を指すが如く、その記憶中にある事實と文獻によつて、自分の議論を證し又相手の議論を反證した。この小宮の知識は、全集の編纂によつて一層精確に又詳密になつたことは否定し難いが、併し小宮をしてこの『夏目漱石』を書き上げしめるのに與かつて最も力のあつたのは、恐らく最新の決定版『漱石全集』に月その解説を書くといふ課題であつたらう。比較的短日月の間に漱石の一切の文獻に觸れ、毎日の時間の大部分を漱石に集中するを餘儀なくされたといふ事情が、小宮をして漱石の全貌と核心とを、又その一生涯に亙る變化と發展とを、把捉せしめるのに使じたことは、決して想像に難くない。かくして堂々八百八十頁の大作、力作『夏目漱石』が、小宮自身の豫期よりはいくらか遅れたにしても、我々の期待よりは遙かに早く世に出たことを、私は小宮の爲にも、漱石の爲にも、日本の文壇と學界との爲にも祝福したい。

事實これだけの著作は決して容易に世に出るたぐいのものではない。漱石が生きて居てこの書を見たならば、或はその或る箇處に就いては異議を唱へたかも知れない。併し小宮がこの書に注いだ渾身の努力と、又この書を作つた敬虔な態度と、この書に現はれた漱石に對する愛重の念とに對しては、漱石は恐らく心からの感謝を捧げたであらう、否、心の素直な漱

石のことだから、或は勿體ないといふ程の感じさへ抱いたかも知れない。小宮は私の友人ではあるが、私は彼の情操と知識とを今の日本の時流に挺んでたものとなすことを、一概に親知に倣する僻見だとは考へない。しかも彼は漱石の世界に分け入り、漱石の眞面目を傳へることを、殆ど半生の課題として悔ゆることを知らなかつた。これは、この仕事が結局小宮自身の仕事であり、漱石に深入することが同時に小宮自身の魂を啓くといふことになるのである。出来ることではない。人は獨創と獨立とを欲して却て模倣と皮相とに墮しがちである。小宮は漱石に没頭することによつて、恐らく自家の眞面目に接する喜びをも得たであらう。彼のこの仕事は決して人から強ひられたり頼まれたりして出来たものではない。この意味に於いて『夏目漱石』は、出来得るだけ漱石自身をして語らしめ、小宮自身を出し又は語るまいと努めて居るに拘らず、期せずして實によく小宮を出し又語るものである。それは漱石の嚴密な記實であると共に、逆説的のやうではあるが小宮の創作でもある。夏目漱石に幾何の缺點があるにしても、小宮を引きつけてこの傳記を書かしただけで、彼が或る偉大と眞實とを有して居たことを證據だて得る。傳せられる者と傳する者とのこれだけの組合せは、中々求めて得られるものではない。それは實に有りがたい逢遇であつた。この書物の貴さは

先づこの點にあつて存する。

二

小宮は友人の科學者寺田寅彦から、科學的な頭腦といふ折紙をつけられた。小宮の學的な著述として例へば『芭蕉研究』の如きは、小宮の藝術的鑑賞の力と共に、その精到な科學的考證の頭腦を證するものである。一體小宮の考證は、その題材を當の作者の中心生命に結びつけることによつてそれを生かさうとする努力に於いて、在來の考證家と撰を異にし、さうしてその題材の慎重な吟味と考察と選擇とに加へて、この題材を組織し結合する仕方に於いて、精嚴な心理的、論理的用意を怠らないといふ長所を持つて居たが、この書に於いては、この特色が一層恰當の舞臺を見出して、十二分に發揮された觀がある。この漱石傳が單にかげがへなき著者その人を得たといふに止まらず、それは機縁が具し且熟して、實に出るべき時に出たといふ感じが深い。

『漱石全集』が始めて世に出た時、故人のノートの端にかきつけた日記感想を始め、斷簡零章までが悉く網羅されたのを見て、私の或る友人は、死後にあんなにまで何もかもさらけ出されてはたまつたものではない、あれが又故人の心になふものであらうか、と批難をこめ

た感想を語つたことがある。一たい全集といふものは、作者の死後に作られるのを原則とするのであり、斷簡零章までも集めて残さないといふことの可否も、その人の社會的歴史的意義によつて左右せられるものであるから、當人の意志如何は、特別な意志表示でもある場合の外は、あまり問題とするに足りない。しかし小宮のこの書に於けるが如く、その日記、斷片、感想、書簡の類が、漱石の内生活を闡明する題材として、實に遺憾なく利用されて居る實例を見ると、ああいふ斷片の一々が、實に漱石といふ全體の生命の片鱗として、その悉くが生きて來、各々が意義を發揮して來ることをしみじみと感じさせられる。かうした斷片を丹念に探し出し、丁寧に整理し、編輯した當人が、主として小宮自身であつたといふことの彼のこの利用に便じたことを考へると共に、小宮が一々此等の零細な材料の中から、漱石の生活に通ずる筋道をたぐり出した熱心と技倆とも、十分賞讃に價する。例へば世に發表された「猫」とその腹案との比較考察の如き、或は「行人」に對する作者の打込みかたを證する書簡の引證の如きは（七六九）、その多くの中の一例に過ぎない。小宮が色々な點に於いて漱石傳の最適任者であるといふに止まらず、漱石の門下中よくかういふ仕事の煩に堪へ得るものは、恐らく小宮を措いて外にあるまい。而も更に貴いことは、この面倒な材料の探索も選擇

も、その根氣も丹念も、結局は漱石に對する愛によつて命づけられて居るといふことである。

この傳記の最も肝要な特徴は、漱石を内在的に傳へたといふことである。それが前にもいつた如く、出来るだけ漱石自身をして、即ち漱石の書簡、日記、創作をして語らしめる、といふことになつて居る。この著者の態度は或る場合には讀者に煩雜の感を與へさへもする。

著者は先づ一聯の文章を引く、さうしてそれを解明する爲に又その中の文句を繰返して列擧する、又同一文章が様々な見地から様々な場所で引かれて居る。そこに無用な重複のあることは皆無といつてよい位であるが、傳記文學の技巧としては今一工夫を要する處もあるやうに想はれる。併しこれとても小宮が、自分の詞で漱石自身の思想や感情を代辯したり總括したりすることによつて、漱石を主觀的に小宮化することを恐れた爲であり、小宮自身が序文中でいつて居る「私が漱石を敬愛するのあまり、此所で傳記記者の根本の心構へを取り外し、最負の引き倒しをしたり、或は自分が漱石になつた氣で、漱石を描きながら、實は自分の我を人に押しつけてゐるといふやうな事が、ないやうに念じる」といふ用心の一端を示すものだとすれば、それを批難する氣にはなれない。

この傳記は、小宮の從來の文章中で、最も肩の凝らない、平らかな書きかたであるに拘ら

ず、この用心と自制とが幾分それを讀みにくくし、それに創作的流動と奔放とを與へなかつた理由ともなつて居よう。併し又その今一つの重大な理由は、この書がその表現の比較的な平易に拘らず、實に一個の立派な學的著述だといふ點にも存する。この書が出来るだけ學的表現を避けたに拘らず、常に學的用意の下に書かれたといふことが、一般の讀者には或は漱石をむづと把むといふことの妨げになつたかも知れない。學的用意といつたのは、先づ第一には材料の博搜である。この點に於いて著者は、今まで既に他人の企及し難い強みを持つて居た上に、この書物で更に勉強を重ね、漱石以外の關係文獻の吟味、漱石の友人故舊の談話の聴取その他に就いても、殆ど煩勞を厭ふことがなかつた。第二にはその材料の批判と評價とについてである。小宮は個人的には漱石に最も近かつたに拘らず、從來も逸話的に自分と漱石との親近關係などを語つたことは殆どなかつた。漱石の傳記、記實たるこの書に於いては、さういふ傾向は一層影を潜めて居る。これは小宮の漱石に對する態度の慎重と敬虔とを示すものに外ならない。固より此等材料の批判に關しては、實質的に小宮に全然たる見誤りが無いとはいへぬかも知れない。併し少なくとも態度として小宮はその最善を盡したといへる。例へば材料選擇の場合、その一つなる漱石の書簡の引證の如きも、小宮は必要な場合

にそれに最も適切なのを引證して、その書簡の相手に對する好惡によつてそれを取捨するやうな私意や、又この機會に自分を大きく出さうとするやうなさもしさを一つも示して居ない。これは傳記者としては當然の用意であるが、併し誰人に對しても望み得られることだとはいへない。

つまりこの書に於いて小宮の企てたことは、漱石を漱石自身から見、内在的に漱石の魂の發展を、しかもそれを文獻と材料によつて客觀的に跡づけようとするにあつた。漱石の時代や作品も、むしろ漱石自身の人間と生活とから眺められて、時代から又時代の文化史的觀點から漱石を眺め、若しくは漱石の文學を時代の文化や文學の潮流の中に定位するといふこと、即ちさういふ意味で漱石を超越的に批判するといふことは、この書に於いて小宮の企てる所でなかつたらしい。漱石の評價がこの方面に於いて重大な一面を後來者に殘して居ることは否定せられない。併しその後來者達がかかる文化的批判を漱石に加へる爲にも、先づ顧みられねばならぬものは、漱石の内在的發展である。さうしてそれを知る爲には、この書は是が非でも讀まれねばならぬ重要文獻である。漱石は恐らく我々の世代の後にも研究されねばならないし、又されるであらう。小宮の研究は其自身立派な建築であるが、併しそれを

最も少なく見積つても、此等の研究に對して確かな基礎建築を提供したといふ功績を否認し得ない。この書は又漱石の思想内容や生活課題を殘す所なく闡明し解決したとはいへない。けれども我々はこの書を読むことによつて、これを手引としてぢかに漱石の世界にはひつて行かうとする要求を盛に刺戟される。これは漱石の偉大さを示すと共に、又この書のよさを語るものだと思ふ。

三

讀者の中には、或はこの書が漱石の文學的作品に即すること多きに過ぎるのを、物足らず思ふ人があるかも知れないが、これは漱石の最も重要な活動であり、漱石の内面的發展の本質的なものが、その創作に表現されて居る以上、事態と内容との必然的に要求することであつて已むを得ない。併し小宮は既に『漱石襟記』に於いて、又『漱石全集』各卷の解説に於いて、漱石の作品に就いては随分多くを語つて居る。その後でそれとの重複を避けて、しかも内容ある記述を試みるといふことは、中々困難な課題であるが、私の見る所によれば、小宮はかなり見事にこの困難を切り抜け得て居る。大體に於いて全集の解説は作品を主としてその側から作者の生活を見、この書に於いては漱石の生活を主としてその側から作品を見る

といふのが、小宮の目ざす所であつたらうと思はれる。

併し日記とか感想とか手紙とかと違つて、作者の作品と事實、更に狭くは作者の實生活との關係を決定するには、そこに多大の困難が存する。最も卑近な例はモデル問題であり、普通の讀者は作品に向つて直ちにモデルを求めようとする。「坊つちゃん」の如きは、このモデル問題で世間にセンセーションを起し、主人公坊つちゃんの性格と活動との一面に利用された或る實在の人物——この人は新聞によると近頃逝去した——の如きは、自分でそのモデルを名乗り出し、作中の自分のしないことまで自分がしたといひ、架空の話まで事實にしてしまはうとさへした。小宮は漱石自身の生活を説明する爲に、常に書簡、日記、斷片等のみならず、その作品からも少なからぬ援用を敢てして居る。作品の中には漱石の経験した外的事實もあり、内的事實もあり、外的内的に事實なることもあり、作者の現實であることも空想であることも理想であることもある。併し如何なる意味に於いても、作者の作品と生活とが密接な關係にあり、作品が作者の生活の産物であることが否定されないと同時に、作品からして作者の實生活を導出して來ることに多大の危険が伴ひ易いことも亦いふを須たない。この點に於いて私は、小宮が全然何の過誤をも犯して居ないと斷言するには躊躇するが、併

し漱石を知ること最も多く、漱石を愛すること甚だ深い小宮が、作品以外の文獻と比較しつつ、慎重に周到に引き出して來る結論以上のものを、小宮以外の他人から聽かうとするのは、殆ど不可能の要求であることを疑はない。

一體漱石の在世中には、漱石自身の非人情小説の提議などにも關聯して、漱石の作品は生活から游離した、現實の深刻な人生と相涉ることなき文學だといふ批難を、文壇から受けることが多かつた。併し漱石自身が自分を以て自然主義者ともロマンティストともネオロマンティストとも札づけするを欲せず、自分の文學を詞の最も嚴格な意味で自分自身の文學だと主張し、又事實さうであつたといふことは、當時の小説の中にあつても、特に漱石の小説を、作者の生活と最も緊密な關係に立たしめたのである。漱石の男女觀、人間觀、人生觀の發展と變化との跡は、随分強くその作品に現はれて居る。小宮はこの跡を主として漱石の人間の本質から、さうして更にその境遇から體驗からたどらうとして居る。初期の時代に於いて、「猫」に於ける現實暴露——勿論當時の自然主義的作品のそれとは違つた意味での——と共に、「倫敦塔」「幻影の窟」「薤露行」に於ける理想的なロマンティックな純美な詩の世界の平行、「草枕」に於ける現實の世界にあつて美の世界を獲得せんとする要求、「野分」に

於ける志士の氣魄の發露等を経て、「虞美人草」に於ける戀愛を中心としての道義問題への最初の斬込み、「坑夫」で一休みして別個の風光を點じ、「三四郎」「それから」「門」と、「虞美人草」では作品の外にあつて作品中の人物を操つて居た作者が、次第にその固くなつた緊張をほごして、男女の問題の内にはひつて來つとも、尙自分を作品の中に投じ切れなかつたのが、「彼岸過迄」の「須永の話」をきつかけに、漸く作者の内面の告白となり、それが「行人」「心」に於いて、愈々その面目を深刻に鮮明に發揮すると共に、漱石の自叙傳といふべき「道草」に於いて、靜かに自分の半生を凝視した後、更に最後の作品なる「明暗」に於いて、男女の葛藤に巢喰ふ人間の私を爬羅剔抉せんとするまでの、漱石の生活と作品との關係は、全集の解説と併せて、未だ嘗て試みられなかつた程、大規模に全體的にその究明を企てられた。小宮がこの書に於いて企圖したことは、漱石の世界に入つて、必然的な漱石の發展や變遷と共に流れ行かうとするにあつたらうが、併しこの事自體が非常にアムビシャスな企であることはいふまでもない。この書の中で小宮の力の最も多く注がれたのは何といつてもこの方面にあるであらう。さうしていつの間にか小宮を發揮したのもこの方面であり、最も多く論議の中心となるのもこの方面であらう。小宮のやつたのは漱石の生活と文學との

内在的開展の究明であるが、この點が獨りその細部に於いて色々研究の餘地を残すのみならず、この内面的開展を基礎にして問題は更に發展の可能性を有するであらう。例へば漱石が病弱と孤獨によつて愈々深く自分の心の解剖に深入したことが、彼が小説の殆ど唯一の方法とした心理的解剖を深めると共に、又その限界を示しはしなかつたかといふ如きことも、一つの問題である。漱石の傳記にさういふ一切の問題の解明を望むのは、固より當を缺けるのであるが、私は今後かういふ問題に就いても小宮の更に立入つた研究を欲するあまりに、これを一言したのである。序に私が心理的解剖の限界といふことをいつたのは、漱石は自分の私にしる、自分の奥にある自然と眞實としる、深く自分の心を解剖することによつて、かくして得たる心の種々相を具體化することによつて、更に進んではば彼の魂の分身を相交渉せしめ、さうしてこれを組織することによつて、小説の世界を開展し來つて居る。この點が漱石の作品が鷗外などと違つて「自我本位」の小説であり、又骨を刻み命を縮める程の仕事であり、又その本質に於いてロマンティストたる所以でもあると思ふが、同時に漱石の作品が心に昇華して肉體を稀薄にするといはれる所以も亦、ここに淵源しはしないかとも思ふのである。現に「明暗」は漱石の所謂「執濃い油繪」の世界を取扱つたにも拘らず、私は

どことなしにそこに一種肉を離れたやうな清さと凄さととの漂へるを感ずるのである。併しかういふ私の言葉はこの書物の批評から逸して居る。

以上は小宮の参考までにいつただけで、小宮の漱石作品に現はれた生活の見方は、全體として私の同感する所である。又その部分についても、「木屑録」の漱石の創作的生涯に於ける意義の顯彰、「草枕」の特殊なる位置の發見の如き、精到にして卓拔な小宮の識見を示して居る。小宮の所見に對して異議を唱へる場合があつても、單なる思ひつきを以てそれをしてたくない。それをするには小宮の研究と吟味と反省とは餘りに念入りだからである。

四

漱石に於ける重要なテーマの一つは、東洋的情操及び思想と西洋的情操及び思想との彼の生活に於ける交渉である。これは自ら東洋的——漢詩的、俳句的——文學と西洋的——英吉利的——文學との間に立つて、親しく苦勞を重ねた漱石自身の生きた問題であるのみならず、更に擴げては東洋文化と西洋文化との交渉といふ、文化史的に見て我國に獨特な全般的問題であり、殊に漱石の生きて居た明治時代を特徴づける重要な意義を有した問題である。漱石に於けるこの兩者の交渉を内容的に規定し、又これを文化史的に定位することは、この書に

於いて十分に遂げられたといへないし、又この傳記の企てる所でもなかつたが、併し意識的無意識的にこの相對立する文化と文學との間に立つて、苦み、疑ひ、惱み、さうして解決の鍵を自己の文學觀の樹立に求めて、ほつと息をついだ這裏の深刻な消息は、巨細に語られて居る。「ロンドン」「文學論」「神經衰弱」の諸章は特にそれである。私は漱石がこの大問題を背負つて、雲霞の如き西洋文化の大軍の眞唯中に、ロンドンの下宿にくすぶりつつ一懸命に勉強して居た姿を想像する時、實に一種悲壯の感を催すのである、さうして單にこれだけを考へても、彼が若しそれで神經衰弱にならなければ、それこそ却てうそだつたといふ氣さへする。

漱石の「神經衰弱」及び歸朝後の「再び神經衰弱」は、小宮が漱石の爲に最も精魂を注いだ箇處であらう。小宮の漱石に對する滿腔の愛情は、實にその精到なる辯護の中に流露して、惻々として讀者を動かし、無反省に又輕忽に漱石を精神病者にかたづけられたがる者共の蒙を啓くに十分である。

五

いひたいことはまだ色々ある。この傳記を讀んでも思ふことは、漱石の得難く逢ひ難い「人

間」である。漱石は傑れた人であり、又はつきりした核を有した點に於いて天才的な人でもあつた。併し漱石の一生が總ての人々に訴へるのは、その眞實な正直な、自己の本然に就かなければ安んじ得ない性格であつた。漱石の生涯には外的な波瀾は少なかつた。併し漱石自身の手記にも徴し得るが如く、後から思へばはらはらするやうな幾多の危機を危なく抜けて來たのである。珍しく世間的な野心に動かされず、偏に自分の天真を發揮することを志した漱石の生涯は、その變物といはれ、奇矯と呼ばれたに拘らず、實に人生の大道を歩いた生涯であり、その點に於いて人間修行に於ける誰人の師ともなり得るものである。漱石の通つた道は必しも順易ではなかつた。併し彼は水が岩を透してしみ出るが如く、自己の眞實に従つてそれを開いて行つた。漱石にとつて自分自身になるといふことが先づ第一のことであつた。併し自分自身になるといふことは、同時に自分自身を超越することであつた。漱石の自我はこの自分自身になり切れない時に懊惱し、この自分自身の發揮を妨げられた時、社會にも周圍にも強く反撥した。併しこの傳記によつても、彼の生活の中には、この偶然を取つて自家の必然と化する意識的方面と共に、無意識的な無技巧な無造作な方面があつたことが分る。これは、彼の自我が一面に於いて期せずしてよくそのエレメントに居り、よく自分自身を

脱却し得て居たことをも示すものである。我々は彼の意識の神經衰弱を促すほど敏感に過ぎるを見ると共に、又彼の一面に意外な暢氣さと無意圖とをも見つけて、ほほゑましくさへなるのである。かういふ點に於いて彼は、たしかに天才的無意識の佛を持つて居た。

漱石の人間の人を引きつける理由の大なるものは、その人懐こい暖かさとその小兒のやうな素直さにある。彼は實に「進んで人に懐いたり、人を懐けたりする性の人間ではない」(七七二)、彼は世にいふが如き親分肌ではない。親分には子分を集めようとする意識が必要である。この邊の消息は、例へば本書の「文藝欄の廢止」を見ても分るであらう。彼は實に終始對當の人間と人間とを以て人に交渉せんとした人である。世間でこの點について誤解があらば、それは漱石自身よりも寧ろ門下生の罪であらう。而も彼は人に懐かうと思はずし、いつの間にか人を懐かしがり、人を懐けようとせずしておのづから人が懐いて來た。彼が門下生に對して愛相をつかし、自分の前に跪いた足が自分を蹴り得るといふ不安を懐きつつも、若き文學者、例へば芥川や久米に開いた好意、若い禪道修行者によせた敬意を見ると、我々は漱石の興し易き人の好きよりも、その死ぬるまで純眞を失はなかつた心臓の和かさを思つて、頭が下るのである。

今ちよつと引いた「文藝欄の廢止」は、小宮自身と森田草平とを主代表者として、同じ年配の弟子達の文士の臭氣や思ひあがり、動もすればミザンスロピックにならうとする晩年の漱石の心境との際離を來したいきさつを、如實に記述せるものとして、私にも感動なしに讀まねかつた。「夏目漱石」一卷は固より漱石を傳するものであると共に、少くとも漱石の前には自分を投げ出す心持で書かれたものとして、小宮にとつて一つの懺悔録といへなくはないが、この一章は特に内容的にさうである。併し三十年近い歲月は、かかる傷心の事を書くに當つても、さすがによく小宮をしてセンチメンタリズムを脱却し、よく率直と冷靜とを失はしめなかつた。若し漱石にして今尙世にあつたならば、熱愛し崇拜した師から一時を離れるといふことも、弟子の成長の爲には止むを得ぬ一段階だつたといふことを諦視し得たであらう。併し師の抱擁と弟子の反省とによるこの對立の揚棄は、漱石の生前には實現せられず、この書を書き終へて漱石の靈に捧げんとする小宮も我々も、とくに漱石の歿齡を越えて、鬢髪も殆ど皆白くなつた。まことに感慨無量なるものがある。

昭和十三年八月十九日淺間山鳴動して盛に灰を降らした朝、上州北輕井澤の山舎にて

その二

ストリンドベリーの小説に「ある魂の發展」があるが、小宮の大作にして力作なる記實『夏目漱石』もまたその名に呼ばれ得る。しかもそれにはさらに「傑れたる」「日本的」といふ形容詞を加へ、「ある傑れたる日本の魂の發展」を遺憾なく傳へた書として、廣く日本人一般に訴へると共に、顯著にして深刻な個性としての夏目漱石の眞面目の開展として、獨自の存在意義を有する。

漱石が明治、大正年間に於ける最も傑出した文學者たりしことは、既に一個の歴史的事實であり、最も多く讀まれた、今もなほ最も多く讀まれつつあるその文學は、實に日本人の公有物である。しかも當時人生から游離した不眞面目な文學だといふ誹を受けたその文學こそ、今となつては最も人生に切實な、否作者の個性、境遇、理想、一言にいへば作者の生命と體験とから生れ出でた、最も剴切にして深刻なる作物であつたことは否定せられない。この一事は、恐らく彼の文章や技巧の面白さと共に、彼の文學的生命を長からしめた重大な原因であるが、この書は這般の消息を語つて實に親切周密を極めてゐる。併し漱石の一生は單なる

文學者たるに止まらず、實に近代日本に於ける著大な文化史的存在であつた。素質において教養に於いて深く日本人、東洋人たる彼は、彼の身體と精神とを提げて西洋の文學と文化とに肉薄し、それを本當に自分自身の個性的なものとすると共に、それを天理と自然とに放つことによつて普遍的たらしめようとした。彼は日本人の取るべき文化の本筋を、躬らごまかさず、銜はず、心底からうなづけるやうに進まうとした點に於いて、實に模範的な日本精神であつた。時代の調子に浮び出でた俗物どもも、この書について眞の日本精神を學ぶがい

5。

世に漱石門下と呼ばれる者は十指にあまるであらう。しかし小宮は漱石の眞の弟子の一人であると共に、特に漱石傳の著者としては外にかけがへのない存在である。彼の漱石に對する愛は、漱石の生命に分け入ることをもつて即ち彼自身の生命を啓く所の業となさしめた。彼は事苟も漱石に關すればこれを掌に指し得るに拘らず、凡そ搜すべき資料、質ぬべき人間にして、彼の探求に漏れたものはなく、その筆を取つたのは一年有餘であつても、その準備は更に二十餘年の昔に遡つてゐる。漱石を溺愛し崇拜した末、一時漱石から離れるやうな氣持をも經驗した彼は、漱石の歿齡よりも五年を長じた今こそ、眞の意味に於いて漱石を解し、

愛し、漱石を傳うる資格を得た。一篇の『夏目漱石』は彼にとつて一つの懺悔録でもあるが、そこに感傷を脱し、自己を喰み出させず、よく漱石を凝視する餘裕を示し得たのは、さすがに争はれぬ年の功でもあらう。(四六版八八四頁、定價二圓五十錢、岩波書店發行)

櫻田門・土手・濠

今の櫻田門が何時頃の建築だかは、手許にある書物では分らない。慶長江戸圖といふのは外櫻田門があるといふことだが、内櫻田門といふのもあるやうだし、何れが今のに當るかも私には定めがたい。ただ私は櫻田門外を通るたびに、それを江戸時代の武家建築の典型的なものやうに感ずると共に、それが時勢の激變して周圍のもの皆移つた今の東京にあつて、儼然として靜かに日本の特色を發揮して居ることを感ずるのである。簡素で堅固で飾の少ない建築が、その主色である白壁と調和して實に落着いた清淨な感じを興へる。ただ色々な都合でこの寫眞にはとれなかつたけれども、私の希望は、三宅坂寄りから、この門を一部分として、あの偉大な土手と濠とを寫してもらひたかつたのである。私の見た所では、宮城の土手と濠のやうな雄大で和かみのある土木工事は、世界にないといつてよい。西洋でも支那で

もこれに似た工事は多く石や煉瓦で作られ、かういふ風に人間の力で新たに自然に造り出したといふ所がない。日本には未だ所々の舊城下に土手と濠とが残つて居るが、規模は比べ物にならず、多くは廢墟の感を興へる。雜草を一つも交へぬ緑の芝生のびやかに膨んだ大きな土手、時に水鳥を浮べ、小波をもよせる、廣い深い、にび色じみた藍を湛へたお濠は、外では見ることの出来ぬなごやかさと美しさを藏して盡きる所がない。前の佛大使クローデルのお濠を詠じた詩は讀まぬが、詩人の魂がこのお濠の美しさに觸れぬといふことはあり得ない。今一つ言ひ添へたいのは、白い塀の下に見える石垣である。これは前の道路の新しい石垣と比べれば直ぐ分る。不整合で隙が多いやうであつて而もゆるぎの少ない、關東の大地震にもこはれなかつたかういふ石垣も亦、日本的なるものの中に數へてよからう。

右の文章は「日本の美」を實例に就いて書けと乞はれた時、櫻田門の寫眞に添へてしるしたものである。

虞美人草に就いて

漱石先生が新聞に書いた最初の長編小説として、「虞美人草」は先生の文學的發展の上には重要な意味を占めるものであらうが、先生自身は後年ひどくこの作を嫌つて居られた。それは文章があまり彫琢に過ぎ、絢爛に過ぎて、地味な眞實の表現と遠いといふこともあつたらうが、又プロットに作爲が目立つて、芝居になり過ぎたといふこともありはしないかと思ふ。私の如きも實はあの文章には少しあてられて、新聞で讀み通すだけの興味を持たなかつた位である。後年改めてこれを通讀して、やつとそこに一貫した先生らしさのあることを認めたまふやうな次第である。

漱石先生は、人間の行動に就いて芝居氣といふことを神經質に嫌つたばかりでなく、一たいに芝居を好まなかつた。殊に歌舞伎劇の不自然な作爲を嫌つたことは著しかつた。いつか

菊五郎が先生に劇を書いてもらつて上演したいといつて、或る女流作家と一緒に尋ねて來たことがあつたと聞いたが、結局先生はそれを書かなかつた。さうして先生は竟に一つの劇をも書かずに死んでしまつた。恐らく先生はそれを遺憾とはしなかつたであらう。

その芝居嫌ひの先生の小説が、相次いで劇に仕組まれて上演せられるといふのは、一つの皮肉ともいへる。而もそれが劇として面白く、見物の評判がよいのだから、一層の皮肉が加はるわけである。私は「坊つちゃん」も「猫」も、玄人の演じたのを一度も見ることがなかつたが、たつた一度見た漱石劇といふのは、二十年前に法政大學の學生が記念日の餘興に演じた「猫」の一節であつた。素人の隙だらけの上演ではあつたが、それはたしかに面白かつた。さうして先生の作品はたしかに劇として面白からうと思つた。

その理由を考へて見ると、先づ先生の作品に於いて、會話が氣が利いて面白いといふことである。對話といふものの中には劇的な要素の含まれて居ること、劇に對話的、對立的更に言ひ換へれば辯證的要素が本質的なものであることはいふまでもない。プラトンの對話篇、例へば「饗宴」だとか「クリトン」だとかも、もし俳優その人を得たならば、立派に劇になるのではないかと思ふ。漱石の作中の人物が舞臺に現はれて、作中の對話をそのままに生か

すことが出来れば、それだけで劇的效果を擧げ得るものは實に多からう。次には作中の人物の組合せに、相當な對立、對照の存することが、先生の作品を劇的にして居る。「虞美人草」でいへば藤尾と糸子、小野と甲野といふ對立は、むしろはつきりし過ぎることを缺點とすべきであるが、舞臺的效果から見れば、觀客に訴へ易いといふ長所があるであらう。甲野さんと宗近さんの全く違つて居て一脉相通する氣合なども、俳優の努力のしがひのある箇所だと信ずる。さういふ對立や配合ばかりでなく、人間が單に個性的でなく類型的に特色を發揮する所が又、その劇的效果を助けるのではないかと思ふ。さういふ點で先生の作品は、殊に玄人筋からは動もすれば通俗的だと非難されるやうであるが、やつて見ると存外潑刺とした新しみを發揮するのではないかと思ふ。

一般に先生の小説の場面からはかなり豊富に劇的な場面を拾ひ得られる。「行人」や最後の作の「明暗」などからも、さうした場面を拾ひ得るが、殊に「虞美人草」は私の今のうろおぼえから考へて見ても、それが非常に豊富だと思ふ。若し優れた脚色家が、この面白い、さうして色彩の濃い、又色々趣の變つた、又一つから他への變化の相當に鮮かに回轉する、作中の色々なモメントを捕捉し得たならば、この劇は相當に面白く見られはしないかと思ふ。

更に本質的に考へて見ると、先生の小説が劇として觀客に訴へる所は、やはり小説としての作品の面白さに基づくものであるから、劇としても成るべく原作の持味を薄めぬやう、損はぬやうに心がけることが大事だと思ふ。もう一つは作者の小説に打ちこんだ眞剣さと、この眞剣さの生んだ個性的表現が、劇としての力になり得るといふことである。よく漱石の作に臨む心持が不眞面目だとか遊戯的だとかいはれたが、これ位甚しい誤解や訛傳はない。漱石が文壇で稀有な眞實な人物であつたばかりでなく、その作に臨んで技巧的に苦心するばかりでなく、それこそ體あたりに全人を打ちこんだ眞剣味は、恐らく近頃の文壇にその比を見難いことを信じて疑はない。

「虞美人草」が漱石の作品中に占める階段は高いものではあるまいが、劇に脚色する上からは恐らく先生の作中でも最適のものであらう。ただ私も一つ感ずることは、漱石の作品中からは随分好個的一幕物が拾はれはしないかといふことである。誰かそれを試みて見てはどうかと思ふ。(昭和十六年六月廿三日夜)

讀書に就いて

近時讀書に對する要望が非常に増大して來たといふことは、方々で耳にする所である。第一に書物の出版部數が驚くべく殖えたといふ事實がある。これは紙の生産並びに配給の將來に於ける減少を見越して、書店が現在の必要以上に買ひ込むといふやうな、眞實らしい事情を割引しても、先は事實だと思はれる。この現象に就いて、例へば如何なる種類、如何なる程度、如何なる著者の書物が、どの位賣れ若しくは讀まれて居るかといふ、科學的に統計的な調査がなされて居たならば、現代の思想方向や趣味好尚、政府の指導や新聞雜誌の新刊紹介などの、現實に於ける效果の程も覗ひ知られて、興味があり有益でもあると信ずる。然らば何故にかうした書物に對する需用の増大はあつたか。これに就いても亦色々な理由

が考へ得られるであらう。讀書階級の大多數が青年學生層に存することを考へれば、物資の不足、時勢のせちがらさ、娛樂の制限等が、彼等をしていはば最も安價にして簡單なる讀書といふ娛樂に赴かしめたとも考へられよう。これは年若い知識階級なる薄給のサラリーマン達にも大體あてはまることであらうし、小説其他の軽い讀物の賣行の増大はこれを語るものと見てよからう。併し又一方には、我國の直面した餘りに大きな課題、而もそれに對して餘りに甚しい内からの指導の不足が、眞面目な青年層を驅りてこれを書物に赴かしめたといふこともなくはあるまい。問題の深刻といふことと同時に、めまぐるしい世界の變革がもたらす問題の多さといふことも、その解答を色々な書物に向つて求めしめるであらう。現代の時勢が一方には知識階級を絶望的或は享樂的にする傾があると共に、他方には彼等を一層眞剣なつべきならぬ要求に向はしめるといふことをも否定し難い。さうしてこの兩方が共に讀書欲を増大して居るといつてよからう。ただ後の要求に對して、信念のある指導的な書物の、彼等の要求に答へるものの少いことは、今の時勢の實に深大なる缺陷であり、現代日本の深憂の一つがここに存する。好んで又大聲疾呼して指導の押賣をしようとする者に對して、眞面目な青年が却てそつぽうを向かうとする現象に對して、偏に今の青年だけを咎めるわけに

はゆかない。

二

青年男女が讀書から何等かの指導を求めるのみならず、讀書に就いての指導を得たいといふ要求もかなり切實だといつてよい。これは或る學生叢書の讀書に關する一冊が、飛び抜けて需用の多かつたといふ事實にも徴し得られる。現に私に對しても、色々な方面からよく書物の選擇についての問合せが來、その答に窮する結果、多くは返事は出さずじまひになるといふ有様である。

或るはつきりした要求を提げて書物を求める時、中々さういふ風なしつかりした、又は便利な、適切な書物の見つからぬ事が多い。殊に専門的學問の書物では、恰も細かい専門に互ると、存外我國に確實な信頼すべき専門學者の少ないのと同じやうに、邦文の傑れた書物の數も亦少ない。これは書物がなくて我々の要求を充し得ない場合であるが、一般の讀書子の困るのは、寧ろあり過ぎる書物の中からの選擇の問題である。あまりに書物が多過ぎる、この中から如何にして良書をえり出さうか。いや一般的にいって良書の數も相當多い。この中

から如何にして自分の讀むべき自分の滋養となる書物を見出すべきか。これが中々の難問題なのである。朝夕の電車の中で、若い職業婦人らしい人々や女學生達の多くが、「岩波文庫」を讀んで居る。私は一週に二度廣い講堂で講義をするが、壇に登るまでに瞥見すると、私の來るまで生徒の多くは、これも亦「岩波文庫」を讀んで居る。此等の多くの書物は、私達の若い頃には、原語か歐文かでなければ讀めなかつたものである。日本や支那の古典の中にも、我々の昔親しみ得なかつたものが、容易に親しみ得られるやうになつて居る。この點に於いて今の青年男女は一應幸福だとも言ひ得るが、又不幸だとも言ひ得るであらう。「岩波文庫」は勿論古典の價値を擴げた功績を擔ふに價するが、結果からいへば古典の價値を薄めたとも言ひ得るであらう。今の青年男女殊に女性の間には、「岩波文庫」を讀むことが、一つの誇らしい流行となつて居るのかも知れない。かういふ虚榮は外の虚榮よりはましたともいひ得るし、人間のすることに虚榮を脱し得たことの稀なるを思へば、已むを得ないとも考へられるであらう。第十八世紀の啓蒙時代には、哲學が應接間の貴婦人の話題となつた。これは哲學の普及を語ると共に又墮落をも語るものだといへよう。併しかうした虚榮婦人の中に眞劍な哲學の探究者も亦交つて居り、宮廷の王妃や王女達の間にもさういふ人があつた。學問や

讀書は衣裳や化粧に比べて、その本質上虚榮の具に供せらるべき筋のものでなくとも、併し若い男女特に婦人の間に於ける讀書熱の流行を、人間からは完全に剝ぎ取れない虚榮の表皮の爲に排斥すべきものでもあるまい。やかましくいへば學問界に於ける學說流行の現象にも、そこに學者の多くの虚榮を認め得るのである。我々はかかる流行の虚榮の浅い膚を通して、そこに眞實の血肉を見なければならぬ、又眞實の血肉をとつて來なければならぬ。

三

私がここでいふ讀書は主として教養の爲の讀書である。これは學校の教師の如く、その職業に關係の深いこともあり、又は實務や専門の研究に従事する人達の如く、その實務や専門からの解放若しくは休養といふ意味もあらう。かういふ場合にはむしろその職業とは別な世界に遊ぶ所に、讀書の意義が存するのである。電車の中で古今の名著を耽讀する男女の頭からは、恐らく重役や課長のいやな顔附は暫し忘れられて居るであらう。

私の居る學校の理科の生徒が時々かういふ訴をする。「どうも一高の寮に居ると、文科の人の影響が多くて、教養教養といつては文科の本を讀み過ぎ、理科の勉強がおろそかになり

ます」と。これは今の高等學校で、一たいに文科の方が理科より時間の餘裕が多いといふことにもより、又所謂文科的讀物の方が理科的なものよりも一般的人間的教養の材たることが多いといふことにもよるのであつて、必しも悲しむべきことではない。高等學校を通過した大學教育が、専門學校教育に勝る點はそこにもあるのである。ただ併し漫然たる教養を標榜する讀書が、ややもすれば道樂的な中核のないものになり易いといふ弊は、これを認めねばならない。我々の高等學校時代には「岩波文庫」の如きもなく、我々が西洋古典に接するのは、主として英語では「キャッセル文庫」ドイツ語では「レクラム文庫」によつたものである。かういふ外國語の書物を「岩波文庫」のやうに自由に讀みちらすわけには行かぬから、我々の讀書はどうしても限られざるを得なかつた。それが自ら散漫を防いだといふ利益もあつた。つい二週間ばかり前になくなつた岩元禎先生は、一般教養の材としてレクラムの閱讀を勧め、その中でもゲーテとシラーとレツシングとを讀めといはれた。この選擇が今尙誤りないものだといふことは認めても、併しこれを動かすべからざる指令として、誰人にも強ひるわけにも行かない。ただかういふ古典は長い年月と多數の讀者とによつて精選されたものであるから、よくこれに打ちこみ得る者に對しては、必ず報いる所のあることを信じてよ

からう。

今から三四十年前位までは、西洋の古典だけについていへば、少数のものが世に知られて居て、それに親しむ機會は少なかつた。和漢の古典に就いても、新しい教育を受けた者には、今程の機會は與へられなかつた。ただ舊い時代の教育の餘勢としての古典的教養が、今よりもより多く存して居たといふだけである。今は一般的教養の見地から、續出する多くの文庫、叢書等の存在理由を十分認め得ると共に、其等の中から古典の整理がなされ、比較的基礎的な少数の選擇を行ふ必要があるであらう。これは和漢洋の古典についても共にいはるべきことである。かうして基準的な少数を樞軸とすることが出来れば、恐らく讀書の散漫を救ふ上に裨補があるであらう。

併し讀書の基準は外からのみ與へらるべきものではない。その材料からいつても方法からいつても、各人に各人の讀書の流儀が許さるべきである。勉強と共に各人の自然が尊重さるべきことは、讀書に於いても除外例を設け得ない。先づ好悪といふことを無視するわけにはゆかない。好悪のはつきりした人は、或る點惠まれた人であり、多くの書物の中から自分の讀みたい書物を嗅ぎ分けることに苦しまないであらう。萬人必讀の古典と稱せられるもので

も、どうしても面白くないものは、その性に合はぬか、こちらがまだそこへまで達せぬかである。一通り努力した末は他日を待つ方がよい。先づ最も簡単な方法は、自己の好悪に忠實にして妄に流行に煩はされぬといふことである。併しこの好悪に對する反省の必要なことは又いふまでもないけれども、或る程度まではつきりした好悪にはむしろ大膽に従つて見る方がよい。それはその好悪の狭さと誤とを自覺する爲にも必要である。

書物を批判的に讀む必要はよく説かれる。併しあまり用心深く硬くなつて、書物から感激を受けることを妨げぬやうにしたい。カントのやうな几帳面な哲學者でも、初めて入手したルソーの「エミール」を讀んだ時には、感激の餘り數日その「時計のやうな」生活を破つたさうである。批評や注意を豫め讀むのはいいけれども、自分の批判は感激の後でなければ本當に出来るものではない。生半可な批判は讀書に深入りすることを妨げて、その讀書を半端なものにしてしまふ。さういふ意味で偏讀も場合によつてはよく、耽讀、濫讀も亦可なりである。これは讀書の經驗内容を豊富にする所以である。總て人生の外の事柄と同じく、讀書にも自分の尊敬する指導者があれば幸福此上なく、又外からの注意や指導を求めるに吝かであつてはならないが、併しずるくこすく、成るべく自分の損をしないやうに、むだをしない

やうにとのみ努力するのは、却ていけない。何事にも冒険と犠牲とは避けられない。結局讀書の態度方法として困難なことは、こちこちにならないで、弾力性を失はないで、同時に散漫にならぬことである。これにはやはりしつかりした書物をよく読んで中心を作る工夫が一番大切であらう。かうした中心的な書物は偏に自分の好悪だけでもきめられない、人から與へられた標準だけでもきめられない。やはり兩方を検討して工夫を重ねた上に得られるものであらう。

四

肉體的接觸によつてする人間同志の交りに加へて、讀書は文字により眼を通じて人間の精神的な交りを與へるものである。人間の知識や意欲や理想や感覺は、外の文化的産物よりも一層多く又一層簡単に、書物によつて我々に傳へられるのである。プラトンは多くの對話篇を残して、百世の下尙東洋人である我々までも動かして居るが、プラトン自身はかく書物によつて自分の思想を傳へることに重きを置かず、生きた問答により對話による、生きた人間同志の接觸による研鑽を重ねたのであつた。プラトンに對する解釋は、プラトンの遺著

を通じて色々となされて居るが、プラトンを地下から起して問答を重ねたとしたならば、かうした學者の苦心の研究の結果とは、全然別な答を與へたかも知れない。書物は愚者に對しても智者に對しても同じ文句を示して、生きた人間の如く賢愚に應じて色々な答をしてくれない。併しプラトンの書を読むことによつてプラトンの眞意を探ることが、プラトン學者の課題であると共に、我々のプラトンを讀む意味はそれに止まらない。それは兎も角として我がプラトンに赴きプラトンが我々に來り、彼我の交りがそこに生ずるといふことである。古今を通じ東西に互つて人間同志が相語り得るといふことである。固よりその會話や問答は、生きた人間に於ける如く具體的な直接的なものではなく、そこには色々缺けたものがある。併しそれと共に生きた人間同志の關係に存する色々な障礙からも放たれて居る。いはば現實的な利害を離れて比較的純粹な理想的な世界に於いて相對し得るのである。我々は現在時を同じうして生きて居る人、殊に國を同じうする人、中にも親しく個人的に相知れる人とは、讀書によつても異邦人や古人より一層直接に又一層具體的に接觸することが出来るが、此等の人々に對しても亦、讀書は現實的接觸とは別の面を我々に與へるのである。讀書は我々を我々だけの世界から解放して廣く人間と交らしめ、我々の知らぬ世界、我々の經驗せぬ世界

を我々に知らせたり感じさせたりしてくれると共に、さういふ世界を妨げなく我々の世界の中へ請じてくれるのである。その爲には現實世界の交渉に存する色々なものが抜き取られる爲に、物足りないといへば物足らなくもある。だから現實世界に満足し、又はあくまでもそれに執着するものに取つては、讀書の世界は無用の世界である。世の中には讀書の必要を知らぬさうした人間も多分に存するのである。

讀書はかくして自分以外の人の世界に参することによつて、自分を忘れて廣く人間世界に遊ぶことである。同時に他人を自分の世界に請じて自分のものとするのである。この二つの方面は讀書する人の性格により態度により、その大小輕重を異にこそすれ、何等かの程度に於いて必ず共に存しなければならぬのである。讀書に於ける享受と教養との二つの重大要素はここから來るが、併しこの二つの要素は相補はるべきものであつて、相斥けらるべきものではない。

讀書はかくして廣く人間同志の精神的交通を擴げ又は深めることに、その本質的な意義を有する。讀書は固より萬能でなく、我々は讀書から解放されて、人間の血みどろな現實に觸れることも、文字と活字とのない自然の裏に遊ぶことも、共に必要であり且避くべからざる

ことであるが、併し讀書が人間の生活を廣くし深くし豊かにしてくれるといふことは認めねばならない。讀書は前にいつた如く他人の世界に自分が没すると共に、他人の裏に自己を見出し、他人を自分のものとするのである。そこに入り難き又自分のものとし難い他人の世界もある。それをどれだけ自然の好惡に放任すべきか、それをどれだけ勉強によつて打開すべきか、讀書の工夫の眼目はここにある。(昭和十六年七月二十六日)

『開墾』を通讀して

どうもこの頃は書物を頂いて感想を書かされるのが苦手である。讀む時間がないといふわけではないが、何か責任を負はされて讀むのは中々氣が進まない。かういふものは、以前はよく電車の中などで讀んだのだが、眼の爲に電車の中の讀書をやめてから久しいといふこともある。

併し『開墾』は兎も角もざつとではあるが一首も残さず讀んだ。新しい生活にはひつた吉植君の十年の日記を讀む積りで拜見した。『開墾三年』の『九月一日の曉よめる歌』（一二六）の中に

わがこころあふるる時に歌はよみ描きとらんと歌はよまずも
いかにしてこを歌にせむとうちかまへ思をこらすこと少くなりぬ

いとまもちて歌よむ吾にあらなくにおつる筆のごとしわが歌

とある。吉植君の歌には昔からかういふ素質はあつたが、この書中の歌にはそれが一層著しい。併し我々にはかういふ歌の方が入り易く動かされ易い。歌人としてはここへ達するまでに、色々な技巧上の苦心も、用語や造語やその配置などにも工夫のあることが、十分考へられはするが、併し歌の本來はやはりそこにあるやうに思ふ。どうも餘り考へ過ぎたり凝り過ぎたり、ひねくりまはされたりした歌は、私にはぢかに來にくい。さういふ意味で吉植君の歌は、何れかといへば私の性に合つた歌である。

これはこの集に限つたことではないが、吉植君の歌には、明るさがあり豊かさがあつて、野性があり好諳があり、濶達自在な所があると共に、中々こまやかな所も艶やかな所もある。よくこんな讀みかたを知つて居るなと思はせられたり、時々はこの讀みかたがあるのか知らと首傾けさせられたりする程、色々な讀方を漢字につけてある。それが多少出鱈目かなと思はれる所もあるが、多くの場合中々適切である。それに君の歌には朗々としてこれを誦するに足るところの調子がある。これは君の詩人的素質の豊富を語るものであり、君の歌の持つ大きな強みである。例へば第一年の歌からちよつと目に止まつたのを引いて見ても、

出津の野の新墾大田に放つ水の白泡たぎち土に濁らず (四一)

なきくだる雲雀のともはみなぎらふ光にちかくみな紛れ去る (四二)

出津の野の新墾田遠くひきわたす鳴子の繩に風渡る見ゆ (四五)

一つ鳴り二つ鳴りつつ新墾田の大田の鳴子鳴り揃ひたり (五六)

などは、この大らかな寫實敘景が、私には實に好ましい。

豊蘆原拓きなしたる廣ら田にわが作る稻のさやぎ鳴るなり (五七)

五尺にあまる美稻の波うちてかがやく見れば心ゆきにけり (五七)

などには、開拓者の歡喜と希望とが目に見えるやうである。

收穫季のつづく日和に族らと日ごとに出でて野扱するかも (五九)

子持の伊左衛門の家内ら夕鳥に心よるらし稻は扱きつつ (六一)

家妻の黒髪しろくかかりたる收穫埃見つつしたしき (六三)

ふところをこぼれて落つる粃の音たまさか坐る疊の上に (六七)

落穂拾ふ手もと明りや早稻の田の稻孫はすでに露おきにけり (六七)

の如きは、まさに君のいふ百姓歌であり、

われのよむ百姓歌はけふまでの歌人のたれもよまぬ歌なり (二二七)

といふ君の矜持も本當だらうと思はれる。しかし造語や修辭の自在は、一方には安易といふ弊にも流れ易く、調子がくづれてだらしくなつて居るやうな歌も、認められなくはない。

君は「墾田塊土」とか「刈坑塊土」とか「新墾大田」とか「長柄大鎌」とか、四字の複合名詞を自由に造る術に長じて居るが、殊にこれを第五句目に据ゑる時など、安易さが露骨に見える時もあると思ふが如何。

十年の間に色々な困難も障礙も起り、君の心境も時々は暗くもなつたが、併し君の關心の對象にも心の持方にもやはり十年を貫く所のあるものがある。十年の間に於ける様々の出來事と心境の變化と、歌の出來ばえや調子などを比べて考へることも、興味があらうが、率讀には捕捉し難いものがある。ただ併し私の危懼を正直に言はせてもらはう。君はこの事業によつて君の過去の生涯にない緊張と歡喜と苦勞とを體驗されたらしい。これは羨しいことであるが、併し君の今までの歌には、主として百姓の體驗の珍しさ、新しさが詠まれて居る。今後更に君が創業の功を終へて、守成の地味な境涯に落着き、この新しさも珍しさも身に着いてしまつて、その魅力を減じた時、君の百姓歌が果してどうなるかといふことである。けれ

ども又本當の百姓歌は、そこを凌いで出て来るのではないかと考へられるが如何。最後にこれは歌とは別であるが、一個の自作農として代議士として、日本の吉植君に伺ひたいことがある。君は少なくともその最初には、新しい農法によつて日本の百姓生活に新しい希望を與へる意氣込で、開墾に着手されたい。併しその後の連年の經驗は、豊年には豊年飢饉、凶年には無論凶年飢饉で、生活には絶えず困られたらしい。けれどもさういふ情況ではやはり、日本の百姓を新たに生かして行くことは出来ないのではないか。これをどうして救ふか。君は身を以て地主生活を否定し、自作農を主張して居られるらしいが、米價の其以外の諸物價との均衡を失せる安値といふ重大理由を外にしても、少なくとも『開墾』の中に現はれた、君の讀書をしたり、時には東京に出たり、代議士として働いたりする生活と平行して、果して自作農生活は維持せられるであらうか。君がかういふ點についても、身を以てその解決を示すべき任務を課せられた一個の代表的人物たるを思つて、敢てこの疑問を提出するのである。(昭和十六年八月七日午前)

脇寶生に就いて

今日(十月四日)は、寶生彌一君が「張良」のワキの初舞臺を勤められるといふことで、私が「下掛寶生流」即ち「脇寶生」に因んだお話をする事になつたのであります。實は、私は寶生新先生に年月だけは割合永く稽古を受けたといふ位の關係でありまして、流儀の有力者でも諺がうまいわけでも何でもありません。同門の野上(豊一郎)君は、能樂の特別な研究家でありまして、今日の話も元來は野上君がやることになつてゐたのであります。野上君が南京へ旅行するといふので、私にやれといふことになりました。ところが野上君の南京行は中止になつたに拘らず、やつぱり私がやることになつたのです。その代りに野上君の書いた「ワキの舞臺的存在理由」といふ小冊子がくばられるはずですが、これから約一時間御話しますが、折角能を觀においでになつて、見ない内からお疲れになつてはいけませんから、

何卒御勝手に休養を取りつつお聴きを願ひたいと存じます。

大體、協寶生の極く簡単な歴史と、その流儀の中に出た名人の事をお話しいたしまして、その次に、協寶生全體の特徴——さういふやうな事に就いて申上げ、それから次は、協寶生の謡や型等の特質を申上げ、最後に、協寶生並びに協流儀の將來に就いて申上げたいと思ひますが、私の申しますことは、大部分家元の新先生にお聞きしたり、或は、素人で下掛寶生流の皆傳を受け、今は伊豫松山に住んで歳七十餘になられた當流の故老、小川尙義氏からお聞きした事を取り合せたものでありまして、私獨自の見解はさうないのであります。

シテ方に、觀世、寶生、金春、金剛、喜多と五流があり、その中、喜多を除いた四流が四座といはれ、家元が大夫と稱してゐたことは、諸君が先刻御承知の事と思ひますが、ワキ方の流儀にも、春藤、進藤、福王、高安、寶生と五流ありまして、この五流中では寶生流が最も新しいのでございます。

元來、能樂の初めて起つた時には、シテの家、ワキの家といふやうな區別はなかつたのですが、だんだんと能樂が分化して來るに従つて、ワキの家といふものが出来るやうになつたのであります。

下掛寶生流は、元來は春藤流から出たのであります。ところが、この春藤流は金春座に屬した協師であります。進藤流は觀世座に屬し、高安流は金剛座に屬し、福王流は繁十郎が梅若のアシラヒ(御相手)であり、それについて野島信もさうでありましたが、觀世では弟子家だともいつてゐます。併し私には、これが何流に屬して居りましたか能く知りませんが、今日では觀世流と非常に密接に關係するやうになつて居ます。

寶生家には新先生があつた無頓着な方である爲か、系圖もなく、過去帳をこの間覽せて貰つて、やつと新氏までの十代の名前が、本名、名乗、雅號とり交せて分りました。それによると、協寶生の第一代には春藤權七といふ名があつて、春藤協流の宗家の弟で、元祿五年に歿して居り、それが初代といふことに成つて居ります。しかし、その春藤權七は寶生を名乗つたのか名乗らないのか、恐らくは名乗らずして寶生流の初代とされてゐるのではないかと思ふのであります。池内信嘉さんの『能樂盛衰記』に據ると、松平采女正の家臣の子であつたのを、春藤六次郎が養子にして新之丞と名乗らせてゐた。ところが新之丞が「咸陽宮」の秦舞陽を務めて、それが將軍のお眼に留り、それから寶生といふ家を樹てられた——かういふ事があります。してみると、今申上げました春藤權七が寶生流の祖先ではありますけれ

ども、寶生家を名乗らないで、二代の新之丞から寶生家を名乗つたものかとも思ふのでありますが、その新之丞と權七との關係はどういふ風になつてゐるかといふことが、十分に私にはわからないのであります。多少それを調べる手蔓はあるかとも思ひますが、これは専門家の御研究を待ちたいと存じます。

その權七からして今の新先生がちやうど十代に當られるのでありまして、別に新之丞・金五郎、さういふやうな名前は二度許り出てゐるやうであります。大體、金五郎といふのは本名であり、蕃彌シゲヤであるとかさういふ名乗がありまして、その外に雅號がある譯であります。過去帳を調べて見ましても、その三つの揃つて居るのがないのでありまして、新之丞、金五郎が果して何度この十代の中に出たかは、正確に判りませんが、少なくとも二度は出てゐるのであります。或は四代の英蕃が金五郎で五代の英孝が新朔か何かだつたかも知れません。過去帳によつて短時間に知り得た歴代の名前は左の通であります。

一代 春藤流宗家弟 權七 幽玄 元祿五歿 二代 新之丞 撰齋 三代 新次郎 幽我
四代 英蕃 幽叟 寛政四歿 五代 英孝 六代 新之丞 英勝 安政三歿年八十三

七代 金五郎 蕃彌シゲヤ 八代 新朔 英才ヒサモト 九代 金五郎 英周チカ

十代 新 忠英 朝太郎

定紋は矢車八枚、「うらなでしこ」でして、觀世は矢車の數が十枚、上寶生は九枚となつて居るさうです。なほ系圖の中、六代と同時の上掛は彌五郎でした。

二代目の新之丞の後、六代にやはり新之丞といふのが出て居りますが、この新之丞といふ人は隨分名人であつたらしく、新之丞の息子に金五郎があり、その又息子に新朔がありまして、この新之丞・金五郎・新朔三代が揃つて大奥のお能を勤め、この頃が寶生家にとつて最も全盛の時代だつたらしいのでございます。この新之丞といふ人は隨分名人の稱がありましたが、その人の逸話として遺つてゐるのは、將軍をお相手に「葵上」だつたかの（これは正確ではないのですけれども、祈物いのりものだつたことは確かださうです）ワキを勤めたところが、將軍が誤つて滑つてころばれた。それを新之丞が機轉をきかせて珠數で叩き伏せる型をやつた。さういふ失禮な事をしたから切腹を仰せつけられる覺悟で居つたところが、却て將軍の非常なる御嘉賞に預かつて、「きみが世に寶生るる家なれば眞の上（新之丞）手と人は言ふなり」といふ狂歌のやうなものを、手づから書いて賜はつたといふ言ひ傳へがあります。尤

もその後寶生家は火事に遇つたりした爲に、その御直筆等は現存しては居ないさうです。外に養子に萬作（英章）といふのがあり、天保五年に歿して居ますが、これはこぶ萬作と呼ばれて、大きな瘤があつたけれども、藝の絶妙な爲に舞臺に立つところは見えなかつたさうです。

此等名人に鍛へられて名人の衣鉢を傳へたのが、明治の三十年頃まで生きて居られた、今の新先生のお祖父さん、といつても本當は伯父さんに當られる新朔であつたのであります。

明治の御維新以後能樂は一時衰へましたけれども、その後、梅若實・寶生九郎・櫻間伴馬——さういふ人々の盡力に依つて、能樂は再び復活することに成り、明治二十年代には随分盛んであつたのであります。その時分には、シテ方には梅若實、寶生九郎、櫻間伴馬（後の左陣）といふやうな名人があり、ワキの方では春藤六右衛門といふ人が、春藤流でなかなか勝れてゐたさうですけれども、六右衛門とその弟の五十次郎との代に、春藤家は没落して、淺草鳥越神社の鑄木家に寄食して居たさうですが、やがて後が絶えてしまひました。併し寶生家では新朔、金五郎の兩人が居て、勝れた藝を見せました（金五郎は新朔の弟でありましたけれども、その後嗣に成つてゐました）。中にも新朔はシテ、ワキを通じて實に當時拔群

の名人でありました。櫻間伴馬の如きは、舞臺で相手をして我が藝を上達させる便りとなるのは新朔だと言つて、非常にその相手を光榮として居たさうであります。また新朔が芝の能舞臺で「壇風」のワキを勤めた時には、滿場立錐の餘地が無い位大入であつた——さういふやうな話もあります。兎に角新朔といふ人はすば抜けた名人であつた。天成の素質に加ふるに多年の熟練を以てして、謡も非常に大きいぼうつとした所があり、所謂俗に筒が太いといふ謡ひ方であつて、直ぐには惹き附けられにくく、九郎の謡にくらべると一寸は面白くないけれども、暫く聽いてゐるうちに、なんだか底から味が湧いて来る、さういふ謡であつたさうであります。それで舞臺に出ると、自分はシテを壓する積りはないけれども、おのづからさういふ姿になつたといふことでもあります。寶生九郎のシテで「鸚鵡小町」のワキを務めた能を見た故老の話に、さすがの九郎も見劣りがしたといふことでした。

金五郎は、新朔とは藝風が非常に違つて、恰も秋霜烈日の如き、洵にきびきびしたものであつたさうであります。それで新朔と金五郎とを較べる人は、やはり金五郎をも見劣りがするとやつて居ますが、併しこれもしかに一代の名人だつたさうであります。泉鏡花氏が書かれたものの中に、金五郎の「紅葉狩」のワキの維茂が鬼女に誘惑される所で、金五郎のワ

キが能らしい無論極めて上品な嚴格なかたちではあるけれども、そこになんとも言はれぬ色氣があつたといふやうなことがありました。秋霜烈日のやうな藝風の中にかうした色氣が出るといふことは、やはり凡手の企及し得ざる所でありませう。

まあ、さういふ譯でありまして、成立から云へば、脇方五流の中で最も新しいに拘らず、代々名人を出し、それから弟子家の方にも、新朔、金五郎時代には尾上萬次郎（始太郎の父にして別名新治、新朔より年長）、尾上良勇（良十郎）、田宮勝章（東條照映の兄）など相當に勝れた役者があり、且これ等の人々が非常に家元に忠實であつたので、脇寶生は藝の上で外のワキ流を壓し、殊にワキとしては唯今家元の現存して居るたつた一つの流儀として、ワキの正しい傳統は最も多く脇寶生流に傳はり、外のワキ流儀も色々これに倣ふといふ結果になりました。

福王流は、少なくとも東京では全く觀世の謡をうたつてをります。高安流は、前に大友信安といふ人があり、私も明治三十年代の末頃によく見ました。今は東京では豊島氏がやつて居ますが、謡は金剛流を謡つて居られるといふことであります。しかしこの高安流の流儀は、名古屋の西村といふ人の子供が嗣いで、この西村氏の方は高安流を謡つて居られるといふこ

とであります。兎に角、脇方として最も純粹なかたちを保持してゐるのは、なんといつても脇寶生だけであると思ふのであります。これは自畫自讃のみではないと考へるのであります。

それから脇寶生流の特色であります。これは固より脇流ですから、ワキを専門に勤めることは申すまでもありません。序でにどうして下掛寶生と呼ぶかといふことを申上げて置きますが、シテの五流の中、觀世、寶生が上掛と呼ばれ、金春、金剛、喜多が下掛と呼ばれてゐるといふことは、諸君も御存知の事であります。それは上掛の方は京に、下掛の方は奈良に住んで居つた、さういふところから來たといふことであります。脇寶生の出ました春藤流が、元來金春流に屬して居つたものであり、初代の源七は金春源右衛門に學びました。金春流が下掛でありますから、隨て春藤流も下掛である譯だし、春藤流から分れた脇寶生も亦下掛といふことになると思ふのであります。シテの寶生流は元來觀世と兄弟であつて、二流共上掛であり、金剛、喜多は金春から出たものとなつて居り、共に下掛であり、謡本を見ますと、大體觀世、寶生はその文句に共通點が多く、金剛、金春、喜多も一々あつた譯ではありませんが、大體共通點が多いと思ひます。それでこの流儀の謡本はやはり下掛のシテ

の方に共通な所が多くて、上掛の觀世や寶生とは違ふ文句が多いのであります。

シテは舞を主とするのであります。シテが舞を主とするところに、また能樂といふものの本質が存すること、これはいふまでもないことであります。ワキの方は寶生新先生のお話に據りますと、元來は仕舞は無いのださうであります。「羅生門」だとか「鷺」だとか、「雲雀山」だとか「是界」だとか——さういふものの中に仕舞らしいものがあるけれども、それは文句に合せた仕草であつて、嚴密に言へば型といふべきで、仕舞といふものではないといふことであります。今日寶生彌一君が勤められる「張良」の如きも、仕草は多いが、新先生に従へばやはり型であり、殊にシテの黄石公が馬上から杵を投げる仕草に對しては、その杵の落ちる場所に依つて、型が臨機に違つて來るのださうであります。序でに申しますが、この「張良」は協寶生では非常に重い能でありまして、相續者が生れた時には、家元がその子を懷に入れて、たしか七夜かに「張良」を舞ふといふ習ひになつて居り、昔は一子相傳だつたのであります。

ワキの型としては、シテの型をできるだけ避ける。シテを引き立てる。あまり働きや動きを多くして自分を目立たせ、シテを蔽ひ隠すやうなことは努めてやらないといふのが、ワキの心得とされてゐるのであります。それから同じ意味の型であつても、シテの型とワキの型とは違ふのであつて、例へば盃をするときにも、シテの方は上からするが、ワキの方は下から上げて來るといふ違ひがあつて、いろいろな所で、ワキとシテはお互ひに重複することを避けて、シテを引き立てるやうになつて居るといふこととございます。

それから御存知の通りに、能に於いては原則的にワキが一番初めに出るといふことになつて居ります。でありますから先づ口を開くといふ點からいへば、各々の能の度毎に開口を務めるといつていいのであります。が、特に開口といふ役目がワキの家元にはあるのであります。これは將軍の世代りの時などに、一日或は二日も三日も續く能の初番に先だつて、そのお能の催しを祝ふといふやうな趣旨を陳べる文句であります。但し「翁」は能と言ひでう、神歌と呼ばれて特別扱ひに成つて居りますから、その「翁」の前にでなく「翁」の次の式能、例へば「高砂」などに於いて、その「高砂」のワキとして出て來て、高砂の文句を誦ふ前に開口をやる。これは協流儀の者のみのすることでありまして。最も近い例は明治四十四年七月に、東本願寺で宗祖親鸞聖人五百年の御遠忌があつた時に、新氏が開口を勤められました。これは初日だけにしか務めないはずですが、その時は本願寺で招待客が翌日は違ふといふ理

由により、特に二日目にもつとめられたといふことです。

それから問答（問對）はシテその他に對して行はれるが、これにもワキとしては色々な場合、色々な心持があるのは當然でせう。それからワキでは「語り」といふものが多い。殊にワキとして重いもの、例へば「道成寺」「攝待」「隅田川」「藤戸」などにさういふ語りがあります。これはワキだけのものとは言へないのであつて、シテの語りといふものも勿論ありますけれども、しかしワキの語りはやはり特色を有つて居て、又かなり花やかなものでもあり、諸君が舞臺でお聴きになるやうに、寶生新先生の語りなどは、随分引きつけられるものであります。さういふわけで、語りがワキの謡の顯著なる部分として、一つの特徴をなして居ると見てもよからうと思ひます。それからワキに小書が附いて重く扱ふ時には、よく語りがあります。例へば「船辨慶」の「船中語り」、「敦盛」の「語り入り」、「源氏供養」の同じく「語り入り」がそれです。

ワキの役は皆現在生きてゐる人間であります。シテは大抵幽靈であるとか神であるとか、鬼であるとか、女性であるとかいふやうなものでありますから、シテは殆ど總ての場合面を著ける必要が生じます。この面がまたシテの動作に無限の味ひを添へてゐるのですが、ワキ

は前述の如く生きてゐる人間であり、又女に扮することもありませんから、決して面を着けるといふことがないのであります。ワキで現實に生きて居る人間でないものは「邯鄲」だけであります。「邯鄲」のワキは大臣ですが、盧生の夢中にあはれる幻であります。しかしその科は全く現實に生きてゐる人間と同じであり、従つてこの場合にも面をかぶる必要はないのであります。すべて現實の人間であるといふことが、やはりワキの特色を形作つて居ることとは、いふまでもないことであります。ワキは成るべく生きた儘の人間の相すがたを現はすやうにして、あまり工夫を加へないやうにするといふのが、ワキ方の心得ださうです。しかし生きた儘の人間といつたところが、無論藝術の事でありますから、そこにいろいろの工夫が施され、いろいろの取捨が加へられるといふことは、固よりいふまでもないことでもあります。

次に、協寶生の謡の特徴に就いて聞いてゐる所を申し上げますが、今日春藤流のワキは見られませんでしたやうに、協寶生は春藤流から出たのではあります。今日春藤流のワキは見られませんが、春藤流のワキ師といはれた前述の鑄木（祚胤）といふ人を時々舞臺で見ましたが、その特色を十分捕捉することができませんでした。しかし新氏のお話に據りますと、協寶生流の謡は春藤流から出たに拘らず、春藤流の謡とは全然違つたも

のだといふことであります。だが文句に就いては、兩方の謡本を調べて見たならば、或は共通な所が多いのではないかと想像されます。即ちそれは春藤流によつていくらか改めたものかと思はれます。前に申しましたやうに、下掛の金春、金剛、喜多の方と脇流儀の下掛寶生の謡本とは、非常に共通な所が多いといふことから、さう考へられるのであり、しかし下掛寶生流の謡が何流に一番近いかといへば、上掛寶生流即ちシテの寶生流に最も近い。これは寶生の座附といふことに成つた爲に、元來は春藤を通じて金春から出ながら謡方を上掛寶生に近づけたのかと思はれますが、これに就いての正確な所傳は無いさうであります。それでいろいろな點に於いて上掛寶生、シテの寶生とは似ては居りますが、しかしながら發聲の仕方その他に就いては、大分異なつてゐる所があります。上掛寶生の方は、脇寶生に較べると聲の抑へ方が一層強いやうに想はれます。上掛寶生にある所のあの弱吟の「甲繰り」は、外の流儀にはありませんが、やはり下掛寶生にもありません。私等素人の聞いた感じから申しますと、觀世は高く、寶生は抑へるといふやうな大體さういふ感じがいたします。しかし、觀世の發聲の仕方の、はつきりしないでばやつとしたやうな所は、金剛、金春のおふやうなのと共通であるかと思ふのであります。喜多の謡ひ方は、近頃に成つて大分變つてさ

うであります。やはり大體は金剛、金春と近いものでせうけれども、私の感じでは、喜多があらゆる流儀に共通な要素を一番多く有つてゐるやうに想はれます。まあ下掛寶生の謡ひ方は大たいはつきりして居り、上掛の寶生よりは高いが、又呂に低く抑へるといふやうな所も随分あり、相當謡に「めり張り」が著しいやうに思へます。型の方がシテに較べて地味な所から、謡に力を入れたといふ理由もありませうが、謡ひ方が細かであるといふことは、少なくとも現在の下掛寶生の特色をなしてゐると思ふのであります。

前に申しました小川氏は、主として新朔先生に、それから金五郎先生にも、親しく脇寶生の謡を習はれた人であります。この人は前に臺北帝國大學の教授として臺灣の蕃語を研究せられ、その點で不朽の功績を擧げられた人ですが、實に立派な謡手でございます。この方が下掛寶生の特色はどういふ所にあるのであらうと、或る日新朔先生にきかれた時に、「山から瀧がどどろと落ちるやうに、なんのこだはりもなく謡ふことです」と答へられたさうであります。それを解釋して小川さんは、「あまり節などに一々こせこせしないで、素直にノリを附けずに謡ふことが、脇寶生流の特色である」といはれました。一體、ワキの謡として拍子に合ふといふのは、次第か道行か待謡くらゐであつて、その外は大抵拍子に合はせない。

「地」の所は無論拍子に合はなければなりません、しかし脇寶生の謡は昔から拍子に合ひにくいものとされ、例へば石井（一齋）といふ大鼓の名人なども、脇寶生に拍子を合はせるのは六ヶしいと言つて居つたさうであります。又金五郎が何處かの舞臺で「東岸居士」の獨吟をした時、樂屋に居た囃子方が、あれを一つ打つて見てはどうか、といったといふ話もあります。勿論謡といふものには、全體から觀てノリがあるのですから、のらないといつたところが比較的話であります、しかしワキの謡といふものはシテに較べれば、所が少ない、すかりと、らずに比較的にぬいて、素朴に謡ふ。さういふ點に於いてワキの役どころの謡ひ方は陽の聲である。これはワキが現實の人物であるといふ所から來て居るので、シテの謡の如く裏聲とでもいつた陰の聲を出して、曲折を細かにするといふことが少なく、むしろ溢く枯れて居る方です。

私は東京では多分明治三十六七年頃から能を見たと思ひますが、その時分には、梅若實氏は固より寶生九郎氏もシテは勤められなかつた。九郎氏は地謡に出るとか、一調をやるかといふことがありましたが、シテの元老的名人としては僅かに櫻間伴馬（左陣）氏の能を觀た位であり、金五郎氏のワキも遂に見ませんでした。私が特に遺憾に思ふ事は、新朝先生の舞

臺を一度も觀なかつたことで、小さなからだで舞臺を壓する偉容、山からどどうツと瀧が落ちるやうな謡に、一度でも接して見たかつたと思つて居ります。

脇方でありますから、舞臺ではワキを勤めますが、素謡としてはシテも謡ふ、シテヅレも謡ふ、地も謡ふといふことは勿論でありまして、よく私等の流儀に對して、一體シテ方の謡はあるのかないのかと尋ねられるのでありますが、これはシテ流の素謡でワキを謡ふのと同じことでもあります。兎も角もシテ、ワキ兩方の特色を生かして謡つては居ます。

脇寶生は、私の郷里伊豫の松山ではなかなかはやつたものであります。藩侯の中に、脇寶生の非常にお好きな方があつて、特に命じて脇寶生で以て地を謡はすといふことがあつたさうであります。それで池内信嘉氏や高濱虛子氏のお父さんは、藩侯の命によつて、能役者ではなかつたけれども、ワキ寶生で地頭を勤められたといふことがありますし、私等の子供の時分にも、時々脇寶生の地上掛の人が能をするといふやうな事がありました。尤もこれは異例でありまして、東京では行はれてゐないことでもあります。しかしさういふ點から觀ても、下掛寶生が地をも勤め得るといふことはいへるのであります。他流の謡を長年やられた素人の巧者で、出來れば一つ今から下掛寶生を習つてみたいといふやうなことをいはれるのも、

下掛寶生の謡が單に脇の謡として許りではなく、地の謡としてもシテの謡としても、十分に特徴を發揮してゐることを示すものであります。外の脇流儀が殆どシテの謡を謡ふといふことになつて居る時に、兎に角ワキの謡がシテの謡どころに於いても地に於いても、獨特の謡ひぶりを嚴然として保持してゐる事は、下掛寶生の流儀としての強みだと觀て宜いと思ふのであります。

いろいろな役々に就いても、夫々脇寶生の特色はあるわけですが、シテあつてのワキですから、大體に於いていへば、やはりシテが重くなればワキの役も重くなるといへませう。例へば老女物や「道成寺」はやはりワキとしても重く、「半蔀」の立花とか「朝長」の懺法とかいふ小書附の時には、ワキも語りがあつて重くなります。「清經」の「寝取り」、「柏崎」の「笠の段」などの場合にもワキは重く扱ひます。しかしワキが殆ど重役になつて居る、「壇風」、「羅生門」、「谷行」、又今日演ぜられる「張良」などが、脇流に取つて重いものであるのも亦當然の事でありませう。その中でも役柄に應じて「張良」は二十代、「壇風」は四十代、「谷行」は五十代といふやうな、大凡の年頃があるさうです。

役の心持といふことにつき、寶生新先生から聞いたことでもあります。 「隅田川」をおと

うさんの金五郎先生に稽古してもらつた時、「これは東國隅田川の渡守にて候」といふ名乗を謡ひ出されたところが、それでは船頭にならないと言はれた。そこで又謡ひ直されたところが、今度は「隅田川」にならないといつて叱られたといふことです。船頭といふ氣持も出さなければならず、「隅田川」といふ曲の重さにもふさはしくなければならぬわけせう。色んな曲に於けるワキの役々について、各々ワキとしての獨特の心持、従つて苦心があるといふことは、例へばワキ能の「高砂」のワキは旭日の登る如き心持でやるし、武張つたものでも「藤戸」のワキと「安宅」のワキとは無論違ひますし、「松風」や「野の宮」のやうなわびたもの、山伏、行者の荒いものなど、數へ立てれば役々によつて色々の性根や心持のあることは、いふまでもないことでありませう。その中にも「自然居士」のワキは、あらゆるワキ役の中で最も下品な役とされて居ます。

またかういふやうな話があります。新之丞、金五郎、新朔と三代揃つて大奥のお能を勤めた頃のことです。新朔が「鉢木」のワキを勤めた。この曲の中に、行脚僧が一夜の宿を借らうとして、わざわざ主の歸りを待つたのに、再三懇願しても借してくれない。そこであきらめて行く時の捨ぜりふに、

ワキ「あら曲もなや。由なき人を待ち申して候。」

といふ詞がありますが、その詞がどうしても自分の思ふやうに出来ない。にも拘らず、祖父の新之丞が一向教へて呉れない。愈々勤めの當日になつて樂屋入をしたところが、新之丞からの使者が文箱を持つて來たので、あけて見ますと、「あら曲もなやといふ所は獨語を言ふ積りで何氣なく謡つたらいい」——といふ風なことが書いてあつたといふことです。

それからこれは唯一場の逸話に過ぎないのでありますが、その新朝が「谷行」を勤めたことがあります。この曲は山伏峯入の時に、當人の懇望によつて松若といふ子供を連れて行く。その子供が途中で病氣にかかる。病氣は穢れだといふわけで、大法に依り、谷行といふ生きながら谷の中に抛り込むといふ行事をする。それを神様が出て來て救ふといふ筋になつて居り、子方が要るのであります。子方は殆どシテ方から出すことになつてゐるのでありますが、能の中で曲の筋からワキに非常に深い關係の有る、例へば「壇風」、「谷行」といふ如きものは、ワキから子方を出すこともあるさうであります。この新朝の「谷行」では今の新氏が子方を勤めたさうで、その次に勤められた時には新氏が小先達であつて、今日「張良」のシテをお勤めに成る野口兼資氏が子方に成られさうであります。その後で新朝がどうも野口（兼

資）が可愛らしい子なので、情が移つてと語られた話を聞きましたが、新先生の話によると、その時分には野口さんは既に十三四になつて、子方としては藁が立ち過ぎて、可愛ゆくはなかつたといふことです。かはゆかつたかかはゆくなかつたかを、私は確かめるわけにいきませんが、ただ一つの挿話として序でに申上げた譯であります。私の見た「谷行」は東條照映氏のワキで、子方は松本謙三氏の相弟子でとくになくなつた古鍛冶剛氏であり、これはほんとうにはかはゆうございました。

これで大體下掛寶生（協寶生）といふものの特徴に就いて、極くざつと申上げた積りです。

一般にワキの舞臺に於ける存在理由といふやうな事に就いては、今日野上（豊一郎）君の書いた小冊子をお配りになつたやうですから、私はそれに譲つて多くを申上げませんが、ほんの少し觸れて見たいと思ひます。

能が始まつた時にはワキの役は今のやうに分れてゐなかつた。併しながら能が発達分化するに隨つてワキの家が分れて來た。これは能に於ける必然的な發展の徑路であると思ひます。私はワキの役目といふものに就いては、野上君とは少し考が違ふのでありまして、野上君

は能の主役が一人であると主張せられた。シテといふ名の示す如く能の主要なる演者がシテであることは、否定し得ないことでもありますけれども、しかし能は世阿彌がいつたやうに、舞歌を主とするものであると共に、又一つの樂劇であります。ただその構成が非常に單純であるけれども、しかし、その樂劇即ち一種の劇であるといふ性質からして、どうしてもその中に對立といふものがなければならぬ。シテを主としてゐるけれども、しかし其處に何か對立がなければ、一つに纏つた全體としての樂劇といふものは成立しないのでありまして、はじめからワキとの對立といふものは考へられていいのではないかと思ふのであります。ワキはなるほど見物の代表者みたいなものだといつても、少なくともシテの動作を引き出す役は勤めてゐます。又見物の代表者であると同時に見物にシテを紹介する者であり、又同時に一曲の心持といふものを表現するのであります。ワキが一番初めに出て來て、或は次第を諷ひ、名乗をするといふ事に依つて、その一曲の心持が決まるのでありますから、これはただ單に見物の代表者であるといふやうにいつてしまふのは、主役は一人であるといふ考方に拘泥することが甚しきに過ぎはしないかと、私は考へるのであります。この席から野上君と議論をするといふ積りはありませんけれども、私の考はさうであります。野上君は『能——

研究と發見——』といふ書物を發表されました、能樂の研究に新紀元を劃されたのであります。私は能樂の本質といふやうなものに就いて興味のおありになる方は、同時に、小宮君の書いた『能と歌舞伎』といふ書中にある、「能樂の本質」といふ文章を一覽されることを希望するのであります。

能樂の大成者と謂はれる世阿彌が、その『十六部集』中の「習道書」に於いて、ワキの心掛を敍べてをります。

「棟梁不足なればとて、ワキのシテの上手別心の曲をなさば、一座不同にして能の順路あるべからず、善きにも従ひ悪しきにも従ふを以てワキのシテとす、是第一の俱行なり。」

——棟梁（シテ）の技量が足りないといつて、ワキのシテ即ちワキ役者が己れの技倆をほこり、シテと別のやうな働きをすれば、その曲は纏まらずこはれてしまふ、善きにも悪しきにも従ふを以てワキのシテの本分とする。これが一共同演出として第一に心掛くべきことだといふのです。兎に角ワキがシテと離れて勝手な振舞をしてはいけないといふことを誠めてゐるのであります。しかし同時にワキがシテに對するやり方にも、既に舞臺に上る以上は、單なる見物人ではなくして、非常にむづかしいやり工合があるといふことを示してゐる

と思ふのであります。善きにも従ひ悪しきにも従ふといふことは、シテが善ければ力を入れ、悪るれば力を入れないとか、さういふのではなくして、シテのよさを十分に發揮させ、その舞臺効果を全くせしめるやうに努め、又シテがまづければ、これを引き立て引き締めてしやんとさす、さういふ働きをする。善きといつてこれときほひ、悪しきといつてなげやりにしないといふ心掛であつて、結局シテに對して能の一曲を構成する重要な要素であるといふことになります。私の本當の考は野上君と一致しないのではないと思ふのでありますが、どうも野上君が、シテの役といふものを主張するのに急なやうな氣がするのであります。立派な能を構成するには、獨りシテがいいといふだけではだめで、ワキが非常に必要であるのはいふまでもないことであります。明治三十六年に寶生の別會で、寶生九郎が「關寺小町」を勤めたことがありましたが、ワキの寶生金五郎とは仲が悪くて、そのワキを勤めて呉れと言はれたときに、金五郎は即座に斷つたさうです。ところが、九郎が態々金五郎の宅を訪ねて、「關寺小町」のやうな重いものを勤める時には、ワキを選ばなければならぬ。外から自薦でやらせて貰ひたいといふ者もあるけれど、是非あなたにやつて貰ひたい、と懇切に頼んだので、金五郎氏も即座に承知したといふ美談があります。序でに申しますが、關寺は

新朝のワキで九郎が勤めたこともあるさうで、それを見た當流の脇皆傳の耆宿である故藤野漸氏が、九郎の語はまねられるが新朝の語は眞似が出来ぬ、と感嘆されたといふ話も聞きました。

上手のシテといふものは上手のワキを選ばなければならぬ。シテとワキとの技量が相伯仲することに依つて、そこに立派な能が觀られるのであります。さういふ點から觀ると、近頃の能はいろいろの點に於いて遺憾が多いのであります。シテの非常な上手に配するに、殆ど素人のやうなワキを以てする。又ワキが秀れてゐる所に持つて來て、シテは殆どそれに副はないといふやうな事がありますが、これはシテ方の心掛も悪いのではありませうが、ワキ方の心掛に於いても、非常に責任があることは勿論でありまして、ワキ方に於いてもさういふ點をよく考へなければ、聽てワキ方獨立の意義を自分で没却し、ひいては能樂全體の衰頹を招くことになるのではないかと心配するのであります。

曩にも申したやうに、この脇寶生は、脇方流儀の中で家元の残つてゐるところの唯一つの流儀として、而も今の新先生が勝れた技倆を持つて居られる爲に——尤も新氏も明治十八年頃、おとうさんの金五郎がワキ方では食へないから醫者にするといふので、十六歳の時から

十年ばかり舞臺を遠ざかつて居たことがあります。これは新氏の爲にも當流の爲にも遺憾なことでありました。——協流儀としての存在を十二分に發揮することが出来たのでありまして、明治の末あたりには東條照映とか尾上始太郎とかいふ古い弟子が居られて、老境に入つて藝の上た衰へや缺陷を見せたといふことはあるけれども、やはり一種の風格を以て人を引きつける所がありました。今日、新先生も既に老境に入られ、その弟子松本謙三君や寶生彌一君は、藝に熱心であり、技に於いても東條さんや尾上さんより慥かな所があると思ひますが、風格を發揮する點では、まだ正直にいつて至つてゐないと思はれます。ワキの家元として残つた唯一の流儀であり、又その謡にも語りにも十分特色があり、十分の存在理由を持つてゐるといつても、しかし人がなければその流儀は衰へるより外仕方がないのでありまして、さういふ點で松本君、彌一君等の奮起を望まなければならない譯であります。シテの方には多士濟々たる上に有力な保護者があつて、なかなか盛んにやつて居られますけれども、ワキの方は、その役がシテでなく仕舞がないといふやうな所から、素人の弟子も少なく、従つて保護者も少ないといふこともありまして、經濟的にいつてもワキ流の支持は困難に成つてゐる——さういふ實際の姿であります。

前にいつた當流の耆宿藤野氏の息に、藤野準といふ私の竹馬の友がありまして、廣島高等工業の教授をして居り、これも中々いい謡ひ手でありましたが、この準君が生前上寶生の職分桐谷政治氏と一緒に謡つた時に、桐谷氏がどうもお流儀のワキで謡ふと私は非常に氣持よく謡へる、ワキを自分の流儀で謡はれると不満足だ、といはれたさうですが、これは單にお世辭ばかりではないと思ひます。往年、梅若流分離の當初頃、梅若萬三郎氏の「安宅」に六郎氏がワキの富樫を勤めた事があつたが、それを見た人の感想に、六郎氏ほどの藝を以てしても、シテがワキを勤めることは物足りないといふことを聞きましたが、これは當然の事ではないかと思ひました。殊に、舞臺に於いては、ワキがワキらしく謡ふといふことに依つて、その舞臺は引き立つのではないかと思ふのであります。

それで、ワキを輕んずることは同時に能樂を輕んずることになるのではないか、さういふ點で協寶生といふものの、將來の能樂に對する責任は非常に重いものであると、かういふ風に考へまして、私達ただ素人としてすこし許りこの謡に縁を繋いでゐるといふ關係からしても、この流儀の繁榮を望む氣持が切なのであります。どうかこのワキ流、従つて下掛寶生流の存在を、今日御來會の諸君に認識して頂いて、ワキの流儀といふものを本當に正しく又健

かに傳へるやうにしたいといふ爲に、かういふやうな詰らない話を申上げた次第でありまして、能を御覽になる前に、長い間の清聴を汚したことを深く感謝いたします。

附記 野上君の小冊子「ワキの舞臺的存在理由」を後から読んで、私から別にあのやうな異議を提出する必要のなかつたことを感じました。野上君の説も従來の説よりは十分緩和して來ました。ワキが次第に分化してその存在を主張して來る徑路も、實に簡明によく書かれて居ます。この事を一言おことわりしておきます。(昭和十六年十二月五日)

又附記 これは能樂鑑賞の會第六回、彌生會との合同主催能(十月五日)における講演の筆記である。

少年時代に讀んだ古典

私の少年の頃にはまだ、郷里の少年が朝薄暗い内から起きて、二三は残つて居た漢學先生の塾へ、四書の素讀を受けに行くといふ風があつた。私はさういふ所へは通はなかつたが、家で父から素讀を受けた。小學入學前から小學時代にかけて、四書の外に「十八史略」、「古文眞寶」、「文章軌範」、「唐詩選」、「八大家文」等を讀まされた。父は頼山陽と郷里を同じうし、山陽の崇拜者であつたに拘らず、家には「日本外史」の所藏がなくて、却て所藏の「日本政記」を讀まされるといふやうなこともあつた。父はその當時の教養として漢文を讀みましたが、組織的に漢學を修めたといふわけではなく、漢詩も漢文も作れず、私に讀ます本も、先づ所藏の中から父の讀めさうなものを抽出するといふ風であつたので、若し父の漢學の力が一層しつかりして居て、本當に漢文漢詩の妙味を解して居たならば、私も當時或は漢文漢

詩を作つたかも知れない。私が中學に入つた時、上級生には漢文漢詩を作つて校友會雜誌に載せる者があつたが、私達の級にはもうその出来る者はなかつた。「唐詩選」などにして、父が漢詩の趣味を解して居たならば、少しは教へられた私の頭にも残つて居るはずだが、それが一つもない。道學的だつた父の興味を持つたのは四書であり、その中でも父の最も愛讀したのは「孟子」であつた。これは四書の中でも孟子が一番分り易いといふことにもよつたのであらう。父は「孟子」の中には政治も道徳も一切の教が含まれて居るからといつて、これを反復熟讀することを命じた。従つて私も孟子は随分熟讀したはずである。併し私は中學の終り頃には、父の漢文の力を少しは凌ぐ位になつたし、生意氣にもなつたので、父に對して「孟子」は元氣が好いけれども、味は「論語」の方が深いなどといったものである。「大學」と「中庸」とは短かつたし、殊に「大學」は毎日始から終まで素讀したから、今も尙暗記して居る所がある。漢文の意味を考へるやうになつたのは、先づ中學時代からであるが、意味を問はぬ少年時代の素讀もあながち無意味ではない。「緝蠻たる黃鳥丘隅に止まる。子の曰はく止まるに於てその止まる所を知る。人を以て鳥に如かざる可けん乎」とか、「詩に云はく、彼の淇澳を瞻れば菴竹猗々たり、斐たる君子あり、切るが如く瑳くが如く琢つが如

く磨ぐが如し。瑟たり、憇たり、赫たり、喧たり、斐たる君子あり、終に誼る可からず」とかいふ文句は、その調子なり文句なりを反復して居る中に、おのづから口ずさまれるやうに熟して、今にそれを覚えて居る。さうしてその意味なり文章なり語句なりを、考へるともななく味ふともなく考へたり味つたりして居る。これはそれを消化してから入れるのでなくて、入れてから徐ろに溶かしてゆくやうなやり方であるが、かういふ入れかたも無効だとばかりはいへない。漢文は元來棒讀みの文章であり、それを反り點を附けて讀むといふことは、いはば漢文を殺して讀むことである。だから近頃の漢文教授法に棒讀みを主張するもののあるのも當然であらう。併しさうして日本流に讀み直したものの内にも、原の讀み方と共通な調子が出ることもあらうし、又違つた調子が出ることもあらう。それがどれだけ平行し、どれだけ乖離するかといふやうな學問的研究が出来ると思へば、これは日本人の外國文化攝取の方法や實果に對して、今の如く漠然たるものでなく一層精確な解明を與へはしないかと、考へられもする。さうした調子だけでなく、意味が分りもし、又その意味と文章の調子とがぴつたり合つて居るやうに感じた場合もなくはない。例へば「十八史略」の漢楚鴻門の會だとか、趙の蘭相如が璧を奪ひ返す所などはさうである。四書の意味を解するには、蘭溪先生著

といふ「四書略解」によつた。これは嘉永年間の著であつて、蘭溪先生といふのは重田正爲である。どういふ人だか知らないが、中學生の私にも大體よく分るやうに書かれて居た。

かうして子供の時にいくらか漢文を読み習つたことが、私に何等かの影響を與へたらうことはいふまでもない。私の書く文章等にも或はそれがあるかも知れない。だが私の性質にとつては、詩人的に誇張した表現よりも、自分の思想や感情を出来るだけ素直に地味に表現するといふ要求の方が強いから、漢字による誇張的表現を用ひることは少なく、又その華麗な多角な形容語を覺えることも少なかつた。併し議論殊に論争になると、私の文章にはやはり漢文の調子が出るやうに思はれる。

この頃我國の古典教育が大分やかましくいはれるが、私の中學に入學した時、明治二十八年頃校友會雜誌に出て居た上級生の文章は、徳富蘇峰張りの時文の外には、漢文漢詩か擬古體の和文和歌が多く、その外に新體詩といふものも散見するといふ状態であつた。所謂美文なるものは、概ね擬古體の「こそ」「なん」「侍り」入りの文章であつた。これは當時の青年の受けた國文が、主として平安朝時代の女流文學や幕末の擬古文であつた爲か、その邊の理由は私の今よく明かにし得ぬ所であるが、兎も角も當時の中學教育に於ける國文に現代

文的要素が少なく、又「國文讀本」なるものが出來て、色々の文章の見本切を見せることが少なく、中學でも「伊勢物語」「土佐日記」などの丸本が用ひられたといふこともあり、又論文や記實には大體漢文脈を受けた文章が既に出て居ても、言文一致はほんの初めで未だ普及せず、小説などの元祿調の文章もまだ廣い影響が乏しく、敘情的な文學的文章が普ねく體を定めなかつたのによるのではないかと考へるが、その邊の本當の實情は更に探究を要する。樗牛の「我が袖の記」ぶりの美文が青年の間に行はれるやうになつたのは、明治三十年代の末であらう。

漢文教育にしつかりした方針も方法もなかつたやうに、我國の古典に關してもしつかりした教育方針はなかつた。例へば「古事記」などは中學時代には竟にこれを覗ふ機會を得なかつた。「源氏物語」もさうである。私の中學時代に全體讀んだのは、「伊勢物語」「方丈記」「土佐日記」「竹取物語」「徒然草」「十六夜日記」くらゐのものである。「神皇正統記」「太平記」「平家物語」「源平盛衰記」「枕草紙」「大鏡」「増鏡」などは、國文讀本で斷片的、部分的に讀んだばかりであるのに、割に感銘の残つて居るのは、少年時代の感情と記憶との力強さによるものであらうか。「伊勢物語」「竹取物語」「方丈記」「土佐日記」

「十六夜日記」などの全體を學校で讀み得たのは、本文が短い爲である。「土佐日記」の簡素な表現は中學生にはよく味へなかつた。「十六夜日記」の感傷の方が分り易かつた。「神皇正統記」では、この書を書かざるを得なくなつた著者親房の心事を披瀝した文章は、文句は忘れたが切々たる感銘だけは残つて居る。「太平記」の「落花の雪に踏み迷ふ交野のみの櫻狩」といふやうな調子のいい文章は、やはり中學生の興味をも引いた。「伊勢物語」や「枕草紙」の簡潔と機智とは、先生から教へられはしたが、その味の分るやうになつたのは後の事である。中學の末頃、正岡子規の從弟やその一統達、——その中には今正金銀行に居る岸駿、藤野古白の弟の準、その從弟の服部嘉香や、今松山高等商業に居る伊藤秀夫なども居た——と一緒に、夏休に「徒然草」や「伊勢物語」などを輪讀したことがあつた。これなどは確かに爲になつたと思つて居る。「徒然草」はその文章が平明で簡潔だといふこともあつたらう、その頃高等學校の入學試験にはよく出たものである。私の受けた年は志望學校と關はりなく、どこの高等學校でも受験が出来、私は岡山の六高で受けて一高を志望したのであるが、私の下宿の隣室に居た讃岐の受験者二人は、國語の試験の前夜に徹夜して「徒然草」を讀んだりした。

少年時代に比較的親しんだ和歌は「古今集」と「新古今集」とであり、「萬葉集」の歌は諸書に散見するものの外には殆ど知る所がなかつた。明治三十年代の初頃には、まだ萬葉集は今のやうに弘くもてはやされて居なかつた。「古今集」は家藏の書があつて、妹が毎日讀まされて居たので覺えた。「新古今集」は知人の家にその歌留多があつて、正月にそれをつたのでいつしか熟するやうになつた。古今集に比べてその花やかな清新な調子に心を引かれることが多かつた。妙なもので今でも時々思ひ出して口ずさむ歌には「新古今」が多い。古典の内最も親しみの少ないのは「源氏物語」である。これはほんの部分的にしか讀んだことはなく、源氏に對する私の知識は、殆ど源氏を材料とした謡曲其他による二次的なものに過ぎない。芭蕉の源氏に因みのある句を解釋した時、柏木、夕霧とあつたのを、名前から女だと思つて、それが大將と名のつく人であつたことを知らず、おまけにその間違ひを活版で披瀝したやうな、恥かしいこともあつた。

私が高等學校以來力を西洋の言語に注ぎ、西洋の書物を読み出したといふことにもよるが、私の和漢の古典に對して持つ親しみは、主として小學中學時代に結ばれたといつてよい。この事情は今後の人々にとつて決して同じではないであらうが、國民的教養としての古典の滲

潤が、頭の固くならず感激の強い少年青年時代に於いて、最も多く効果を發揮することは争はれないであらう。そこで古典教育として、如何なる時期に如何なる古典を如何なる方法で読ますかが、重大な問題になつて来る。それには先づ古典の選擇である。あらゆる古典を悉く読ますことの出来ぬのは勿論であるが、併しその選擇の標準は、今の時代に行はれるやうな偏狭なものであつてはならない。次にその抄出である。殊に學校教育に於いては、選ばれた古典にしてもそれを残らず読ますわけに行かない。この取捨に就いても、今の遣方には古典を冒瀆するものがなくはない。時期の問題は例へば中學に於ける古典教育、小學に於ける古典的教育といふやうなこと、方法としては例へば古事記の神話を如何に少年に傳へるか等の、問題その外いくらでもあらう。古典教育が一層賢く確かな考慮の下に整理せられたならば、國民教育に資することは一層大であらう。

一夕支那劇を見て思つたこと

昭和の初、張作霖がまだ紫禁城に近い何とか堂といふところに盤踞して居る時であつたが、私は北京に十日ばかり滞在し、その中一晚芝居を見に行つた。その頃のノートでも捜し出せば、劇場も役者も出し物も分るか知らぬが、今はすっかり忘れてしまつた。ただその中に伍子胥を主人公にした歌劇があり、これに扮したのが有名な俳優だつたといふことだけ覚えて居る。頭の頂邊から出て来るやうな支那の歌妓や女形の歌謡にも、一種の強さと情調とを感じないことはないが、その役者の男聲は、さすが名優と呼ばれるだけに、その聲にも潤澤があり、その旋律にも面白味があるやうに思つた。固より意味の分るはずはなかつた。その外に印象に止まつたのは、演技中に熱いタオルを客に向つて投げることに、歌曲の妙所妙所に^好好と見物の呼ばはる聲とであつた。日本人で劇通といはれて居る人が、支那服を着て頻り

に好好といつて居た姿、その人の五十恰好にしては皺の多い顔なども、猥雑なその劇場の空
氣の中から今も浮んで来る。併し一番著しかつた印象としては、出場する俳優の毒々しく、
ンキのやうに塗り立てたグロテスクな顔と、ものものしい隈取りとであつたが、それにも増
して私を驚かしたのは、舞臺の後に固まつて居る樂團の服装であつた。彼等は皆平服のまま
で出場して居るらしく、或る者は鳥打帽を或る者は中折をかぶつて居り、或るものは黒地の
所々が白く光つたやうな汚い平服をつけて居る。かうした第一流か第二流かの名優の演出に、
こんなに無造作な恰好で奏樂者が出て來るといふことは、我々日本人にとつては不思議であ
る。例へば菊五郎の直侍は、尻端折の太股もあらはな無作法な姿で舞臺に出て來ても、延壽
太夫が中折をかぶつて着流しで清元を諺ふといふが如きは、到底我々には考へられぬこと
である。尤もこれには日本人の着流しに比べては、支那服の方が儀容に富んで居るといふこと
も幾分あるか知れない。併しそれにしても日本人の舞臺に臨む心持と支那人の舞臺に臨む心
持とに、著しい相違があることは疑ひなからう。尤も中國が昔からさういふ風であつたか、
又外の劇場はどうであるかと聞かれれば、私はそれに答へることを知らない。
けれどもそれに似たやうなことは外にもある。北京あたりの有名な料理店の二三で御馳走

になつたが、食堂の中に殆ど裝飾はなく、又室内は決して小綺麗とはいへず、その給仕とい
ふ如きものも、別に客に接する爲の衣服や身嗜みをして居ると思へず、その食器の美しさ
などにも一向留意する所が見えない。簡単にいへば、旨いものを豊富にさうして安價に食ふ
ことが出来れば、外のことは問題にしないといふ風である。飯を食ふ部屋に、その食器に、
掛地に、生花に、女中の御化粧に、着物に、兎も角も何等かの註文を持ち、さうした費用を
料理代の中に多分に負はせられること、日本の料理屋の如きは、恐らく世界のどこにもある
まい。第一料理屋の給仕にむくつけき男子が出て來て女が出て來ないといふことは、日本人
の嗜好にはかなはないであらう。さうしてその給仕人の心持からいつても、大體に於いて日
本の女中は、きつとかまへて緊張した態度があり、中國の給仕にはのそのそとして一つも固
くなつたところが見えない。かうした心持は中國人と日本人との色んな生活面にも存するの
ではあるまいか。パール・バックが、日本人にはユーモアがなく、中國人のユーモアを解し
ないといつたのも、或はかういふ邊にありはしないかと思はれる。

役者と料理屋の女中とを並べることは、役者を侮辱するものだといはれるかも知れぬが、
廣い意味でお客を相手にし、その爲に苦心することは相通じて居る。さうしてその生活する

雰圍氣やその接觸する對象に、浮世的な、動もすれば淫蕩な世界の多いことも相通じて居る。併しここいらで女中との道連れはやめて、役者や芝居を圍繞する三味線藝術家だけについて考へよう。長唄にしても清元にしても新内にしても、その題材には、遊里だとか心中だとか、嫉妬だとか哀傷だとか、男女の情事、それもかなりただれくづれた情事が多い。その内容は決して健全なものとはいはれないだらう。さうしてかうした藝人の接觸する世界も人間も、花柳の巷やそこに呼吸する人々が多いであらう。而もそれにも拘らず、彼等の藝に對しては、苦しい稽古や烈しい鍛錬が課せられて居る。昔の人は近頃の藝人にかういふ稽古や鍛錬の乏しくて、その藝が生半可になつたことを憤慨するけれども、併し専門の藝人ではなくても、遊客の座敷に踊り歌を歌ふ藝妓や雛妓ですらも、恐らくその稽古や鍛錬に於いては、小學や中學で生徒達が受ける所謂鍛錬とは比べられぬものがあるのではないか。近頃鍊成といふことがやかましくいはれ出したけれども、存外この鍊成といふことは、まだしも役者、藝人、藝妓等の中に残つて居るのではないかと想像せられるが、どうであらう。さういふ點から考へれば、溫柔郷に生活するといはれる彼等の藝には、やはり武道だとか茶道だとかにも共通な、日本的なものが存するのではあるまいか。

一たい文化や藝術の歴史的變遷を、乏しい知識から來た想像で云々するのは避くべきであらうが、かうした藝事の傾向には、何といつても徳川治世の三百年が、多分の形成を與へたものと考へられる。例へば能樂が今日の如く堅固な型に鍊り上げられたのも、江戸時代になつてからであり、觀阿彌、世阿彌の創成時代には、恐らく今の能に比べて奔放自由な所を多分に持つて居たに相違ない。演藝に就いていつても、江戸時代を通じて色々な演藝や音楽は型を整へると共に、大體からいへばその奔放不羈な發展や擴大を止めて、それを細緻に優婉に内攻させてゆくといふ傾向を取つたのではないか。この傾向は、江戸時代の演藝が主として町人によつて造られたこと、町人が社會的に壓迫されて居て、その生活をさうした狭い社會圈の中に限らざるを得なかつたことによつて、強化せられたが、又他方に武士社會に出來て來た風習や禮儀の嚴正にも、影響されなかつたとはいへないであらう。遊藝の中に見られる鍛錬の嚴しさ、稽古のやかましさといふやうなものを、直ちに武藝の影響とはいへなくても、その影響の皆無を斷言することもむづかからう。併しかうした演藝に於ける鍛錬、その到れる境涯としての心身一如の境は、既に天才世阿彌の書き残した能樂論にも、實に力強く現はれて居ることを考へれば、武道といはず、藝道といはず、遊藝といはず、この精神の

國民的傳統として生きて居ることは久しいものであつて、これを單に江戸時代に於ける武士のたしなみやしつけの影響とのみ見るのは、やはり中らないかと思はれる。

江戸時代に於ける太平の繼續、敵國外患がない島國の中の社會的制限が、かうした遊藝を一層細かい味にし、その規模を一層小さくすると共に、他方には「通」だとか「いき」だとかいふ、多分に限られた世界への通用、それを味ふ爲の特殊の訓練や感覺、又その弊としては客觀性の乏しい獨りよがりや淺薄さを伴ひ易きデリカシーを養ひ來つたことを認めると共に、かういふ風な遊藝にも、嚴しい鍛鍊と烈しい緊張とが消失しなかつたことは、やはり日本人の國民性の奪ふべからざる一つの現れのやうに思はれる。

淫蕩、柔媚の世界に隣して嚴肅と緊張とを失はぬといふこの國民性的ニュアンスは、日本人の長所ともいへるが、又短所ともいへるのであるまいか。或る感激があり、又適當な拘束が加はつた時、日本人は實によく情氣を拂つて緊張し得る國民であるが、この緊張が續かなくなるとくづをれて墮落するといふ傾きをも免れない。固より遊藝に於いても、徒らに緊張して固くなるといふことは、到れる境地としては排斥せられ、型に入つて型を出る、或は型を身につけて自在を得るといふ柔軟性が要求せられて居ることはいふまでもなく、緊張した心

持が一つの平常心となつたものは、藝としても人間としても國民としても間然することのないものであるが、この境地の至難であることも亦争はれない。

話が少し深入りし過ぎて而も一向盡せぬものになつたが、一篇の雜文としては問題がむづかしくなり過ぎた。ただ少しく附け加へるならば、私は文明人で日本人の常服ほどだらしないものはなく、併し又日本人位人前に入る時に緊張するものはないと思つて居る。三味線藝術の演者が袴をつけたり袴をはいたりするのも——これは或は幾分明治以後になつてからのことかとも思はれるが——、料理屋の女中が化粧したり服裝を調へたりするのも、否バスの車掌や牛肉屋の女中が悪どく化粧するのでさへ、色々な意圖の外にやはり人前に入る緊張といふものが認められる。これは西洋で下宿した日本人が、平氣で自分の小言や註文をいへず、それをいふ時には、喧嘩腰に緊張して下宿を出る決心と覺悟とでやるやうな氣質とも、共通點を有するのではないかと思ふ。私は支那の劇場で、汚い平服で鳥打や中折をかぶつてのそのと樂を奏する連中を見た時に、日本人の態度との非常な相違を氣づくと共に、その薄汚い、平氣な、又ぶらぶらしいやうな空氣の中に、日本人にとつて堪ふべからざる無神經を見ると共に、日本人の及ぶべからざるぶとい生活力の強さを見た。又日本人の緊張と潔癖と

の日本人の生活に様々な形で現はれ、それが日本人の生活の特質と強味とを形造つて居ることを認めると共に、この緊張と潔癖とが、時間的持續に於いても全體的滲透に於いても缺けて居ることを思はざるを得ない。日本人の活動と生活との舞臺が、我々の祖先が思ひ及ばなかつたほど廣大になつた今日に於いて、殊にこの事を痛感するのである。

(昭和十七年八月三十日)

世阿彌雜感

世阿彌が日本の藝術家中の最も傑出した一人であることは、彼が傑れた父觀阿彌と共に創成した能樂といふ藝術が、その後六百年に近い年月を経て、よしその間に著しい變化や固定があつたにしても、依然としてその生命を保ち、藝術を愛する人の觀賞に堪へて居るといふ一事からだけでも、疑ふことは出来ない。世阿彌が能樂の創成並びに大成者であることが、彼が年少にしてその姿の美しきが故に、義滿將軍の寵幸を得て、猿樂が下民間の演伎から將軍家へ、更に上は公卿、中は武將武士の間まで擴がつたといふ史實は、昔から知られて居たけれども、彼が我が民族の誇とすべき演伎者であり、舞臺監督であり、作者であり、能樂の理論家であつたことが普く知られるに至つたのは、やつと明治の末のことであり、而もその機縁が彼の著作十六部の發見及び發行にあつたことを想ふ時、我々は一種の感慨なきを得ない

のである。能樂があいふ保守的な、傳統を重んじ、家柄、流派を固守し、型に誦にかくま
で昔からの仕來りを重んじて居ながら、これほど傑出した能樂の祖おやともいふべき人の所説を
知らず、知つてもこれを探究しようとしなかつたのは、如何にも不思議のやうだが、よくよ
く考へて見れば必しもさうではない。現在の能樂が過去傳來のものを保存するに専らであつ
て、新生面を打開しようとする動ける藝術でなく、——勿論これは現在の能樂に藝術的生命
が存して居ないことを意味せず、又個々の演者に多少の新たな打開があることを否定しはし
ない——全體としては固定化の状態にあることが拒まれない事實を見れば、又本當の復
古が固定を打破して本來の精神に歸らんとするものであり、その意味に於いて常に熱烈なる
革新の要求に基づくものなることを思へば、能樂の根本に溯つて世阿彌の精神が尋ねられな
かつたのは寧ろ當然だといつてよからう。世阿彌自身も秘傳を口にし、又時々は秘傳の妙用
を語つて居るが、能藝が細くなり固くなると共に、その秘傳もだんだん技藝の末に流れ、
藝術の根本精神更に進んでは藝術の理論などは顧みられなかつたといふこともあらう。又か
つたものが家元以外に出て、學者の論議や研究の材料となる機會がなかつたといふことも
あり、又能樂の價値だとか本質だとかが藝術界や學界の關心の問題になつて來たのも、明治

以後西洋の文化、文藝、藝能がはひつて來て、他を知ると共に自を知るといふ要求が必然的
に起つて來た近頃のこと過ぎなかつたといふ事情にもよるであらう。

兎に角世阿彌が演伎者にして演出者を兼ねただけならば、今の能役者に皆無ではないと見
て珍しがりに足りないとしても、その演技、演出の理論を興へたのみならず、その脚本たる
能の作者であり、その能演出の理論のみでなく、作能術の理論まで提供したのは稀有のこと
であつたといつてよい。その理論といふものがよく演能の現實と體驗とに即して、簡明にし
て要領を得、空文虚辭がなくて常に肯綮に中つて居るのを見ると、我々は一層感服させられ
る。殊に私が面白く思ふのはその詞の自在な驅使である。鎌倉時代、室町時代には、漢文と
も和文とも文語とも口語ともつかぬやうな鶴的文章が行はれて居たから、世阿彌の文章も決
して雅醇なものではなく、その成語の如きも随分でたらめな、外に例のないやうなものが多
く見受けられる。これは一面世阿彌の學問の不足を示すものとも見られるが、又他面から見
れば、世阿彌の獨創的な不羈な自由な、自分の思想や感情を直接に表現する力量を持つて居
た證據とも考へられる。世阿彌の能理論は、その理論的であるに拘らず、一面に非常に直覺
的であり、そのでたらめな成語なるものが、却て世阿彌獨特の感覺や思想を自由に適切に表

現する道具となつて居るから面白い。つまりその理論が空理空論でなくて、演能の體驗に基づけるものであつたといふ長所のみならず、その體驗を理論化しなければ止まなかつたといふ所に、日本人として稀なる彼の勝れた點を認め得る。彼の理論の價値をその表現形式の直覺的なるが故に、看過する人々は、未だ彼を読み得たものとはいへぬであらう。彼の佛經や經書に對する造詣は別に深いものでなく、その引證なども精確とはいへないけれども、併し彼の藝境を説かんが爲の註脚として引いて居る所などを見ると、そこに一つもあやふやな點はない。心經の「色卽是空、空卽是色」を引いた「遊樂習道見風書」の左の一節の如きはその一例である。

一、心經云、「色卽是空、空卽是色」、諸道藝に於ても、色空二あり、苗秀實の三段終りて安き位に至りて、萬曲ことくく意中の景に滿風する所、色則是空にてやあるべき、然とも、無風の成就と定位する曲意の見、いまた空卽是色の残る所、若、未得爲證にてやあるべき、然らば智外の是非の用心、猶もて危みあるべし、此用心のあやふみもなく、何となす風曲も關かへりて、まさしく異相なる風よと見えなから、面白て是非善惡もなからん位や、若、空則是色にてあるべき……」

これは修行と稽古を積み、總ての曲を心得てさうして自在の空に入る境と、この自由自在の境を體して、爲す所として是非善惡を越え、至る所として佳ならざるなき境涯とを説けるものとして、決してこれを術學的なこけおどしと見ることは出来ない。

世阿彌達の申樂なるものは、彼等の時代に至るまでは民間の雜藝として卑しまれたものである。申樂が將軍に採り上げられて榮え出してからも、こんな雜藝の行はれるのは天下の亂れるしるしだとまでいつた公卿もある。併しかうした民間の藝であり、民衆に基礎を持つたといふことが、能樂の流行を來し、能樂を長い持續に堪へしめた主要な原動力であつたこと、そこに能樂の強みの存することは否定せられない。一たい室町時代が所謂「下剋上」の時代であり、文化的にも民衆的なものが武將階級から公卿階級にまで影響したといふことは、著しい時代的特徴であり、申樂が能樂として新たに擡頭したのも亦この現象の一つに外ならない。世阿彌達の能樂は民衆の大地に生えたものを、殿上に花咲かさうとしたものである。さうしてそれは將軍や公卿、更に進んでは禁裏の觀賞に與かると共に、又民衆の觀賞から離れたものでなかつたことは、世阿彌の言説の到る所に覗はれる。彼が藝能を以て「諸人の心を

やはらげて上下の感をなさんこと」を志すものとし、又「衆人愛敬」を以て「一座建立の壽福」となし、「時に應じ所によりて、おろかなる眼にもげにもと思ふやうに能をせんこと」を壽福として居るのは、藝能の萬人に訴ふべき普遍性を説くものとして、藝術の本質を衝くものであると共に、又當時の能樂の置かれた社會的位置の江戸時代や今日と異なることを示すものと見てよからう。

彼の演じた能樂が果してどんなものであつたか。これを建築などの如くに復原して考へることは不可能であるが、能樂の形が彼によつて創成せられたといふことを認めると共に、そこに型の固定しない、臨機應變的な要素が多く、自由自在な演者の個人的工夫に待つ所が少なくなかつたことは争はれない。今の能樂が現代的要求から離れ、固定的保守的になつたのをもの足りなく思ふ人が、假に彼の演伎を面前に見たとしたならば、存外今いふケレンが多く、絶えず見物の氣分を狙ふやりに對して反感を抱くかも知れない。現に彼は見物としての具眼者であり勢力者である貴人と共に、一般民衆の氣分、感情、氣合などに常に深甚の注意を拂ひ、それとの交渉に於ける舞臺的効果を顧念して居る。これは演劇なるものが觀衆を待たずしては成立しないといふ約束から、當然のことともいひ得るが、併しそれにしても

その考慮に臨機的な場あたりのもの多いことをも見のがすことが出來ず、かうした態度を無條件に肯定し難いことも亦勿論である。

彼が民衆の野に生えた木に花咲かす爲に、換言すれば民衆的な猥雑な藝を、趣味あり教養ある上流階級の觀賞に堪へ得るやうに高める爲、彼は何を爲したか。彼の言説によつて見れば、それは一方には「ものまね」の精練と他方には舞歌的要素の増加、向上にあつたらしい。恐らく雜藝としての從來の申樂には、あくどい若しくは粗雑な「ものまね」もあり、民衆的な卑俗な舞歌も多かつたであらう。それ等を上品一方ではなく包容的に採り容れると共に、それを醇化し優化していつた所に、能樂の成功はあるのであらう、我々は今さうした藝風に就いて、これを具體的に知る便宜は乏しいけれども、能樂の中に取り入れられた色々の民間的舞踊や歌謡（例へば延年とか放下とかの如き）又は謡曲の歌詞その他によつてこれを覗ふことが出來る。室町時代の文化は平安朝文化のルネッサンスだといはれる。少なくともさうした要素が多きを占めて居ることは否定せられない。このことは謡曲に於いても亦明かに認められるのであつて、世阿彌が「ものまね」と共に否それにも増して能樂の骨髓とした舞歌二體に於いて、彼の志した「幽玄」即ち華麗、優婉、更に進んでは「もののおはれ」に

も通ずる能樂演出の特徴が、やはりこの傾向を示したものと見るのは、決して僻論ではあるまい。室町時代には和歌は衰へたけれども、和歌に對する尊崇は却て増し、謡曲に於いても和歌を主題としたもの、和歌の徳を讃へたものは多く、三代集からの引歌は非常に多く、又漢詩の如きも同時代の五山文學からの引用は見られずして、平安朝代の『和漢朗詠集』がその殆ど全部を占めるが如き、『源氏物語』『伊勢物語』の尊崇の跡を止めることの多い如き、つまり能樂が室町時代の民衆劇に根ざして、その向上を平安文化の復興の方向に求めたといふことを語るものではあるまいか。

世阿彌の能の自由自在を説いて現代能樂の固定を慨く人は、現代に世阿彌のないことを嘆くばかりでなく、世阿彌の時代と現代との能樂の置かれた位置の相違を別抉して、具體的な方針を與へるのでなければ、その結果は竟に能樂を破滅させるに終るであらう。

(昭和十七年九月十七日)

『白桃』『曉紅』『寒雲』を一讀して

私が今の歌壇で一番興味を以て讀むのは齋藤君の歌である。君の歌ならば眼に觸れて一讀せぬことはないといつてよい。併しかうして一時に三冊もの歌集を讀んで見ると、齋藤君の歌を通じて歌そのものよりも一層齋藤君自身を強く強く感ずるのである。この三つの歌集は製作の順とは逆に世に出て居るが、昭和八年から十四年までの八年の長きに亘つて居るのだから、無論その間に歌風の變遷もあるであらうけれども、私にはさういふことに注意する氣も少なく、又それを感じることもしなかつた。ただ私は此等の歌によつて齋藤君の性格や感情や感覺や好惡の強い印象を得た。文學は總じてその作者の生活の表現であつて短歌も勿論その例に洩れるものではないが、齋藤君の歌ほど作者の性格と生活との露骨に強烈に率直に現はれて居るものは少なからう。これは齋藤君の人間の特異性と地方とその表現の適切と強

さによるものなることを否定し難い。生活派とか何とかいふ一派があるかどうか知らぬが、彼等の主張は、恐らく彼等の排撃するだらう齋藤君の歌に於いて、最も多く實現されて居るのではあるまいか。

私はこの歌集を通じて、五十二歳から五十八歳に至る齋藤君の生命の流れる音を、耳近に聴く感じがした。それは複雑多端ではないが強烈で新鮮である。生命の水は激しい波を起したり、沸き立つたり、流れたり、又静かに湛へたりして、その趣は色々であるが、そこに一貫した作者のいのちが明かに通つて居るのがたふとい。『白桃』の初めなどには、作者は漸く老境の静かさを期待して居たのに、忽ち悲痛な事件に逢つて、激怒、悲傷、哀痛の苦しみに悩んだ跡が明かに覗はれる。この堪へ難き悲痛の中に親しい友を見送り、師友の忌日を迎へ、生業の外に『柿本人麿』といふ大著述に激昂する感情を集め、特に「鴨山考」に對する異常な情熱の昂揚を示して居る。その間にも山に入り温泉に浴して、心を落ち着け、雲を眺め、蟲を聽いて自然に觀入したり、街路を歩き、デパートに入り、映畫を見るといつた生活が、實に如實に歌に表現されて居る。此等の歌集はかくして齋藤君の個人生活の表現であるばかりでなく、その間に於いて日本の遭遇したただならぬ局面を傳へるものとしても、恐ら

くは外の歌集や作者に見られぬ力強さを持つものであらう。齋藤君の如く直截な愛國的熱情、戦争に對する昂奮、敵國に對する憤怒を高く強く披瀝したものの少ない如く、新聞や映畫で接する色々の事件に對して烈しい活潑な反應を示した作者も、恐らくは多くないであらう。而も我々は齋藤君の日常生活の抑揚頓挫を通じて、ここにも齋藤君の一貫せる人柄を見ることが出来る。

これは齋藤君の詩人的性格と相通するものであらうが、齋藤君の裏には多分の原始的、本能的なものがある。この已むに已まれぬ何か齋藤君を寺田（寅彦）さんのいつたやうに悲劇的ならしめて居ると共に、又それが齋藤君の持つ天與のユーモアとなつても現はれて居る。齋藤君の作品の中に、男女の性欲に對する異常な關心がかなり露骨に現はれて居ることは、誰しも氣づくことだらうが、これは單に性欲的對象に限らず、齋藤君の歌全體のかなり重大な基調にもなつて居るやうに思はれる。齋藤君の食物に對する強い愛着、例へば味噌汁、鰻、なめこ汁、餅、納豆、桃、葡萄、蕨などに就いての歌を讀むと、我々は子規の『仰臥漫錄』に見える食欲と共通な、いはば此等のものが齋藤君の生活若しくは齋藤君其人と離し得られぬ具體性を認めざるを得ないのである。胡頹子、羊齒、梅殊に紅梅に對する愛着も繰返

して出て来て、その愛執に至つてはやはり食欲や性欲に似たものを感じることもある。虎耳草、ふきの薹、ばら、白柚、福壽草等に對する愛玩にも亦さうしたものがあつた。併しそこには又縦ほしまといつた一面と共につつましさがあり、天によつて與へられたものを有難がり、いつくしみ、をしんで居るやうな處が讀む者の心を引く。又一方に家だに、蚊、蟻、鼠などに對する憎しみ、それを殺す快感などにも、齋藤君らしい特異な感じがあり、汗に苦しんで眼鏡をはずしたり眼をつぶつたりする癖、獨りごとをいふ癖などを歌の中に見ると、私は齋藤君を思ひ浮べて思はず微笑するのである。

此等の三つの歌集では、作者自身が選り分けをすることがなかつたとあるが、私などにも多少は屑歌があるやうな氣がした。併しそれだけに又齋藤君を知るのには好都合であらう。自然觀入の歌の中には、調子が高く強くて而も靜かな歌を私は幾度か印づけた。作者の歌には子規の歌の影響は固より強く、集中にも子規的な歌に逢著することがあるが、併し子規との人間の相違は、食物に對する愛着の趣にも著しく看取される。山や雲や谷川やの自然の大觀を詠じたものに至つては、子規が未到の境地を作者が拓き得て居ることを明かに認めねばなるまい。

所謂寫生の議論に参加する氣はないが、さすがに淡々たる寫生の歌にいいものがある。

大股に歩ける人のうしろより吾歩みゐていや離れゆく（『白桃』三八〇）

といふ歌なども何ごともなく好きである。

一とせに一たび君を偲ぶにも思ひつむることなくなりけり（赤彦忌『寒雲』一九）

わがよはひ百穂晝伯のみまかりしよはひを過ぎておほく晝寢す（『寒雲』二七二）

なども、平淡率直で却てしみじみする。かうして、自分の好む歌を一々引いて何事かいつて居れば、私のいふことも相當に多くなるであらう。勿論私はかうした歌を以て齋藤君の特色を最も多く發揮した歌といふのではない。併しむやみに人の分らぬ洋語を入れたり、何か獨り合點の感想と表現とを撞まにした歌の中には感心しないのも相當ある。かういふのは齋藤君の崇拜者から見れば面白いかも知れず、我々にとつても一つの愛嬌と刺戟とはなるが、必しもいい歌だとは思はない。一方萬葉語に執着しつつ他方に思ひ切つて外國語や俗語を採用するのも、たしかに有意義な試みとは思ふけれども、中には齋藤君の一時の興會以外又は以上に、どれだけの客觀的意義を有するかの疑はしいものもある。

（昭和十七年九月二十日）

讀過印象

兩氏の著

この秋殆ど同時にフランス文學の大家、イギリス語の碩學なる兩著者から、辰野隆氏からは『ルナールを語る』を、市河三喜氏からは『昆虫、言葉、國民性』をもらった。折よくか
どうか珍しく下痢して勢がなかつた二日を利用して、これも珍しく早速拜見した。

市河君は書中の「南と北」の中に、英國考古學者セース氏が、日本人には南型と北型とがあつて、濱田耕作氏は前者、市河君自身は後者だといつたと書いて居るが、それが本當なら、辰野君も亦この書で見た限り、市河君に對して鮮かな對照の南型である。

少し柄にない比喻を用ゐれば、辰野君の本は、夏の夕方の浴後にビールをぐいといと快飲する如くに、一氣に快讀出来る。實際私は半日で讀了した。ルナールの日記の文句を引いての

辰野君の合の手も、實に氣が利いて居る。それに比べると市河君のは、鹽豆の如く一粒一粒と地味な味にひかれ、つい讀み過ぎて腹ならぬ眼を痛めるといふ風である。多年の學殖と忠實な觀察とにやにやした駄洒落とを交ぜた鹽加減は、中々及び難い。但し装幀は極めて野暮である。(昭和十四年十月)

土岐善麿氏新作『夢殿』について

謡曲の新作出てもよし、出なくてもよし。

新作ならば從來の能樂と別な面目を發揮するものでありたし。この作はさういふものと思はず。併し如何なる新作であつても、それが從來鍊りに鍊つて來た技巧とびつたり合致するには年月を要す。同じ面目の新作にして然り、別な新面目を有する新作ならば一層然らん。そこで結論は、新作は從來の能樂でない新しい能樂、もしくは新しい演藝を作ることになり、結論はむしろ後者にあらん。今の能樂に求める所が、文學的内容よりも、純化せる形式に盛られた舞踊的音樂的内容にありとすれば、強ひて新しき作品を求めず。

(昭和十四年十月十五日)

廣瀬哲士君譯ポール・ブルジェの『死』

『死』は読み始めた時は少しごちない感じがしたが、やがて引き入れられるやうに讀了した。この作の戲曲的な構成は作者の意匠による作りものであらうが、その中の人物の心理的な動きは、悉くが事實でなくても眞實たるを失はないと思ふ。カトリック教國に於ける多年の傳統が、自然の法則と事實とを冷厳に直視しようとする科學的態度を無理な努力に見せ、來世と罪と償ひとの信仰を、より自然なより樂なものと思せるといふことも、單に過去の迷信に執へられたとよりは、もう少し深い人間性を示してゐると思はれる。ル・ガリックの心境とかういふ魂に策勵せられる國民的感情とも、決してカトリック教國又はフランスだけのものではない。ただカトリック信仰と民族的又は國家的敵意との關係がどうなるかといふことは、事實としては餘り顧慮されて居ないに拘らず、やはり一個の重大問題である。

(昭和十四年十月二十四日)

『遠野物語』

この夏古本屋の目録で見つかつたので、今まで讀みたいと思つて讀まなかつた柳田國男さんの『遠野物語』(増補)を取寄せ、この頃暇々に讀んでゐますが、近頃こんな面白い本に接したことはない。遠野郷の山谷村里で、山男に打ちのめされたとか、山姥に食はれたとか、狼に脅かされたとか、狐に化されたとか、亡靈に逢つたとかさういふ聞書が、實に克明に談者の詞通りに傳へられてゐる。かういふ現實にあり得ないやうな話が、どうしてこんなに子供の時と同じやうに親しく嬉しく感ぜられるのか。ちよつとは不思議に思はれるが、恐らくそれは當然過ぎることかも知れない。柳田さんの談理の文章はまはりくどくて分りにくいがかうした聞書は、分り易いのは固より實に美しい好文章である。

吹田順助君譯の『ピスマルクの手紙』

近頃忙中に讀んだ書物の中では、この本は實に面白かつた。日本にも人間的な政治家はないのではあるまいが、その人間らしさをこんなに端的にしかも委曲に發揮し得た人は少ない。彼の純情、皮肉、諧謔の自然な露出を見ると、鐵血宰相も我々の近くに親しみ易い顔をしてやつて來る。

5

この頃の心持

時事に關することではなくてよいといふ話だから、暢氣に書かせてもらふ。こちらへ着任してから三月餘りはたつて、はや新しい年を迎へるやうになつた。

就任早々で多忙だといふこともあるが、久しぶりに都に上つた田舎者の物珍しさに、色々なものを慾張つて見たといふこと、斷り切れないで文章を書いたり講演をしたりしたといふこと、自分の歸京を喜んでくれる人々の多くの會合に出たことなども、一層私の時間を塞ぐといふ結果になつた。

その間幸に健康で、いつも睡眠を十分に取つたためか、あまり不愉快な日夜もなかつた。

京城帝國大學は創立以來關係して居たため、それに對して自分でも道德的責任を感じ、人からもさういふ責任を課せられてゐるやうな氣がしてゐた。しかし、この一二年は、自分も

ある程度までこの大學のために微力を捧げたし、自分達の時代も過ぎたし、これからは自分の考に一致するとは別として、自分より若い人の引き受けてやるべき時だ、といふ考がして来て、すでに一昨年暮に東京への別の話があつた時にも、この自己辯護の下に内諾を與へたのであつた。

しかし停年まで朝鮮に止まるのが本當でないかといふ氣持は、最後の離鮮の際まで私の心を重くしてゐた。さうして私の心持を解しないで、私の離鮮を不快に思ふ人も、多少はあつたらうといふことも考へた。

私は別に半島人の心を捉へ得たとも思はないが、ただ彼等に媚びないと共に彼等に隔てなく率直にものをいつた。さういふ内地人の寡いといふこともあつて、私の期待より以上に私を信頼してくれた者もあつたやうである。さういふ人々、中にも私の學生だつた若い人々に對しては、私の離鮮をすまなく思ふ氣は終まで絶えずしてゐた。

私は如何なる人間にも、それが年長であると年少であると、男であると女であると、身分が高いと低いとを問はず、相手を人格として取扱ふといふ心持は、この頃割に自然に持てるやうになつた。

如何なる人をも恐れず如何なる人をも卑しまないといふ私の平生の志は、中々十分に達し難いが、私が學校以外で接觸した内鮮男女老幼に對しても、多くの場合私も親しみを覚え、彼等も亦私に對して親愛を感じてくれたやうである。私は今も彼等のことを思ふ時に、朝鮮の空に何か暖いものを感じ、恐らく今後遇ふことも少なかるべき彼等の幸福を祈りたくなる。ただ、いつまでも私の厚意を寄せ得ないのは、虎の威を借る狐のやうな官僚、自分の卑陋と不學とに對する反省を缺くばかりに、しやちこばつて居られる學者教授の類である。

私はこの夏頃から、朝鮮に止まり得る三四年の月日の内に訪ふべき、見残しの山水を數へてもゐた。

白頭山や冠帽山は赴鮮早々に登攀する機會を逸したため、今の私には手ごはくなつたが、全南の華嚴寺の唐代の彫刻や智異山の景色、國境鴨綠江沿岸の江界あたりの風物、對岸の廣開王碑、平北の鍾乳窟等の外に、金剛山は一月ばかりゐて見残した山々を探り、慶州の南山の磨崖佛も、數日を費して一々御目にかからうなどと、空想もしてゐた。さうした願は恐らくもう満たされる時もあるまい。

内鮮一體はとくに實現せられたやうにいはれるが、これは今尙我々のめがける理想である。

これを成就するためには、内地人が兄たる理解と度量と優越とを有するものでなければだめだといふのが、私の年來の主張である。

公明正大の内鮮一體の成就が、その仕事の立派なだけに至難なといふことを、内地人の官民が忘れがちだといふことを、私は警告せずにはゐられなかつたのだか、それは朝鮮の當局者にも、半島の青年にも喜ばれなかつた。半島は既に去つた後にも、私のこの信念だけは變りがないといふことをいつておきたい。

私の氣質の中には一種の道德的潔癖があつて、偽善と氣取りとに堪へ得ざるものがある。一見温厚なやうに見られる私は、さういふ所から人から憚られも嫌がられもした。けれども正直にいふならば、この潔癖には勿論いやな「我」がくつついてゐて、「あばいて直と爲す」といふ氣負ひもあり、ドイツ語でいふシャーデンフロイデ（毀傷の歡び）もあつたことを否定し難い。

若い時には殊に憂鬱な心持が多く、人や世間の歡びに同感するよりも寧ろ反撥することが多く、人の長所や好所よりも短所や缺點が目について仕方がなかつた。

私はカントの道德説から最も多く影響を受けたが、カントが道德の純理性的性質を守つてその感覺的性質を排し去つた學説には、殊に同感を呼び起され、周囲の人々の行爲に對しても、その所謂道德的なるものの中に感覺的要素を見出しては、人々の同感に同じ得ないことが多かつた。

かういふ氣質が悉く克服されたとはいへないが、而も年と共に私の心もいくらか廣やかになり、人の美を喜ぶといふ心持も増し、人の缺點を小我的に氣にするといふ癖もいくらか和らいだ。こちらへ來てから、私の仕合せだと思つたのは、この變化であつた。

私はかうした心持の下に、若い生徒に接することを、おつくうにも不愉快にも思つてゐない。否、愉快にかはゆくさへ思つてゐる。

しかし私を好く生徒があれば、いやな反對の氣持を抱く生徒のあることも勿論である。私はその無理にどうしようとも思はない。相手を甘く思つてゐれば、存外生意氣な辛辣な批評などもしてゐるだらう。しかし私はさういふ生意氣にもさう拘泥しないやうな氣持である——これは少しあやしいかな。

青年は純真だといふ。しかし完全に純真な人間はあるものでない。青年だつて世の塵にも汚れにも染まぬといふわけには行かない。

彼等のやつてゐることを見れば、權勢家らしい亂暴もあれば、政治家らしい策略もあり、實業家らしい狡猾もあれば、文士らしい氣取りもあり、教育家らしい偽善もある。しかし理性的なる道德的行爲が現實の姿としては感性和分れてでなく、多くの場合これと共在してゐるが如く、かういふ亂暴、策略、狡猾、氣取り、偽善と共に、彼等の純眞も率直も若さも認められることを思へば、早急に彼等を否定し去る氣にはなれぬものがある。

實はかういふ私の心境は、近頃の所得といふよりも所與であつて、かつては彼等自身がさういふ純眞を標榜したり、世間がさういふ純眞を庇護したりする爲に、私はむしろより烈しく彼等のさうした行爲を憎んだのであつた。尤も用心深いへば、具體的な場合にぶつかる、今なほ存外一所懸命に唾み合ふかも知れないが。

私がこちらへ來てから、急に教育家扱ひをされ、受験雜誌に至るまでから、頻りに學生や青年に與へる言葉を求められるのは、如何にしても苦笑を禁ずることが出来ない。

私の轉任は、友人知己ばかりでなく、未知の人々からも歓迎されたが、世間の廣き、それを喜ばない人々の多いことも認めずにはゐられない。先日と同僚に語つたことであるが、私はこの上出世したいといふ野心もない。さればとて、ここを最後の職場として、身を辱しめ

てまで一日も長く嚙りつきたいとは思はない。

地方官の或る者がするやうに、人眼に立つ仕事を無理に残さうとも思はないが、ノホホンで不得要領的に自己の安全のための要領を把握することも亦、私の柄にはない。今日のやうな時勢にあつては、眞面目に考へればどんな職にあつても安易な職はない。それを思へば自分の心は憂鬱になる。

しかし將來の知識階級たるべき一高生に、どうかして正しきを踏んでためらはざる勇氣を養ひ、世に道理の存する事の固い確信を持つてもらふことが、將來の日本に寄せる最も確かな貢獻であることを信じ、大げさにいへば、切り結ぶ太刀の下も一足行けば後は極樂だ、といふ心境をめざして、安らかな、ほがらかな氣持で微力を盡して見たい。

母のこと

母もこの三月一日にとうとうなくなつた。なくなる十日位前、まだ氣の確かだつた時、「今度はもういよいよおしまひぢや」といつたのを、私も兄も「おかあさんのおしまひも度のことぢやけれ、まだ中々ぢやらう」と冗談半分^にいつたのである。實際この五六年間重態のことが三四度もあつたが、しんに強いところのあるせゐか、不思議にそれを凌いで來た。併し逢ふたびに「もうええ加減で行かんといかん」と口癖のやうにいつては居た。一昨年子孫が集まつて八十八の祝をした。昨年十月頃に澁谷區で、紀元二千六百年の祝も兼ねてか、敬老の催しのあつた時には、母は死んでも行くといつて、知合の運轉手に頼んで二人の嫁が附添つて列席した。その時米壽の祝に作つた紅い袖無しを着て行つたので、非常に眼立つた

さうである。母の性格としてはさういふものを着るといふことも、そんな催しに出るといふことも、寧ろそぐはないことであるが、年を取つては子供になつたといふせゐもあつたらう。併し八十九になつたのだから、せめて九十の坂を越せたいといふ私達の願はかなつたものの、何といつてもこの高齢ではいづどういふことがあるか分らぬとは覺悟すると共に、又存外いつもの粘り強さを見せるかも知れぬと思つて居たのだが、今度こそは實に脆く朽木の倒れるやうにいつてしまつた。それでも死ぬる三日前には、まだ意識もはつきりして、見舞にいつた私に目禮をしたりした。去年の九月末私が朝鮮から歸つて來たことを、母は別に色に出しはしなかつたが、心中では喜んで居たのであらう。私は母の最後には逢へなかつたけれども、かうして東京に居て、最後に近い日に意識の残つた母に逢ひ得たことを有難く思つてゐる。葬儀に間に合はぬものもありはしたが、この機會に四人の兄弟と三人の姉妹とを合せて七人の生き残つた同胞が、母が最後の息を引きとつた兄の家に集まることが出来た。男一人は郷國の伊豫から、又他の一人は遙かに任地の蒙古から、女の一人は但馬から、他の一人は京城からやつて來た。この三四年來母の側に居て、母と起臥を共にしつゝ最後まで看病の勞をとつてくれたのは、母とは成さぬ中の姉であつた。姉はもう六十六になり、髪は眞白で、

九十にして尙半白の母に比べると、頭だけは一層年とつて見えた。今後はかうして總ての兄弟姉妹が集まる折もあるまいと、母の遺骨を前にして一緒に記念寫眞をとりもした。

母の九十年の生涯には随分苦勞も多かつた。母の娘時代には、舊藩で五百石近い知行をもらつて居たお馬廻りとかの家を生れて、御嬢さんらしく育つたものであらう。母の里の家は二番町にあつたが、私の物心のついた頃には地方裁判所長の住家になつて居り、つい近年までは私と同窓の高等學校長が住んで居た。この家の内部のことは知らないが、相當に廣い侍屋敷らしい構であつた。母の娘時代のことは、あまり自己を語らぬ性質のせゐもあり、殆ど聞いたことはないけれども、ただ娘時代に隣國の讃岐へ金毘羅參りをしたといふことだけは聞いて居た。父の話によると、當時母は若黨仲間なんかを従へて行つたものださうである。私の家に嫁して以來殆ど外出もしなかつた位の母にとつて、恐らくこの旅行は想ひ出の深いものだつたらうが、母はそれについても別に語る所はなかつた。

私の父は他國から來て私の祖父に養はれ、家附の娘なる連合を失つてから母を迎へたのである。私は母を初婚とばかり思つて居たが、ずつと後伯父即ち母の兄の話によつて、母が家に來る前既に東條某といふ伯父の友人に嫁したといふことを知つた。この東條といふのが豪

傑風な男で、別に母が氣に入らぬといふわけでもなかつたらしいが、家庭を持つのがうるさくなつたかして、伯父の所へ母を返すから受取つてくれといつて來たのださうである。私の家に嫁した後、或る日伯父達と芝居に行つて居た所に、その東條氏も來合せて居て、一向おかまひなく伯父の傍へ來て大聲で話すので、母は恥しがつて父の陰に身を隠したといふ話も、その時伯父の笑ひ話に話したことであつた。金毘羅參りの話を聞くと、私には母の處女時代が想像せられ、その話を聞くと母の若い妻だつた姿が眼前に浮んで來る。母は眉目の整つた人であつたから、若い時には相當に美しかつたのではないかと思ふ。八十八の祝の時に子や孫や親類知己數十人集まつて寫眞を取つた時にも、母の姿がその中一番端正であつた。何れにしても紅粉をつけた、ほのぼのとした若い頃の母の姿は、この二つの話の外には考へられない。私の知つた頃の母は、もうなりふりに構つて居られなかつた。

母が家へ來た頃は、母の家も傾きかかつて居たのであらうが、併し恐らく母はあまり世間の波風にその心身を傷けられて居なかつたであらう。家は醫者であつて家風も全然違ひ、父は癩癬の強いわがままな性格であつたし、當時は中々よくはやつて家計には困らなかつたものの、繼子は三人もあり、その中の長男は祖父の愛孫であつて、祖父と父との感情の阻隔か

ら、父との間がうまく行かず、次男は美しい才の走つた子であつて、父の溺愛を受けたが、長じては二人共父に背くことになり、業を成すどころでなく常に父の患となつた。この間に立つての母の位置は随分苦しいものであつたらうが、母はこの父子の間に立つて兩方の間をうまく操縦してゆくといふ手腕もなく、唯烈しい父の下に、今まで苦勞を知らなかつた胸を痛めたのみであつたらう。けれども又母は繼しい子を憎むといふこともなく、出来ることで勞を惜しむといふこともなかつたらしい。この長兄、次兄と父との間柄は、私の少年時代に幾多の悲劇を生み、家の中を暗くしたけれども、併し母は繼子達に物足りぬと思はれても、憎い繼母とは思はれなかつた。これは母の無技巧な性格の徳といつていいのであらう。前の母の残した姉の如きも、父の烈しい狭い感情の下にこそ随分苦しめられたけれども、母に對しては随分不平を無遠慮にこぼし、母を與し易しとしながら母とは親しく、遂に母の最後をみとるまでになつた。この姉は親切はあるが口が多くて、實行のあまり伴はぬ方であつた。病中も母に逢ふたびに、母はよく姉の悪口をいつた。併し病體の母は最後にはやはり一番この姉をたよりにして居り、姉も亦不平はこぼしながらよく母に盡してくれた。

母は決して賢母ではなかつた。夫に逆らはず、夫の與へてくれた運命に安住したといふ點

からは、良妻であつたともいへるが、これには一つも進んで夫を助けるとか、一家の窮地を開くかといふ積極的意味はなかつた。併し父は珍しく私の強い、感情の烈しい、その癖小心な男でもあつて、その鬱憤の洩らし所は家庭の外になかつた。父の我儘に反抗せず、その鬱憤を慰めもしないが、甘んじてその發露に任したといふ點からいへば、母は父の爲には勿體ない位の伴侶だつたともいへる。父はいつも母を無知無能呼ばりして、叱り飛ばしてばかり居り、手をかけることさへあつたが、併し心の靜かな夕方など、「お前のおかあさんのやうな素直な辛抱強い人はないぞい。お父さんは早く死ぬるが、お前等はおかあさんには孝行をして上げんといかん」といふやうなことを、しみじみ話すこともあつた。こんな手荒な事を父がする時、私達は實に心身が一時にこはばるやうな思ひをしたが、母は泣きくづをれることもなく靜かにそれを受けて居た。私と母とは三十餘り年が違ふから、私のさういふことを感じ出した時には、母も三十五六を越えて、さういふ試煉には慣れて居たといふせもあるが、併し母は性來感傷の少ない人であつた。人妻としての随分苦しい立場に置かれながら、その境遇に痛めつけられぬと共に、それに反撥しようともせず、おのづから運命に隨順するといふ天分を恵まれて居たのであらう。この非感傷的といふ性格と並んで、母には批

評的な所があつた。あゝして父には絶対服従をしながら、父の缺點や矛盾を冷かに指摘するやうな餘裕があつた。後年私達兄弟の處に居るやうになつてからも、私達の友人や訪客の顔附や態度や動作などをかいまみては、ちよつと短い批評をする。それが中々辛辣なこともあり、ユーモラスなこともあつた。ユーモラスといへば母の母なる祖母は、母よりも更に昔風の嗜みのあり、上品で美しいばあさんであつたが、又母よりも一層ユーモラスな味が多く、今もその時々詞や顔つきが私の印象に鮮かに残つて居る。これはユーモアともいへぬが、人が尋ねて歸る時に、その人の背後へ、ひよつとこ面をあげて、私達を笑はしたことも多かつた。母は祖母のやうな滑稽味はなかつたが、その詞の端々に時々巧まぬユーモアを見せた。母は恐らく人に甘えたことはあるまい。感情を誇張したり、親切を見せびらかしたり、およそ芝居氣といふもののない、又芝居の一つも出来ぬ人であつた。従つて人のさうした舉動のわざとらしさやぎごちなさに對しては、中々敏感な所があり、これが期せずして辛辣な批評にもなつたらしい。

私にしても母に愛撫されたといふ記憶はない。併し母が私達の爲に勞を惜しんだといふこともない。父は私等を前にして、如何に自分が私達を愛し、私達の爲に心を苦しめて居るかを

語り、その代に私達が如何に父に孝行をせねばならぬかを説きもしたが、母はさういふことは一つもしなかつた。父は晩年醫業を止めて家の中にもつて居たせゐもあり、老耄するまで家のことはみんな自分で指圖して居た。従つて母の私達の爲にしてくれることも、大抵は父の命令を通じてであつた。この點に於いて父は又細かく氣のつく所もあつた。さういふことの中で私の忘れぬのは、私が十位の時だつたか、熱を疾んで夜半に汗を出した時、母が熱い手拭で身體をふいてくれたことであつた。私はまだ行燈をともし居たその部屋の明暗や、夏の夜らしかつたその氣温、ねばついた身體から汗のふきとられる快い感觸を、今もありありと記憶し、それが母への親しい、感覺的でさへある愛情となつて思ひ返されるのである。それから今一つは、私と私に二つ上の兄とが、私の十三四の頃、伊豫の高山石槌山に登つたことがあつた。それは中學一年の夏休であつて、朝三時出發といふことになつて居た。今から考へればさういふ靈峰への出發にはふさはしくなく、父は私達の朝食に小鯛の白味噌汁を母に命じて作らせた。その味が今に忘れられず、それを想ひ出す度に、朝早くから起きてそれを作つてくれた母を想ひ出すのである。味といへば今頃は豌豆の新しく出る季節だが、郷里の石手川では又鮎の釣れる季節でもある。この鮎釣に出かける時に母の作つてくれた豌豆

飯のお握りも、私の少年時代の想ひ出と結びついた味覺であると共に、この味覺が又私にとつては母と離し得られぬ記憶になつて居る。(昭和十六年五月二十三日)

二

最初からよく考へて書かなかつたので、色々出て来る想ひ出をどう處理していいか困る。母のことを思へば同時に父のことも思はれる。父はあまり我がままで自己本位だつたので、私はその説教にも拘らず、否その説教の故に、益々反感を持つこと久しかつたが、なくなつてから三十年に近い今となつては、そんな反感も消えてしまつて、さうした性格のまま父のいい所も認められるし、以前に自分の父に似た所を神経質にいやがつたのも、この頃は、自分の持ついくらかの積極的な長所を、やはり父に負つて居るといふことをも、考へるやうになつて來た。人物に大きさとか豊かさとかは一つもなかつたけれども、やはり一つの特徴ある人間だつたといふことを感ずる。私はかうした心持の下に、今母の想ひ出を書きつつ、父の想ひ出をも書きたいといふ要求を頻りに感ずるが、併し先づ成るべく母を中心として書いて見ることにしよう。

私達の生れ且育つた家は、大街道といつて市中では賑かな通りにあつた。私の少年の頃には、道幅と不似合に廣い一間半ばかりの泥溝が前を流れ、近所に士族屋敷も二三軒はあり、しもたや風の家は六七戸もあつたが、併し多くは商家であつた。家は西法寺といふ眞宗寺の隣にあり、櫺子の長い間口の廣い家であつた。橋を渡つて玄關前の庭に入ると、そこには嘗つて祖父や父の乗つて病家へ往診した駕籠が、天井に吊してあり、上り口には自然木の額に、長三洲の書いた「二名堂」といふ字が白く刻してあつた。その玄關を上つた四疊が患者の控室で、その奥の八疊が診察室であつた。夜中人が尋ねて來ると、手燭をとぼして玄關脇のさる戸(?)をあけて、闇の中の相手の顔を照した様子なども、遠い想ひ出の中の一つの畫面である。母はかうした賑かな周圍の中にあつて、夜風呂に出かける外には、殆ど外出することもなかつた。ただ暇のある時には簾を釣つた櫺子から、人に見られる事なく、外を通る知らぬ人々、物賣り、近郷から出て來た男女の姿などを眺めるのが、殆ど唯一つの世間との接觸といつてよかつた。父は五十四五歳の頃何を感じてか、ふつつり診察をやめてしまつた。それ以來一家は坐食の姿となり、女中も置かなくなつた。かうして一家がだんだん乏しくなつて行くのを見るのは心細かつたが、それよりも私達を氣づまりにしたのは、父がいつも家

に居てむづかしい顔をして居たり、小言をいつたり、何かと煩はしく用をいひつけたりすることであつた。家に歸つて来て、居間に居る父の灰吹に烟管をたたきつける音を聞くと、私達は何か陰氣になつて来た。それでも父は折々知人を尋ねたり、よべれたりした。さういふ晩は私達の祭日であつて、大きな聲を出して狂言の眞似などをしたものである。

かうしてだんだん家政は行きづまつていつても、世間が暢氣だつたせゐもあらうが、中々餘裕があつた。父は珍しい躑躅の太木を賣りに来たのを、いつ使ふとも分らぬ茶室の床柱の爲に買つたり、時々茶會をして人をよんだりした。さういふ時の割に凝つた料理は、父の指圖によつて母が調へたものであり、母は天性さう器用でないに拘らず、父の教育によつて料理は上手であつた。父の美食家だつた爲に、私の少年時代も割に旨いものを食ふ機會が多かつた。たまによそへ行つて御馳走になつても、二三の家を除いては自分の家の御馳走に及ばないといふ事を、子供心に感じて居た。その頃には笠をかぶつた浪人のやうな姿で、鰻を街頭に賣り歩く人があつた。恐らくその中には本當に落ちぶれた士族のなりはひもあつたであらう。かういふ鰻を買つては、小判型の盥に飼つて置き、時々それを出して料理する。その時母は裏の畑から牛蒡の葉を取つて来て、俎上の鰻をその葉で抑へる。その時鰻の額に錐を

刺すのが我々の役目である。さうして腹を裂いて肝を出すと、父はいつもそれを生の儘で呑んで居た。鰻は脂つこくて私は喰べなかつた。ただ骨のつけ焼だけをかうばしいと思つて喰べた。尤も大きな黒い平椀にその蒲焼を入れて、その上に山椒の芽をあしらつたのを見ると、ちよつと味覺を刺戟されはした。

肴屋が來ても、八百屋を呼んでも、總て如何なる買物でも、父が出ていつてそれを選択する。母は側で見て居るばかりである。客が來ても、母は取次をしたり茶を出したりするばかりである。相手が挨拶をしても、言葉少なにむづかに受答へをするに止まる。金がなくなる、少しの金ならば、最も主な病家であつて父と親しい醬油屋へ借りに行くし、纏まつた金ならば株券を持つて銀行へ借りにやられた。さういふ心配にも母は與かる所はなかつた。私にとつて一番つらい使は、この金借りといふことであつた。當時の私にとつて金を借りにゆくといふことは、實に屈辱そのものだつたからである。併し今から考へて見ると、父は結局借金は残さなかつたし、又質屋へ物を持たせるといふこともしなかつた。さういふ點は地道で几帳面な人であつた。私自身もその性格を受け繼いだか、たつた一度の外は質屋へいつたことはない。それは親戚のものが母の一張羅を窮迫の餘りに質に置いた爲であつた。それは

羽織と揃ひの赤味がかった細かい縞の着物であつて、ものは唐襖といふのかとも思ふ。若しこの事が父に知れたならば、それこそ大變だと母も心を苦しめたいらしい。それを受け出しに行く爲、私は質屋の門を後にも先にもたつた一度くぐつたのであつた。

父は美食家であると共に酒落でもあつた。醫者といふ派手な商賣のせゐもあつたか、さういふことの分らぬ私にも、父のお洒落は感ぜられた。それに比べて母の外出着といつては、私の記憶では今いつた唐襖(?)ばかりであつた。恐らく母が里から持つて來たいくらかの着物や持物は、里の窮迫の爲に父に内證で處分されたのであらう。父はやかましいやうで存外さういふ點に迂濶な所もあつたらしい。私のものごころついてからの母の身に纏つたものは、着物は固より帯までも手織であつた。蒲團も今まであつたのが破れて後は、皆手織りであつた。秋の夕など母がぶーんぶーんと糸を紡いで居た姿、又裏の離家の黒い機臺でカタンカタンと機を織つて居た姿を想ひ出す。その蒲團の切の一片が、今私の家にやはり残つて居る。今はかうした手織の珍重せられる世の中になつた。

醫をやめてからは、父は晝の中は四書殊に孟子を耽讀することが多かつた。それから父と同郷の頼山陽を崇拜して、「山陽遺稿」をよく讀んで居た。さうした「四書」、「十八史略」、

「文章軌範」の類を子供に教へたり、女の子には「古今集」を讀ませたりしたが、母はさういふことにも一切興からなかつた。母が嫁入の時に持つて來たらしい節用集のやうなものには、百人一首が一々詠者の姿の上に出て居たり、鬘斗や水引の結びかたなどの晝もある、手すれにひどく破れた厚い本があつたが、母はもう恐らく長い間ものを書くことも讀むこともしなかつたであらう。

長兄と次兄とはたまに彗星の如く歸つて來たかと思ふと、又何かを持ち出して姿を隠すといふ風であつた。私が中學を卒へて出京するまでの間には、母は四人の男の子と三人の女の子とを育てつつ、家庭の暴君である父に仕へたのだから、随分大變であつたらう。母は朝起きると竈の下をたきつけ、三度の食事を主として用意するばかりか、間では薪を割つたり、畑に鋤を入れたり、子供の着物は固よりシャツ、ズボン下まで拵へたり、夜は又夜で父の肩をもんだり、一家の勞働を殆ど一身に引き受けて厭ふことはなかつた。冬の夜などまだ乳呑兒だつた末の妹などをねかしつつ、自分は背中を殆ど露出しながら、平氣ですやすやと眠つて居ることもあつた。私は子供心にも母の健康を感嘆したのであつた。

父は書物の外に手習をよくした。人から頼まれて墓表をかいいたりする時には、凝性のせゐ

で一月位は毎日稽古をした。私達も随分手習はやらされた。父の書は形は整つて居ても獨創性も面白味もないのであつた。けれども今私が多少の趣味を書に持つて居るのは、やはり父のお蔭だといはねばなるまい。父は暇だつたせぬもあらうが、澁紙をはつたり張抜きをしたり、漆塗りをやつたり表装をしたり、子供の爲に鯉幟を作つたり、たまには又大きな紙鳶を作つたりなどもしたが、その時に技工の役を務めるのは私の直ぐ上の兄であり、手傳を命ぜられるのは母であつて、私はそれに與からなかつた。澁紙の糊の爲に釜で蕨粉を煮て居る母の姿をも、私は想ひ出すことが出来る。その副産物に蕨餅のおやつが出来たことも忘れない。私が父の命令でなし得るのは、せいぜい百姓か土工かの仕事であつた。それは柱を立てる爲の穴を掘つたり、土を掘つてごみためのごみを運んだり、糞便をかけたりする位のことである。併し運動神経の鈍い私が、今の健康體を維持し得たのも、父の命じたかうした労働のせぬだつたらうと思ふ。その外に夜になつて父の爲に新聞雜誌を讀むのは、主として私の仕事であつた。私はかうして中學の初頃から、博文館の「太陽」などを殆どあらゆる部面に互つて讀んだ。それが私の爲によかつたわるかたかは分らない。

父は上の二兄に失敗した償ひを、私と私の直ぐ上の兄によつて満たさうとした。さうし

て私達を陸軍の士官にし大將にしたい、と思つて居た。父は家に藏する備前長船か何かの銘刀を、私達が將軍になつて腰に佩く姿を、その希望的空想の中に描いて居た。兄も私も遂に父の希望には反いたけれども、私が高等學校へはひつて文科をやらうとした時、父は「それぢや教員かい」といつて、存外あつさりと私の志望を容認した。母に至つては私達に向つて何になつてくれといつたこともなかつた。母は殆ど意志を持たないで、與へられた運命を甘受するやうに生みつけられた人かと思える。併し自分の我意で絶えず私達に註文して居た父の外に、この何の註文も私達につけないで、ただ働いてくれた母の居たといふことは、私達にとつてどれ程くつろぎだつたか知れない。私は自分にとつての大事を父に相談したことはない。父は命令するのみで相談に應ずる人ではないからである。母にも相談したことはない。母は相談しても別に意見のない人だつたからである。併しなまじい意見のある世間の賢母よりは、意見のない母の方が私に幸したかも知れない。

母の里の伯父は、近郷の戸長を務めた後、廣島へいつて居たが、それからは次第に落魄して來た。伯母はしつかり者ではあつたが、母はその爲に迷惑したこともあつたかと思へる。母の直ぐ上の兄も落魄はしたが、極めてつつましい穩かな性質の爲に、どうにか細い煙は立

てて居た。母の里方及びその親戚一統は皆、新しい時勢に順應し得ずして亡びゆく仲間ばかりであつたらしい。母はその間に立つてどんな苦しみと悲しみを経験したか、私にはよく分らないが、母の性格には強い意欲や執着の生む悲劇的な所はなかつたらしい。随分ひどい境遇に居ながら、その境遇に鍛へられて成長する事もなければ、その爲に傷けられて賤しく汚くなるといふこともなかつた。母には又女の人には珍しく神佛を頼むといふことがなかつた。私達が家を成しての後は、芝居が見たいとか能が見たいとか、時々註文をした事があつたが、困苦の中にあつた時、私達を勵まして立身出世を求めることもなければ、自分の事をどうしてくれといふでもなかつた。母は或は神佛に頼むべき何物をも持つて居なかつたのかも知れない。或は期せずして初めから神佛の意志に従順であり、この上救はれる必要がなかつたのかも知れない。教へられずして世の中の事を疾くに諦めて居たのかも知れない。別に積極的内容があるといふ譯ではないが、かうして平氣で勉強する事もなく自然の與へた姿に生きたのも、世間には珍しい事かも知れない。(昭和十六年六月二十一日夜)

岩元先生のこと

岩元先生の長逝を聞いて、我が一高の爲に寂寥を感じないものはあるまい。先生は特異な性格の人であると共に、その性格を曲げず、損はず、ごまかさず、率直に發揮された點に於いて、實に當代稀なる存在であつた。或る點からいへば、随分我儘でもあり、亂暴でもあり、決して圓滿な君子人ではなかつたが、その性格の強さと非妥協性と、中にもそれが天眞の已むなき發揮にして、外に求める所のないといふことによつてであらう、先生は普通の教師だつたら終生の怨みを受けるやうな苛辣な點をつけたり、面を向けられぬやうな痛罵を加へても、先生自身が平然たるのみならず、相手もやがてはその痛手を忘れて、先生の風格にほほゑむといふ場合が多かつたやうに思はれる。尤も萬人が萬人さうはいかず、中には今なほ先生を憎んで居る少數者をも、私は知つて居る。

私自身のことをいへば、明治三十五年九月に一高に入學し、その翌年の二學年を二年間、先生からドイツ語の講義を受けた。教科書はフォスの『ゲーテとシラー』、レッシングの『ラオコーン』、ショーペンハウエル譯の『グラーチアンの『ハンドオラーケル』だつたと記憶する。『ラオコーン』では引用のギリシア文を嬉しうに讀まれ、又その獨譯を愉快さうに黒板一ぱいに書かれた。先生は近代ではゲーテ、シラー、レッシング、それにギリシアの古典を讀むことを偏に勧められた。私が當時レクラムで『イリアス』や『オデュッセー』、ゲーテ、シラー、殊にシラーを讀んだのは、固より好い加減なものではあつたが、先生の勸奨によつたのであつた。

併し私は先生の愛弟子ではなかつた。先生の愛弟子たるには二つの資格がいる。頭腦が明敏で勉強家であることと、眉目が秀麗で年少であることとの二つである。私はこの二つの資格を共に缺いて居た。先生の美少年趣味を先生は決して隠さうとはされなかつた。プラトンを讀んでクナーベンリーベの箇所に出くはすと、思はず微笑するとも語られた事があつた。私の最初の二年のクラスには餘り美少年は居なかつたが、たつた一人見定二郎といふ紅顔の少年が居た。頭腦も先づ好い方であつた。この見定君は擊劍をも嗜んで居り、二年の末に寒

稽古中チフスを病み天死した。級中のもも皆哀悼したが、先生の痛惜は殊に甚しく、見定の爲に寒稽古を呪ふ詞を時々發せられた。先生の御郷里の風でもあらうが、これも先生の性格に於けるほほゑましい一風景である。さういふ生徒に對する甘さに對照して、眉目の秀麗でない又氣の利かない生徒の質問などに對して、先生の峻烈さとそつけなさは、ちよつと常人の測り得ぬものがあつた。その生徒が悪氣のない好人物である場合など、特に氣の毒に感ぜられた。だがさういふことも、今となつては先生の一つの愛嬌になるから、不思議である。現に同級會などでその被害者とそのことを語つては笑ふことさへある。先生の「我」には「私」が少ないからであらう。

それでも私は先生のお宿へ四五度は伺つたことがある。その當時先生は四谷本村町邊の酒屋の二階に居られたが、幸に階上から歸れどなられる憂目には會はなかつた。その頃先生は毎晩黒パンに牛肉のスキ焼を常食として居られたらしい。(かういふことは、動もすれば誤まつた傳説となるから、よく知つて居る人は訂正してもらひたい)。それから必ず紅茶を出された。菓子はいつちも風月の最中であつた。鐵瓶に一ぱいたぎる熱湯を、紅茶の土瓶に溢れる位につぐのが、先生の癖のやうに見られた。紅茶は四五杯位ガブガブ飲まれたやうに思

ふが、これも記憶の違ひかも知れない。兎も角も先生はこの酒屋の二階で、いはば自炊して居られたのである。飯は時々肉屋などで食ふといつて居られた。又晩年の如く酒を飲まれることなく、たまに葡萄酒の上等を御馳走になると實に旨い、などと語つて居られた。

先生はその頃、高等學校は一般的教養を作る所だ、それにはドイツの古典を読むに限るといつて、レクラムのカタログに印をつけて、読むべき書を指示して下さつたこともあつた。

併し私は、先生に愛好せられるやうな面を設けて先生に對することは出来なかつたし、又先生から認められる程の學才もなかつたし、又必しも先生の望まれるやうにならなくてもいいといふ生意氣もあつたし、だんだん先生から遠ざかつて來た。ただ私の友人には、先生に愛せられた俊才が割に多かつたから、先生の消息は常に耳にして、先生の御健康を喜んで居たし、先生に對する尊敬はいつも變らなかつた。

大正十年から三年ばかりの間に一高に出、その頃時々先生にお目にかかつたが、今度はかからず又こちらに來ることになつた時、先生は御病臥中と聞いて、まだ御伺ひもせず居る内に、九月も末頃の一日、眞白な夏服を着た先生が態々校長室に來られて、鄭重な挨拶をされたのには恐縮した。先生にはかうした義理固い禮儀正しい一面もあつた。併しそれから二三

日して、先生は又病床に就かれ、約十箇月の病氣を、稀に見る氣力と心臓とによつて凌がれた末、竟に起たれなくなつた。世の中がせちがらくなり、學校の先生の中にも、先生のやうな生一本な風格の人を見ることは、益々むづかしくなるであらう。それが悲しむべきか已むを得ぬかは別としても、それは寂しいことには相違ない。その學問と行藏とが、その生活とびつたり一つになつて、そこに偽りも氣取りもはひる餘地のなかつた先生は、確かにユニークの存在であつた。(昭和十六年九月二十二日朝)

思ひ出す師と友と

一番古いことをいへば、幼稚園の時の保姆が一人記憶に残つて居る。その頃は氣の弱い、そのくせ癩癩持の兒童であつた。幼稚園へ行く途中に、べんがら色の囚衣を着た懲役人の群にあふと——その頃はよくこの連中が外へ出て勞役をやらされて居た——、こはがつて家へ逃げこんだものである。幼稚園の庭で、外の子供と一緒に土砂を集め、それに唾を吐きこみ、「石になれ金になれ」とうたひつつ、手でたたくと、ぶつぶつと唾で固まつた土が出来る。それを見てほんたうに石になるやうな氣がしたことも覚えて居るし、豆細工のあつた翌日は日曜だつたといふ記憶もあるが、その頃の保姆の中で記憶に残つて居るのは、喜多見先生だけである。それは先生が幼心にもいかにもきつとしつかりした先生のやうに見え、その丈の

高い、眞直ぐな姿勢に、何か人を壓するやうな處があつたからであらう。仲間の一人が、喜多見先生は本當は男なのだといつたのを、ほんたうかと思つた位である。喜多見先生には、顔のまろい、白い着物に紫の兵兒帶を結んだ姿の今尙目に残つて居る、小さな坊ちゃんがあつて、この子が又中々腕白であり、喜多見先生のそれに對する態度は中々嚴格であつた。私は喜多見先生と外に何の交渉があつたわけでもない、而もその頃の友達の中でも、たつた二人のみがぼんやり俤に残るばかりであるのに、先生の姿だけが随分はつきり残つて居るのは、不思議である、ところがそれから三十年ばかりたつて、私の義兄が女子高等師範學校の喜多見先生の世話で結婚した。さうしてその披露の席上でその喜多見先生にあつた。併し女高師の喜多見先生が郷里の幼稚園の喜多見先生だつたといふことは、後から初めて知つた。さう知つて新たに印象された喜多見先生の顔を、昔の記憶に残る面影に比べて見ると、明かに相通する特色がある。私は喜多見先生に逢つてその事を話したかつたが、その機會を得ぬ中に先生はなくなられてしまつた。これは今に残念に思つて居る。思ふに當時喜多見先生は若くして寡婦となられ、残された一人子をつれて、遙々四國の松山まで來られたものであらうか。紫の兵兒帶をしめた坊ちゃんはその後どうなられたか。この事は一度ちよつと書いた

こともあるのだが、又書きたくなつて書いた次第である。

二

尋常小學の四年間は、寒川鼠骨氏の兄さんに當る寒川朝義先生に教はつた。高等小學の二年は吉田力先生に教はつた。この兩先生は何れも年七十を過ぎて健全であり、この兩先生の孰れかに教はつたものが、東京に八九人居るので、その連中が二三年前に兩先生を招待して竹馬會を二三度やつたことがあつた。弟子の連中ももう六十近くになり、頭の白さや禿げぐあひは、却て兩先生にまさるものもあつた。寒川先生は字が旨くて、小兵のくせに走るのが早く、又釣や網が非常に上手であつた。少年の頃東京でどこかの書生をして居られたらしく、さういふ話が教場でよく出た。私は尋常三年の頃だつたか、「旗もどし」といつて、二組を分けて早く旗を返すリレー競走をやつて居る中に、すべつてころんだ。さうして起き上らうとすると、左の腕がぶらんとなつてしまつた。私の父は醫者ではあつたけれども、それが外科的手術だつたせゐるか、縣立病院の治療を受けることになり、寒川先生につれて行つてもらつた。骨折の治療をする爲であらう、私は麻藥をかけられた。その麻藥の甘いしつこいや

うな香と、その時ムニヤムニヤとか何とかいつた自分自身の聲とが、未だに私の記憶に残つて居る。私の左腕はその爲少し曲つて居るが、それを意識することも稀な位に、それは遠い昔のことになつてしまつた。寒川先生のことも前に書いたことがあるから端折らう。ただ後から種は川上眉山の『寶の山』だと氣づいたのだが、忍堅藏といふ人が千辛萬苦の末に目的を達する話を、先生がされた時には、實にかたづを呑みつつ全身の興味を耳に集めて、それを聞いたことを書いておかう。先生は今神奈川に住んで居られるが、つい近年までは近海に出て、盛に大鯛などを釣り上げて居られたさうである。この頃の時勢の下に先生の釣の景氣がどうであるか、暫く消息に接して居ない。

吉田先生は獨身で學校の中に住んで居られた、時々學校を休むことも、紅い顔をして教場へ出られることもあつた。その住んで居られた家には、紅い表紙の『帝國文學』があつたりした。思ふに先生は當時の文學青年であつたのであらう。先生は當時からよく黑板に繪を描いて、我々を樂ませて下さつたが、今も乏しい生活の中に繪を描き、句を樂しんで居られるやうである。この二人の先生から別に著しい感化を受けたのでもないが、やはり昔の先生は懐かし。

中學時代には、世に「坊ちゃん」の山嵐のモデルだといはれて居る渡部政和先生の數學の教授が一番印象に残つて居る。「坊ちゃん」に出て居る山嵐の事實と合致することは、ごく僅かしかないのであるが、その性格や詞つきには先生を躍如たらしめるものもある。總じて「坊ちゃん」の中の人物には、モデルをそのままに取つた人物は一人も居ず、ただ或る實在の人間の或る特色をはつきり擱んで、作中に躍動させて居る所はある。私は渡部先生によつて、幾何に興味を覚え、作圖題などを好んで試みたものであつた。當時私が中學で接した先生の中には、東北帝國大學に居られた數學の林鶴一先生や、第二高等學校長をやられ、安井曾太郎君の筆によつて恐らく長く後世に遺るだらうところの、玉蟲一郎一先生があり、又板垣大將の多分長兄だらうと思ふ板垣政一先生があつた。玉蟲先生は、私の中學に入るに先だつて熊本の五高に去つた夏目先生の後任であり、板垣先生は又その後任である。林先生は何か事情があつたのであらう、京都帝國大學の助教授を止めて我々の學校に來られた。先生からは代數と物理とを教はつた。代數の教科書はスミスの代數學の原書であつたが、しまひの處のパーミュテーションとコムビネーションとの節が、非常に私の興味を引いた。物理は中村清二氏の新しい教科書であつたが、私にはこの本の文章がよかつたといふ氣がする。化學の教

科書は池田菊苗氏のであつたが、これも文章が旨かつた。化學を教へてくれたのは、後に山口高等商業の校長になられた横地石太郎先生であり、明治十七年頃卒業の古い理學士であつたが、今八十を過ぎて尙京都に健在の筈である。私は先生の教授によつて、化學方程式に對する興味を覺えた。先生は古い時代の、主として西洋人の講義を聞いた仲間だつたからであらう、英語がうまかつた。同級で先生と懇意な生徒から頼んでもらつて、時間の中に、シキクスピアの「ジュリアス・シーザー」のアントニオの棺前演説を、朗讀してもらつたことがあつた。かういふことを考へると、その當時の中學生は今の中學生よりも大人だつたやうにも思へる。此等諸先生の中で、一番親しくして頂いたのは林先生である。それは私が中學卒業後續いて一年間、學校の助教諭心得といふものを勤めて、卒業後も先生との接觸が多かつたからでもある。先生は間もなく東京高等師範の教授に轉任されて、殷賑な神樂坂通の裏に、在京中ずつと住んで居られた。私は高等學校から大學時代、よく先生のお宅を訪うては御馳走になつた。私が正月の雑煮をむやみに澤山食つたといふ話は、先生の宅を尋ねる私の知人に向つて、先生が磊落さうな笑聲を伴奏させつつ、晩年に至るまで好んで語られる所であつたらしい。先生は七八年前、松江の高等學校で數學の教授を視察して居られるうちに、

突然心臓狹窄症か何かでなくなられた。先生のなくなられて間もない頃、當時朝鮮に居た私は偶々松江高等學校を訪うて、校長から先生の臨終の御様子を聞くといふ廻り合せになつた。中學時代の先生として忘れられないのは、私を助教諭心得に採用して、私の高等學校にはひるまで母校に置いてくれた、校長の野中久徴先生であつた。この人は松山人としては線の太い、無邪氣で豪傑らしい面白い人であつたが、一度書いたことがあるから略する。

三

私はあまり多くの人々に就いて話したかも知れない。小學校の友達として、今尙かはゆい佛ははつきり残つて居るけれども、その後全く消息を斷つて居る人がある。竹馬會で久しぶりに逢つた中で、山本義民君と武司於菟二君とは、小學時代に最も親しくして居た。山本君は鳥取縣の人で、縣の技師の息子であつたが、當時今高師の附屬小學の生徒がかぶるやうな、紅い房のついた帽子をかぶつて來たりして、中々ハイカラであつた。中學の二年の時別れてから全然消息を斷つて居たのに、一高にはひつた時、寮の部屋割の中にその名を見出しながら、私は不思議にも別に尋ねても見ず、彼も亦私を尋ねることもなく、やつと相見たのは數

年前の竹馬會であつた。武司君は陸軍少將になつてやめた。これも小學以來相見ぬこと四十年もしてやつと會つたのであるが、頭は禿けても昔の面影はやはり残つて居た。

幼友達といへば、正岡子規の従弟従妹の殆ど總てがそれであつた。その中でも今なほ昔に變らぬ親しみを覚えるのは、子規の従弟であつて今正金銀行に居る岸駿である。彼は一種面白い性格の持主であつて、子規と同じやうに垢抜のした書をかく。やはり子規の従弟筋になる藤野準は、やはり幼馴染の伊藤秀夫と共に、下掛寶生の謡をよくし、溫潤玉のやうな人物であつたが、十年ばかり前に死んだ。その長子の淳が、この頃偶々小牧暮潮君の三女と婚するに當つて、私は頼まれて媒妁を務めた。小牧君は私の少年の時、父君が縣知事であつた爲、松山中學に一年ばかり一緒に居たのであつたが、それが一高で又めぐりあつた。けれども互に詞をかはずやうになつたのは、大分後のことであつた。

國の中學からの友達としては久保勉がある。中學を卒業しない内に海軍兵學校にはひつたが、中尉になつて日露役にも従軍した後、職をやめて大學の選科に入り、後ケーベル先生の家に寓して、ドイツ語は固より、先生の感化を受けてギリシア、ラテンの古語に親しみ、今は東北帝國大學で古代哲學史と古代語とを講じて居る。私は中學時代に彼や外二三人の友達

と、よく附近の山に登つた。組の連中は私達のことを變人組といつて居たが、大した變人でもなかつた。私の友達の中で最も多く私に對して親切だつたのは、岩波の外には彼であつたが、私は彼に報ゆる所は少なく、今も尙すまぬ思ひをすることが多い。彼が晩年のケーベル先生に仕へた態度も美はしいものであつたが、天涯の孤客だつた先生も亦、肉親の子に對する心を以て彼に報いたやうである。私が晩年のケーベル先生に親しんだのも、彼との交情を通じてであつた。彼は實に寡欲儉素で求める所の少ない人物である。彼はケーベル先生に倣つてか、久しく獨身で居たが、五十歳を超えて結婚し、今は二人の女の子を愛撫しつつ、森の都の片隅に靜かに學問を楽しんで居る。私はこの舊い友の健康を念ずる心の切なるを覺えるのである。

四

高等學校時代は誰しも思ひ出の多い時代と見えて、自分の居た頃の自治寮を黄金時代のやうに自慢する老人にもよく出食はすが、私に取つてはそれはむしろ恥多く悔多い時代であつた。樂しかつた青春といふよりはむしろ苦い青春(?)であつた。その青春の墓のやうな氣

がして、私は向ヶ岡の地からむしろ足を遠ざける方であつたけれども、十五年も二十年も経つて、靜かにそれを回顧し得るやうになつて見ると、さすが若い時代だけあつて、苦杯の間にも、日のぼつとさしたやうな樂しさも、烈しい感情に任せたり氣を負つて思ひ切つたことをしたりしたこと、少しはある。併し一年落第した外には、別に青春の大した花やかな冒險といふ程のものはないのは、やはり性格の致す所でもあらう。

私の同級生で、ばつと花のやうに顯はれて花のやうに散つたのは、藤村操であつた。彼が華嚴の瀧に身を投じたのは、數へ年の十八歳で、滿十七歳に足りなかつたことを思へば、彼は實に早熟の少年であつた。彼の死は人生に對する煩悶に基づくことは勿論であるが、その煩悶の内容には、或は心にひめた失戀があつたかも知れない。恐らく又自己の天分に對する自信からその懷疑への陥没、純粹に學問をやらうとした若い野心の挫折といふやうなものもあつたらうが、併し自己を問題とし始めた時代の思潮に動かされ、又それをおのづから代表して居たことも事實であらう。彼は體軀の大きな、頬の紅い、眉目の秀でた少年であつた。年の若いのに似合はずユーモラスなところがあつて、人に接しては明るい感興を興へた。彼の死ぬる少し前のことであつた。或る夜彼が母君や弟妹と住んで居た小石川新諏訪町の小さ

な家を尋ねた時、家の中は手風琴や唱歌の聲で賑はつて居たが、彼は家はやかましいからといつて、附近の牛天神の丘に私を連れて行つて話をした。その時彼は畢竟運命は自分にはよいものだといふやうなことを語つた。彼のこの思ひが彼の死とどういふ風に關聯するかを時思ふことがある。

藤村の死によつて私は藤村の親しくして居た藤原正（今の東京高校校長）と親しくなり、彼とは絶えず所謂人生の問題を語り合ひ、自分や自分の生活を否定するやうな詞を繰り返しつつも、又周囲や世間を罵倒したりしては、お互に得意になつても居た。藤原は英語でも獨語でも漢文でも、中々讀書力が勝れて居た。さうして我流の解釋で簡勁な結論を奇抜に表現することに、その頃から長じて居た。私はその點でいくらか彼の烟に巻かれたこともあつた。彼はその當時まだ靜閑な村里だつた田端に住んで居たが、冬の夜などあの山毛櫨の竝木の暗い道を歩きながら、彼が「人生は無だ」などと深刻らしい聲で言つたこともある。その頃まだ電車がなく、夜に入つてから、私は徒歩で田端から九段坂へ出、番町の眞暗な通を平河町の寓居に歸つたこともある。その通にそばやが一軒あつて、たまにはそこでそばを食ふこともあつたが、同じ通の西京焼を買つて、懷の中にぽかぽかさせつつ、むしやむしや暗の中を

食つて歸るのが、先づおきまりであつた。

藤原の外に同級に中勘助と山田又吉とがあり、この二人とも随分懇意にした。中の家へ行つて、夜二時までも三時までも話しこみ、翌日はそのまま午近くまでねたりした無遠慮も、若かつたから出來たのであらう。そんなに話をしながら三日あげずに長い手紙をやりとりしたことを考へれば、やはり自分にも若い時はあつたのである。藤村の死後親しくなつた友人に魚住影雄があり、後に折蘆と號して居た。彼の文章に接したのは、その當時海老名正氏の出して居た『新人』誌上の藤村を弔ふ文であつて、實に名文だと思つた。彼は私より一年遅れて高等學校にはひつたが、はひると直ぐに校友會雜誌に投稿し、その迫力があつて光彩と氣焰とに富んだ文章は、私を非常に引きつけた。間もなく私は彼や青木得三、茅野儀太郎（蕭々）などと一緒に、文藝部委員になつた爲に一層接觸を増して來た。併し彼はすぐに委員を辭して、その代には笠間杲雄がなつたけれども、彼はその後も校友會雜誌に、「自殺論」だとか「皆寄宿制度廢止論」だとか、調子の昂揚した文章を寄せ、後者によつて危く鐵拳制裁を受けようと思へした。私は彼の文章に現はれた情熱と信念とに壓倒されたのであるが、彼と親しくして居る中に、むしろより多く彼の多感と動搖とを知つて、一時は興し易いとい

ふ感じをさへ懐いたが、結局に於いてやはり彼の得易からざる才分と性格とに敬意を表した。一時彼は殆ど毎日の如く私に手紙をくれた。彼と私とは組が違つて居たのに、彼は私の教室にやつて来ては、其等の手紙を手渡すのであつた。彼のその頃の手紙は、今は絶版になつたが『折蘆遺稿』に載つて居る。彼と伊藤吉之助、宮本和吉、小山鞠繪、山口重知と私とは、一緒に東大で哲學を學んだが、彼は學校を出た翌年にチフスと腎臓病とで死んだ。小山、伊藤、宮本は大學教授をやつて居るが、山口は風變りに今私の住む淀橋の區長をして居る。魚住は實に氣の細かなまめな男であり、かういふ性格の違つた連中が學生時代に親しくしたのには、魚住の中に立つ斡旋によるが多かつた。魚住は小柄な男で、髻が濃くて、そり立ての頬は青かつた。聲は少ししやがれて落着きが少なかつた。彼の文章は高等學校以後はむしろ光彩を失つた。併し彼が最後の病氣前まで書いた手紙と日記とは、實に魚住その人との生活とを如實に表現する名文であつた。彼は實に手紙と日記とを書く爲に生れて來た人といつてもよい位である。彼の日記の大部分は私の所にあるが、それを出版するやうな機會は、今は一層得難くなつて來た。魚住は情熱に充ちた才人であつた。一生殆ど戀愛なしには生きられぬ人であつた、さうして失戀の哀しみをさびしく抱きつつ、若い命を終へた。彼の働き

は頭と心臓とばかりでなく、四肢に於いても勝れて敏活であつた。青白い柔弱漢だと思はれて居た彼が、體操の時間に鐵棒に飛びついて大車輪をやつてのけた時には、級中のもものがあつてに取られたさうである。

私達の級は一年の時は成績が好かつたが、二年になるとなまけ癖がつき、一擧にして十七人落ちてしまつた。私もその仲間であるが、外に同盟通信をやつて居た岩永裕吉、不屈な正論譚義の士なる渡邊鐵藏、飄逸脱俗の風格の持主で今航空協會か何かに居る佐藤吉郎の外に、私の組に落ちて來て又一緒に落ちた岩波茂雄もあつた。頭は非常によかつたが、眉宇の間に氣味わるい暗さを湛へ、その癖わざと幫間のやうな口調で快活を裝つて居た笠川彬も、この時の落第組である。彼はあたらその才を伸ばすこともなく、田舎で死んでしまつた。

私はかくして二つの組の同級會に出る資格を得て居る。私は級友に對して別に求める所も求められる所もない。かうした關係で、五十を越えて集まる同級會はやはり楽しい。初の級では、藤沼庄平は寄宿舎で一年同室であり、よくふざけあつたものである。その時同室の工學士に渡邊讓吉があり、代々幡に彌滿和製作所を經營して居る。この間招かれて工場を見たが、苦心十八年の末歐米の精良品に劣らぬねぢを造り出して居る。彼の努力は偏にねぢにの

み向けられ、品物が一定の理想に達しない内は、賣出しもしなかつたさうである。軍需インフレ及びそれによつて懷を肥すものが多い中に、この本當の仕事をやつて居る友を頼もしいと思つた。

岩波のこと、魚住を介して親しくなつた潤達な才人だつた江木定男のこと、茅野肅々夫婦のこと、先生としてのケイベル先生や夏目先生のこともあるが、これは外の機會で書いたから今はやめよう。現在親しくして居る小宮豊隆や和辻哲郎や野上豊一郎夫婦のことも略しよう。

私は尊敬し親愛する師や友を持つたことを仕合せには思ふ。併し特に一人二人に深く傾倒して、その爲には死をも尙辭しないと思ふ人はない。私が死ぬる時この人と別れたくないから死ぬぬといふ人はなさうである。併しそれは私につきまとふ一つの寂しさかも知れない。

(昭和十六年十二月十二日)

野上のこと

野上と知り合つてから既に四十年になる。明治三十五年の秋に初めて一高の生徒になつた時、同じ組の中に前から馴染の野上豊一郎といふ名を發見したので、先生が出席簿を呼び上げる時に注意して見た所が、私の三列位前にその人が居た。もう少し瀟洒たる才人らしい風貌の持主かと思つたのに、存外風采の揚らない、併し體軀は長大な、九州男子らしい男であつた。今の野上は伎樂の面を思はせるやうな顔附に、齡と共に一種の風格をも帯びて來たが、その頃はまだ少しキザな所もあつた。どうしてその前に野上の名を知つて居たかといへば、その時分大町桂月を主筆とした『中學世界』といふ雑誌が、博文館から出て居て、これは『少年文集』といふ少年投書家の雑誌の改題したものであつたが、野上は度々この雑誌に投書して賞を得て居たからである。私は一度も投書したことはないけれども、雑誌を見て居た爲、

自然野上の名になじんだのであつた。

その頃、今京都帝國大學に居る野上俊夫君、それから今國學院長をして居る河野省三氏なども、盛に投書しては賞に選ばれて居た。野上の姓が二つ出て居たといふことも私の注目を引いて居た。その頃の野上の文章についてはたつた一つの記憶がある。野上の楠公論の中に、楠公を評して「鐵衣を着た宗教家」といつた詞を、選者の桂月がほめて居たことである。

私は二年間野上と同じ組であつたが、一高時代にはそれ程親しくなかつた。従つてその頃人々によつて野上の妹といはれて居た、今の野上夫人に御目にかかる機會もなかつた。野上と親しく往來するやうになつたのは、大學時代の末、高濱（虚子）さんの勧めで、夏目先生や我々が、謠を寶生新先生に習ふやうになり、同時に高濱さんが國民新聞の國民文學欄を主宰したり、夏目先生が朝日新聞の朝日文藝欄を主宰したりして、夏目先生を中心に集まる機會が多くなつてからである。

それ以來野上との交りは今に變らず、殊に野上の次男と私の長男とが又同窓であり、同じやうな理科の學問を通じて親しくして居るといふ、親子二代の交りであるのみならず、私は野上の家庭の友人として、野上夫人とはいつの間にか會へば、必ず互に憎まれ口をきくやう

な間にもなつた。

法政大學が新大學令によつて大學となつてから、私が法政に出ることになつたのも、野上の勧めである。私が法政を去つて朝鮮へ行くことになつた時、野上は固よりこれを歡ばなかつた。併し當時私の法政に對する關係は野上と違つて居たし、又私は法政を「ついの住家」と思つて居なかつたので、遂に法政を去ることになつた。その時野上はかなり強い詞で、僕は「法政を立派な大學にして見せる」といつて居た。野上は當時學長松室さんの信任を受けて、名は豫科長であつたが殆ど法政の樞機に參して居たのだし、恐らく法政を死所とする決心であつたらう。さういふ野上がこの言を爲すのは、固より當然のことである。

その野上が六七年前のやうな排斥に會ふといふことは、恐らく野上の豫期しなかつたことであつたらう。而も野上を排斥した連中の中に、野上が世話して法政へ入れたり、或は色々親切を盡した連中の多かつたことは、殊に野上を憤らせたであらう。松室さんの信任が野上に鍾まつた爲に、野上があまりに多くの仕事を負擔し過ぎ、その爲もあつて、野上に色々指摘せらるべき缺點も過失もあつたらうとは思ふが、併しああして二十年の心血を法政の爲に捧げ來つた野上の心事を思ふ時、又兎にも角にも新しい法政を築き上げたその功績を思ふ時、

松室さんの死後間もなく起つたあの事件は、實に遺憾に堪へない。殊に生前松室さんの眷顧を受け、松室さんの業を嗣いだ人が、一身の安泰と無事とをのみ願つて、この事件に一臂の力をも惜んだことを、憤らざるを得ない。

聞く所によると、野上は今度文學部長として法政に復歸することになつたさうである。若し私が野上であつたら、これはどうしても承知し難いと思ふが、かうして歸することも、野上と法政との深い因縁のせむであらうし、又野上の淡々たる性格にもよることであらう。野上は一面非常に屈託のない所がある。事件の紛糾した最中にも、常によく眠つたさうである。野上は法政を追はれて後一層活動力を増し、自分の研究領域を開拓するばかりか、實に多産的に仕事をやつてのけた。法政の當事者が野上に復歸を懇請したのは、自分達の前の處理を悔いてこれを改るに憚らなかつたといふこともあらうが、又野上の名聲の却て世間に高くなつたのを買つたのかも知れない。野上は誰にも親切である。併し私は野上の親切があまりに多く約束を與へぬことを希望する。それは約束は中々實行のむづかしいものだからである。

(昭和十六年神武天皇祭の夜)

眞鍋さんの想ひ出

眞鍋さんは松山中學の御出身であります。私が松山中學に入りましたのは、夏目先生が熊本の五高に轉任され、眞鍋さんがちやうど卒業された年であります。

私は小學校の時既に、眞鍋さんといふ非常によく出来る人が中學に居るといふことを聞いて居ました。さうして多分兄に教へられたのでせう、猫脊(松山地方では「どうせんご」といひます)の眞鍋さんが、街頭を歩いて居られる姿を時々見て、ひそかに尊敬の心を寄せて居ました。子供の時は、學校が五年も違ふと非常に大人のやうに思はれます。當時の眞鍋さんは、その後東京で逢つた時と殆ど違はないやうな大人として、少年なる私の眼には映じて居ました。眞鍋さんは中學を卒へると一高を志されました。私の聞くところに依りますと、その時分一高の三部(醫學志望)は、ドイツ語でなければ入れなかつたさうで、その爲眞鍋

さんは、東京で一年間ドイツ語をやつて後、一高へはひられたと傳聞してをります。後年私も一高にはひりましたが、その當時、昨年物故された有名な岩元禎といふ先生があまりして、御宅へお訪ねした時、先生は一高での教へ子で法科へ行つた同郷の先輩家安二郎氏の學才を讃へて、その夭折を惜しまれました。話が郷里のことから更に眞鍋さんにも及び、先生は眞鍋さんを教へられなかつたが、醫學の方では日本でも貴重な人だといふことを言はれましたので、私もそんなえらい人かと、一層尊敬の念を加へたのでした。併し私はその頃眞鍋さんをお訪ねしたことも、お目にかかつたこともありませんでした。これは自ら進んで交遊を求めない私の性癖から來たことであります。眞鍋さんにはその後、漱石先生のなくなられた年に久しぶりにお目にかかりましたが、その時は殆ど眞鍋さんの話を聞くばかりで、私からは何も詞をかけませんでした。互に詞を交はすやうになつたのは、つい十年位前からかと思ひます。

正岡子規の歌に「武藏野に秋風吹けば故郷の新居にわかの郡の芋をしぞ思ふ」といふのがありますが、眞鍋さんはその新居郡の生れで、伊豫では「ひがし」といつて居る地方の人です。それで思ひ出すのは、もと眞鍋さんと同姓であつて、さうして私の親戚の養子になつた岩井禎

三といふ、長く赤十字病院に務めて居た人がありますが、私は高等學校時代にその家に置いてもらひ、そこから通學して居ました。まだ電車の少ない頃で、麴町の平河町から牛込見附へ出ましたが、その見附の今眞鍋さんの邸のある近所に、弘田長といふ表札の出た邸がありました。その方が大學の先生だといふことは知つてをりましたが、その門から學校へ通ふ一人の令嬢を見ることが度々でした。これが或は先年なくなられたと聞く眞鍋夫人ではなかつたかと思つたことがあります。つまらぬことながら申し添へました。

眞鍋さんに親しくお目にかかつたのは、前にも申した如く夏目先生がなくなられた時でした。眞鍋さんは主治醫であり、且夏目先生の舊生徒でありました。初七日の時でしたか、多人数先生の弟子が集まつた時、眞鍋さんはどうして自分が青山内科の後を繼ぐに至らなかつたかといふ事情を、随分細かに、さういふこととは關係のない、又眞鍋さんとは親しくもない、みんなの前で話されました。眞鍋さんといふ人から直接印象を受けたのは、その時が初めてであり、私は眞鍋さんをよくいへば率直、わるくいへば自分のことに抱泥して相手を顧みない人だと思ひました。

先程からいろいろ眞鍋さんに對する御讃辭があり、或はその人柄の誠實や態度の公明を述

べられました。私は決してそれを否定致しません。併し私からいへば、眞鍋さんの性格は非常に率直であると共に、又随分矛盾に富んで居られたと思ひます。眞鍋さんの態度は公明であると共に、又我執にも強いところがあつた。併しその我執の強さが、眞鍋さんの我をぶち抜いて我を忘れさせたといふ所もあつたのではないかと思ひます。かうした矛盾と矛盾のおのづからなる超越といつたやうなものが、眞鍋さんといふ生きた人間を造つて居たと信じます。これはあまり接觸のない私の側面観でありまして、果して中つて居るかどうかは分りません。

眞鍋さんを外から見ると、せつかちな處としつこい所とが感ぜられます。併しこの二つは共に眞鍋さんの自らを詐らないところの、即ち眞鍋さんといふ人の直接な露骨な表出だと思ひます。

眞鍋さんが方言むき出しの訥々たる辯舌で、疊みかけ疊みかけ話をする時、眞鍋さんのせつかちを感じずには居られません。併しその話振りが幾度か駄目を押して繰返しを厭はぬところに、今私のいつた「しつこさ」があります。眞鍋さんは自分の思ふこと興味あることは、相手の如何を思ふ餘裕のない程、いつてしまはねばおかぬといふ所があります。それと同時に

にそれを克明に遺漏なく話すといふ所があります。さうしてこれが眞鍋さんをして、自分を詐らず、又その極は相手を忘れ自分を忘れしめる、所謂「三昧境」に入らしめたものかと思ひます。上にいつたいの意味でのせつかちとしつこさ、即ち總てをいい加減にせず、細かに克明に追究して行く所は、恐らく眞鍋さんの學風にもあつたのでないかと想像します。

眞鍋さんに就いて一つの思出があります。誰でしたか漱石先生の「坊つちゃん」を演出した時、眞鍋さんは頼まれてか進んでかそのコーチャーとなり、その當時の松山中學の生徒は、そんな帶の結びかたはしなかつたとか、そんなに懦弱ではなかつたとか、恰も「坊つちゃん」を松山中學の事實の模寫であるが如くに取扱はれました。實際眞鍋さんは松山中學が「坊つちゃん」に取り上げられたことを、松山中學の名譽と考へて居られたのです。この考が眞鍋さんのコーチ振りに現はれたわけです。私は「坊つちゃん」の材料が松山中學から取られたことを否定しませんが、あれは漱石先生の創作であつて、事實そのままの描寫とは思ひません。若しさういふ描寫だとすれば、それは決して松山中學の名譽でも何でもありません。かういふ考へ方に於いて眞鍋さんは、失禮ながら如何にも田舎者らしい幼稚さ、素朴さを持つて居られました。かういふ所が、眞鍋さんをして一面非常にガムシヤラな言動を爲さしめた

所以でせう。

初めて遇つた時、自分の大學の位置に關することを私達に逐一話されたことも、眞鍋さんが如何に自分自身の問題に執着の強い人であつたかを示すとも思ひますが、併し同時にそれを取りすまして飾らない所に、眞鍋さんの天真を見ます。その上眞鍋さんにして見れば、その自分の不遇が、如何に公正に反くかといふ信念に充ちて居たといふことは分ります。かういふ態度を以て眞鍋さんを憎んだり輕んじたりするわけには行きません。

私は郷土の尊敬すべき先輩でありながら、遂に眞鍋さんと親しくして頂く機會を得ようと努めませんでした。ただ私の見た處によれば、眞鍋さんは人の及ばぬ長所美點をすばらしく持つと共に、又短所の多い人、その短所を露骨に出す人、我執と忘我、我儘と正義といふやうな矛盾を持つて、又その矛盾を相當むき出しに出された人のやうに思ひます。さういふ點に於いて眞鍋さんは最も生き生きした人間だつたといへるでせう。

一冊の手帳

一冊の小さな手帳がある。これは歐羅巴に居た時買ったものである。ものはバリのものらしい。ヴィクトル・ユーゴー通と記したその店の名が表紙の裏にある。

五十枚もあるらしいその中には、色々なことが一ぱいに順序もなくめちやめちやに書きちらされて居る。しかしそれをぢつと見て居ると、私だけには色々な思ひ出が浮んで来る。

Raymond Klibansky (ライモンド・クリバンスキイ)といふ名が初のページにある。これはハイデルベルヒ大學に居た學生である。彼は身體の小さな、血色のよい、二十一二歳の青年であつた。その下にオペラ廣場の近くのモーツァルト廣場二九番とあるのは、フランクフルト・アム・マインにある彼の家の番地であつた。私は彼と分れる時、フランクフルトに行つたならば、彼を訪ふことがあるかも知れないと思つて、それを書き留めて置いたものであらう。ライモンドといふ前名は昔の有名な猶太學者にもある。彼は獨逸に國籍を有する猶太

人であつた。彼の父がバリで持つて居た家産は、戦争の時に全部佛國政府によつて没收されたといふことである。その爲でもあらう、彼は我々日本の留學生に古典語を教へて、學資を造つて居た。私も彼に希臘語を習つて居た。彼と今一人の猶太人學生であるワルター・ゾルミッツといふ青年とは、共に或る英才教育の學校を出て、十二三歳頃から希臘羅典語に習熟して居るから、その造詣は中々日本の學者などの及ぶ所ではない。一週二度の彼の時間は、實に緊張したものであつた、彼は文典を講義すると直ぐそのエキザイサイスをやる、さうしてどしどし遠慮なく衝込んだ質問をするので、私も額に汗をにじませて、彼の緊張に應ぜざるを得なかつた。ゾルミッツには羅典語を習つた。彼はクリバンスキイよりは身體も長大で、クリバンスキイほど緊張した感じはなかつたが、教へ方は中々旨かつた。私はハイデルベルヒを去る前に、この二人の學生と一緒にネッカーを溯つて、ウォルフスブルンネン（狼の泉）と稱する泉の側のレストウラントで、午食を共にしたことがあつた。その時の皿の中にあつた川魚の料理を、二人共に非常に喜んで喰べたのを記憶して居る。手帳の他のページにはゾルミッツの番地が、ゾルミッツの自筆で書かれて居る。それにはブルンシュワイクのボーデ街十二番地三階とある。ブルンシュワイクには相當にいい畫廊もあるし、行ければ行つて見

たいと思つたのであるが、それは遂に果さなかつた、其後フランクフルトを尋ねた時にもクリバンスキイには遇はなかつた。彼等と往來して居たのは大正十四年の夏であつたが、彼等は今はどうして居るであらうか。クリバンスキイの方は、古典語の知識に於いて、ハイデルベルヒのホーフマン教授にも重んぜられて居た。私は二三年前に出たハムブルヒ大學のカッシーラー教授のルネッサンスに關する著述の中に、クリバンスキイがラテン原文の校訂をやつて居たのを見た外に、彼の消息を詳かにしない。兎に角この二人の青年の印象は私にはよかつた。彼等は恐らく相當な學者になるであらう、又なるであらうことを祈る。

震へた字で *E. Niskas* とかいて、その下に勤先を書き、その勤務時間が九時から十二時、二時から六時とあり、その住所の番地も書いてある。これは考へて見ると、瑞西のインターレーケンからユングフラウへの登山電車の中で逢つた老人である。大正十四年の夏、スカンディナヴィアの旅を終へて、ハンブルヒ、ドレスデンから、チェックスラヴキヤやオーストリアの旅を経て、瑞西へ入つた十月の初であつた。電車の中の飄輕なこの老人の風采は、私の注目を引いた。彼は汚い洋服を着、さうして胸の所にはセルロイドの挟みに入れた地圖をぶらさげ、頻りに左右の窓の間を動いては、山の景色をながめて地圖と比べ、さうしてそれ

を私に説明してくれたが、その詞はよく別らなかつた。恐らくは私がその時ニュルンベルヒへも行くといふことを話したので、彼が私の手帳にかうして所番地や務先を書いてくれたのであらう。電車の進行中に書かれた彼の文字は讀みにくい、彼は美術館に務めて居る人であつた。私は豫定通りそれから一月も立たない内にニュルンベルヒへいつたが、やはり彼を尋ねる機会を得なかつた。私はその時この老人と一緒に會つた、たしか商業學校の學生だといつた瑞西の青年の面影を忘れ得ない。彼は西洋人にしては髪が黒い、ちよつと日本の慶應義塾あたりの學生のやうな感じのする青年であつたが、その態度には鷹揚でさうして上品な好もしい所があつた。かの老人はこの青年を捕へて如何にも親しさうに話して居たから、同行者かと思つたところがさうではなかつた。この老人は誰をつかまへても親しく話す種類の――世界のどこにもある愛すべき人間の一人であつたらしい。

その次のページにはペンで句のやうなものが書いてある。

落葉ちりしくムゼウムの庭

とあるのは、その頃連句に一寸興味を持つて居たので、こんな句を作つて見たのであらう。それにはたしかに記憶がある。秋も大分ふけてニュルンベルヒに入り、その有名な完備し

たフォルクスムゼウム（民族博物館）を曇つた午前を訪うた時、門をはひるとすゞかけだつたかの落葉が一ぱいに散りしいて居た。私はガサガサとそれを踏んで玄關へ上つて行つた。材木に霜薄白きドナウ河

これも連句の一鎖にしようと思つて記したものらしい。たしか南獨逸の小都レーゲンスブルクを訪うた時である。この都の近くでは、ドナウ河は上流で川幅もまだ狭い。この句はその實景である。朝早くあすこからワルハラへ行かうとした時だつたか歸りかだつたらう。

このレーゲンスブルクの町へ停車場からはひる途中の公園みたやうな所に、星學者ケプラーの記念碑がある。どうした因縁かその時には分らなかつたが、この頃讀んだケプラーの傳によると、たしかケプラーは馬に乗つてレーゲンスブルクに近づいた時に病死したのである。それもレーゲンスブルクの市廳（？）が約束の年金を拂はないのを、催促に來たのだといふ。ケプラーのやうな世界の學問と思想とに大きな時代を劃した人物が、かうしたみじめな最後を遂げたのかと思ふと、實に感慨無量である。

更に先のページに。

Prof. Karl Gassner, Kristiansund である。これはノルウェイのフョールドを旅行して居

た時、船の中で逢つたオーストリア人であつた。時は少し前の八月初になる。彼はノルウェイのクリスチアンスンの高等学校の先生をして居るといつた。さうして日本の稲葉とかいふドクトルを知つて居るといひ、このドクトルによつて自分の履歴書を日本の文部省にも出した、自分は日本へ行つて教師をしたい、といふやうなことをいつた。彼は更にその細君の寫眞を出して自分に見せた。西洋人のかうした初對面の外國人にも示す親しさ——それも一向不自然でない——と、その自分の周圍に廻らす垣とがどういふ風に調和するかは、私のやうな西洋人と長く交はらぬものには、よく分らない。尤も西洋人といつても、國民により個性によつて色々あるには違ひないが、日本人で、初めて逢つた外國人に自分の女房の寫眞を見せるものは、恐らくはあるまい。併し西洋人には、私の逢つた僅かの例でも、これに似たやうなことは時々ある。それは兎も角、戦争後一朝にして小弱國となつたオーストリアには、かうしてちりぢりに遠い國に職を求めて居る人々も少なくはないであらう、私はこの好人物らしいガッスナー君が今どこにどうして居るかを思ふ。歐羅巴の北邊の船中で一時間ばかり彼と話したきりで、その後何の知る所もない彼の縁は浅いともいへる。併しかうして逢つたことがもう既に深い縁だともいへる。何れにしても私は少し雨氣をもつた海上に、皮の雨

外套を着て居たこの若い紳士を忘れ難い。

一冊の手帳もかうした断片について一々記憶をたどつて行つては際限もない。夜も更けたもう筆をおかう。(昭和五年二月二十四日京城にて)

6

下落合より

—

歸京してからいつの間にか二ヶ月たつた。その間舊知との會合も度々あつて、何れも楽しからざるはなかつたが、中にも嬉しかつた一つはX君一家と共にした晩飯であつた。X君は京城の或る大銀行の重役をして居て、學校は私よりも四五年後であつた。私の一人住居の荒寥を憫んで、年に二三度は晩飯に招待してくれた。飯がすんで僅かの酒で私が上機嫌になつて來る頃、當時十五六を頭のお嬢さんたちが、餘興にダンスを見せてくれる。獨演もあれば共演もあり、家に遣つた一人の坊ちゃんも歌の方を一役務めるのである。おとうさんは私の招かれた機會に始めてこのダンスを見るといふわけで、お嬢さんたちは私の來る時を楽しみにして、紙で衣裳を作つたり、合唱の稽古をしたりすると聞かされて、私は心中實に誇を感じ

じたのであつた。然るにX君は有爲の才を抱いて五年前に突然病死した。それ以來此等の親愛なるお嬢さんや坊ちゃんにも會ふ機會はなかつた。ところが今度歸京すると間もなく、X夫人が手紙をよこして、その端に、子供が先生のお宅へつれていつてくれ、先生をお招きしてくれ、といふと書いてあつた。私達は一夜サンドウィッチとライスカレーとの御馳走で、夫人と四人のお嬢さんと一人の坊ちゃんを招待した。食後先づ主人側として家の男の子と娘とがピアノをやつた。もう二十二になつたX君の長女を初として、當時赤ちやんで今は小學の二年の末のお嬢さんまで皆ピアノを弾いた。後は古い新しい唱歌を取り交せて兩方が合唱し、私も大に伴唱を試みた。楽しい一晚であつた。潑刺たる青年を相手にする學校の校長は愉快でもあるが、併し校長といふ仕事は小面倒なものである。かういふ一夜を過すと、もうかうした夜々だけで晩年を送りたいといふ誘惑を感じる。さうなつてしまつたら或は退屈でもあり、向ふもさうさう相手はしてくれないかも知れない。併し私は朝鮮のことを思ふ時にも、方々の家庭で知合になつたかういふ少年少女のことを思ひ、——そればかりだといつてはうそになるけれども——札幌で出來たさういふ新しい友達のこととも忘れかねる。東京にもさういふ仲間はない。私の現在の生活が苦痛に充ちて居るといふわけではないが、

併し私はこの無邪氣な朗かな友情(?)を誇としたのである。(昭和十五年十一月十八日朝)

二

こちらへ來て以來、幸に生徒との接觸については不愉快なことがなかつた。これは一面にはまだ接觸の淺いことをも示すものであり、接觸が深くなれば、さう愉快なことばかりはないだらうといふことも、覺悟はして居る。併しそれだからといつて、今から別に愉快な經驗を忌避しなくてもいいであらう。

近頃かういふことがあつた。二人の生徒が或る處置に就いて私に抗議しに來た。先づ二人とも禮儀が正しく、態度の慇懃なことが氣持よかつた。その中の一人のみが隨分長々と辯じたから、私は他の一人に對して君はどう思ふんだと聞いた。ところが彼はしやべつた生徒の名を指して、私は××とは反對の意見で先生と同じなのです、といつた。さういはれた生徒も意外なやうな顔をして、暫く相手の顔を見て居た。聞いて見ると、二人は中學校以來の仲よしで、一人が私に抗議を持つて來る時に、おい一緒に校長の所へ行かう、とでもいつて引つぱつて來たものらしい。私はそれを知つて思はず微笑した。相手の二人も微笑してやがて